

「逃げる術なし」

ヤントレ

1

人物

久慈孝志	(24)	警視庁坂本班所属
坂本康太	(35)	警視庁坂本班班長
新保瞳	(23)	久慈のルームメイト
兼光菜々子	(26)	警視庁坂本班所属
三瀬由之助	(27)	警視庁坂本班所属
武部誠二	(33)	警視庁坂本班副班長
秋葉良則	(24)	警視庁坂本班所属
榊原賢	(26)	警視庁坂本班所属
大垣敏光	(27)	警視庁坂本班所属
曾我康生	(29)	警視庁坂本班所属
望月弥生	(61)	久慈のルームメイト
古賀孝時	(61)	警視監
清水優子	(34)	新聞記者
喜屋武海翔	(26)	警視庁坂本班所属
佐野珠理	(28)	久慈の近隣住民
名倉沙羅羅	(26)	佐野の後輩

【あらすじ】

警視庁坂本班は逃走している犯人及び容疑者の逮捕だけを専門に行ないます。メンバーには坂本班長、長距離ランナー、短距離ランナー、射撃、ルマンドライバー、ラガーマン、ライダーのスペシャリストがいます。主役の久慈はオペレーターでスパコン・グループ・関東全域防犯カメラ集中監視システム、通称アイモンドアイで犯人を見つけます。高性能ドロウンの助けを借り、スペシャリスト達が犯人を捕まえます。ドロウンと監視システムは法律に抵触している所以他们は表に出ることを望まないのですが、逮捕の際に野次馬に撮影され、有名になっていきます。チームは田舎もん、スポーツバカを自認していて、平時は方言が出てきます。対して逃げる犯人はパルクール、電動キックボード、ハンググライダー、ドリフトカーなどで抵抗します。前半はランボーナイフと電動キックボードを使用する連続コンビニ強盗犯ランボーキッカー、後半は

女性6人を拉致し、外科手術をする猟奇犯、  
令和の鬼畜・北田を追います。久慈は凡庸な  
男でトランプタワー麻布の最上階に書道の先  
生と2人で生活しています。外大院生の新保  
が転がり込んできてからは賑やかになり、  
徐々に女性が増えていきます。坂本班の行動  
を不審に思った新聞記者清水などもからんで  
物語は進んでいきます。

シーズン2は令和の鬼畜・北田を取り逃がし  
た大失敗によりチーム解散の危機を迎えると  
ころからスタートします。巨大なヒグマOSO<sub>4</sub>  
19を捕獲、放火犯を捕まえ、そして再び無  
人島に逃げ込んだ北田を追っていきます。

## 第1話

○麻布・コンビニ・中（夜）

レジが2台、並んでいる。

久慈孝志（24）、弁当を買って、スマホ決済をしている。

新保瞳（23）、隣でリップクリームを買い、カード決済をしている。

店員1、店員2、会計をしている。

店員1「いつもありがとうございます。タワマン刑事！」

久慈「おう」

瞳、怪訝な表情で久慈を横目で見る。

瞳「この人刑事さんなの？ タワマン刑事って何？ 意味わかんないけど」

店員1「隣の最上階ですよ」

瞳、驚く。

瞳「隣って？」

店員1、弁当を温めている。

久慈、前を向いたままボソッと呟く。

久慈「警視庁だが刑事ではない」

瞳、カードを財布に入れながら、じつと久慈を見ている。

瞳「そうね、刑事って顔じゃないわ」

久慈、少しムツとして、徐に横を向き、

久慈「喧嘩売ってる？」

瞳「私、刑事さんって嫌いだから」

久慈「そうなのか」

レンジがチン。

瞳、店員2からリップクリームを受け取ったが、動かない。

店員1、レンジから弁当を出し、袋に入れ、久慈に渡す。

6

○同・前（夜）

久慈、コンビニを出る。

瞳、速足で久慈を追い抜き、隣のビルを見上げながら立ち止まり、振り返る。

瞳「もしかしてここに住んでるの？」

久慈「そうだよ」

瞳、表情が一変。

瞳「トランプタワー麻布だよ！　ずっと憧れてた！　最上階なんですよ、見てみたーいな」

久慈、あきれてる。

久慈「突っかかってきたと思ったら、何を言  
い出すやら」

瞳、にこしながら久慈を見つめて  
いる。

久慈、少しためらってから、

久慈「まあいいか」

瞳、飛び上がる。

瞳「えっ、いいの？」

瞳、きりっとした表情で、

瞳「部屋に行くからってふざけたことしない  
でよ」

久慈、さっさと歩きだす。

瞳、ゆっくり歩く。

久慈「おい！　見たいならさっさと来いよ。

弁当温めてくれたのに冷める」

○トランプタワー麻布・居住者専用エントランス（夜）

広々とした空間、エレガントな雰囲気、  
広いロビーがある。

久慈、歩いている。

瞳、久慈の後方で緊張しながらついて  
いく。

立っているガードマン、座っている正  
装の男性コンシェルジュ。

ガードマン「お帰りなさい、タワマン刑事！

今日もご苦労様」

久慈「よっ」

瞳、くすっと笑って手で口元を押さえ  
て、小声で、

瞳「なーんだ、ここでも呼ばれてるんだ」

コンシェルジュ、久慈を見て、軽く小  
指を立てている。

コンシェルジュ「お帰りなさい」

久慈、顔をしかめながら、人差し指を  
左右に動かしている。

○同・高層階専用エレベーター・前（夜）

瞳、トランプタワー麻布のGUIDE

PLATEを見ている。内容は高級店が3

0件以上、ミニゴルフコース、ドライ

ビングレンジ、ドッグラン、ジム、ワ

ーキングスペース、パーティールーム、

展望台、サウナ、大浴場、ゲストルー

ム、プールなど

○同・高層階専用エレベーター・中（夜）

エレベーター内は二人だけ。

瞳、ふーっと息を吐いて、

瞳「すごーいすごーい！ 88階建てかあ、

このエレベーター超速い、プールは55階

にあるんだ。たくさん有名人が住んでるよ

ね」

久慈「かもな」

○同・久慈宅・前（夜）

瞳、振り返っている。

久慈、セキュリティカードをあて、鍵を開ける。

瞳「最上階にはドアが一つ、ってことは専有してるの？」

久慈「住居は専有している。向こうにはパノラマラウンジがあるけど、ここからは行けない」

瞳「贅沢すぎる」

○同・久慈宅・リビング（夜）

最高級の部屋。（テレビ、扇風機、冷蔵庫、炊飯器）を除いて最高級の什器。

瞳、呆然と全体を見ている。

久慈、弁当を机の上に置く。

望月弥生（61）キッチンからリビングへやってくる。

瞳「メチャクチャ広い、信じられない、これが最上階かーっ、いくつ部屋があるんですか？」

久慈「待て待て、先に紹介する、望月さん、

書道の先生で母親の友人」

瞳、ぺこりと頭を下げる。

瞳「望月さん、すみません、突然押しかけて、新保瞳です、東京外国語大学の大学院生です」

久慈、驚いている。

弥生「よくいらっしやいました。新保さん、いくつ？」

瞳「23です」

弥生「かわいいし、こんな才媛の方とどこで知り合ったの？ お母さんに知らせなきゃ」

久慈「しなくていいよ。隣のコンビニにいたら刑事は嫌いって言われて、なぜか部屋を見せてあげること。こいつ口悪いよー」

瞳「余計なことは言わない！ へへへかわいって言われちゃった」

弥生、呆気に取られて、

弥生「まあー、コンビニとはね、専攻は何？」

瞳「英語が第一で、ドイツ語、イタリア語が得意で、韓国語、スペイン語がまあまあ」

久慈「おいおい！ お前！ そんなに喋れるのか」

瞳、少し睨んで、

瞳「お前とか、こいつって言うな！」

弥生、笑っている。

瞳、久慈を見て、

瞳「質問に答えてよ！」

久慈「10部屋以上、バス3、トイレ3、100畳リビング」

瞳「値段は？」

久慈「100億じゃ買えないって」

瞳「げげげっ」

瞳、あたりを見回して、

瞳「あのー部屋を見せてもらってもいいですか？」

弥生「いいわよ」

久慈、弥生、ソファに座る。

瞳、興味深そうにあちこち見て回り、サイドボードに立ってかけられた額装書に見入ってる。

ルンバが2台掃除している。

瞳「独特な字、個性が滲み出ているのに見事に調和している。さすが先生だわ」

弥生「洞察力あるじゃない、わかってらっしゃる。久慈君とは大違い」

久慈、うなだれる。

久慈「座ったら？」

瞳、ソファに座る。一呼吸おいて勢いよく話し出す。

瞳「なんかここってとても変？ 家具、ソフ

13

ア、絨毯、ベッド、床暖房、クローゼット、照明もトイレも浴室もシステムキッチンもゴーリージャス、なのになのにこの古い小さいテレビ！ カタカタ鳴ってる扇風機って、炊飯器もしょぼい！ ビジネスホテルにあるような小さい二つの冷蔵庫！」

弥生、げらげら笑っている。

弥生「初対面なのにこのお嬢さん、言うわね」

久慈「な！ 口悪いだろう」

瞳「悪口じゃないよ、おもしろいのよ。あの

ね、聞くの忘れてた、刑事のくせになんてこの部屋に住めるのよ？ 書道の先生がそんなに儲かるとは思えないし」

久慈、立ち上がって冷蔵庫からお茶を出す。

久慈「ペラペラよくしゃべるな。俺は弁当食べるわ、望月さん、相手してやって？」

弥生「警察にいるけど、久慈君は刑事じゃないよ。この部屋に住んでいるわけはね、管理人かな、居候のような」

瞳「どういうこと？」

久慈、弁当を食べている。

弥生「孝志の超リッチな友達に頼まれて住んでいるの。あー孝志ってのは久慈君のこと、友達は今はシングポールに住んでて、この物件は買ったばかりで売る気にならないからって」

瞳「You are super lucky」

久慈「超ラッキーか」

瞳「イタリア語なら Sei super fortunato、ス

ペイン語なら *Eres súper afortunado*」

弥生「さすが外大」

瞳「こんな広いところに二人きりなの？」

弥生「そう。孝志はお嬢さんの前だというのに、ガツガツ食べてるけどあなたは夕飯食べたの？」

瞳「食べました。この近くで家庭教師のアルバイトをしてて、そこが夕食を出してくれるので」

弥生「紅茶は好き？」

瞳「ワーオ、お言葉に甘えます」

久慈「俺にも」

弥生、立ち上がる。

弥生「はいはいっと」

○警視庁神田庁舎別館・前（早朝）

別館は裏通りにあり、壁が高くて目立たない。

ゲートには警視庁神田庁舎別館の館銘板。警備員室があり、2名のガードマ

ン。

中は広大な敷地で射撃レンジ、運動場などが見える。

中央の建物にはトレーニングルーム、ミーティングルーム、装備庫、武器庫、仮眠室、オペレータールームなどがある。地下にはスパコンがあり、関係者以外立入厳禁の表示。

○同・ミーティングルーム（早朝）

久慈、三瀬由之助（27）、武部誠二（3

16

3）、秋葉良則（24）、榊原賢（26）、

大垣敏光（27）、曾我康生（29）、ソファに座っている。

離れた場所に女性、2名がいる。

坂本康太（35）が兼光菜々子（26）

を連れてくる。

7人、気づいて立ち上がる。

7人「おはようございます」

坂本「おはよう、朝早くからすまない、新メ

ンバーだ、今日から坂本班に配属になった兼光菜々子さん、初めて女性がやってきてくれた。射撃でオリンピックに出場して、FBIに半年いた。ライフルも拳銃も扱える、よろしく頼む」

○（回想）ライフル射撃会場

菜々子、立ってライフルを構えている。

アナウンサー「国内無敵のスナイパー、兼光菜々子、ライフル3姿勢で2時間45分以内に120発撃ち、合計点を競います。最も難しい立射、極限まで集中力を研ぎ澄ませ、50ㇺ先に照準を合わせます。パン！パン！パン（音）」

（回想終わり）

○警視庁神田庁舎別館・ミーティングルーム  
（早朝）

三瀬「いえーい、オリンピックに出たんや、  
またすごいのが入ってきたやんけ」

菜々子「よろしくお願いします」

武部「メンバーば紹介する、うちや副班長の

武部ばい、ドローン担当」

三瀬「熊本は天草でっせ」

武部「うるさいのが、三瀬。ラグーマンでオ  
ールブラックスにいたこともある」

○（回想）ラグビー場

ナンバー8がタックルした後、三瀬、  
ラックの中からボールを奪い取ってい  
る。

アナウンサー「タックルが決まりました。フ  
ロントローの三瀬、ラックに突っ込んでい  
きます。あっ！ ジャツカルです。ボール  
を奪い取りました。三瀬！ 今日2度目の  
ジャツカルです」

（回想終わり）

○警視庁神田庁舎別館・ミーティングルーム

ム（早朝）

三瀬「よろしう、こてこての大阪出身や、四条畷から来たんやで」

菜々子「オールブラックスって？ ニュージーランドの？」

三瀬「おう」

武部「その隣が大垣。日本選手権で1000m 6位になった」

○（回想）陸上競技会場

大垣、スタート位置についている。○  
Your mark、set、ピストルの音、  
歓声。

アナウンサー「スタートしました。4レーン、大垣、低い姿勢からのスタートが決まりました。大垣、リード、速い。大垣勝ちました。タイムは10秒15」

（回想終わり）

○警視庁神田庁舎別館・ミーティングルーム

（早朝）

菜々子「速い！」

大垣、軽く右手を上げる。

大垣「大垣だっぺ、よろしく」

三瀬「だっぺといえは茨城は土浦や」

菜々子、三瀬に向かって顔をしかめて  
いる。

菜々子「方言が耳に残って名前やプロフィールが覚えられない」

武部「次が曾我、バイクのスペシャリスト。

ロードレースで鈴鹿8耐、モトクロスでラリー選手権などにも出た」

○（回想）鈴鹿サーキット

曾我、前のバイクにピッタリつけている。

アナウンサーズ「日本のロードレースを彩る

鈴鹿8耐、ゼッケン21、チームの中心、

ライダーイエロー曾我康生がここで仕掛け

る、逆転、前に出ました」

（回想終わり）

○警視庁神田庁舎別館・ミーティングルーム

（早朝）

菜々子、顔をしかめ目をつぶって、指でこめかみをつついている。

菜々子「曾我さんがライダーですね」

曾我「んだんだ、よろしく」

三瀬「秋田は角館から来た。本気出されたら

何言っただか理解不能やで」

武部「隣が榊原賢，箱根駅伝に3回出場」

○（回想）箱根駅伝・権太坂付近

榊原、快調に走っている。

アナウンサー「榊原強い、新春の日差しを受けて、権太坂の苦しい上りをもともせず快調に走っていきます。残り8km、このペースでいくと区間新が出そうです」

（回想終わり）

○警視庁神田庁舎別館・ミーティングルーム

（早朝）

菜々子「榊原さんは長距離ランナーっ」と

榊原「よろしく」

三瀬「ミヤーマイヤー言わへんのかい、知多半

島の半田からやー」

武部「その横にるのが秋葉、A級ライセン

スドライバー、ルマン24にも出場してた」

22

○（回想）フランス　ブガッテイサーキット

レースも終盤、秋葉、追いあげている。

アナウンサーズ「ルマン24時間レースも残

り2時間、秋葉選手が乗る7号車、驚異的

な追い上げを見せています。トップとの差

は2分45秒」

（回想終わり）

○警視庁神田庁舎別館・ミーティングルーム

（早朝）

菜々子「プロドライバーね」

秋葉「一番若いじゃけん」

三瀬「広島は三次からや」

武部「この7人、いや君が入ったので8人が

坂本班のメンバー。ようやく揃ったな」

菜々子「私もいいですか？」

武部、うなずいている。

菜々子「兼光菜々子ぜよ、まっこと、はちき

んです。高知からでした」

三瀬、大垣、拍手している。

坂本、久慈、曾我、秋葉、榊原、武部、

笑っている。

三瀬「坂本竜馬やー」

武部、静まるのを待って、

武部「もう一人！オペレーターがいる。久

慈！タワマンの最上階に住んでいる」

菜々子「お金持ちってことかな」

久慈、手を上げて、

久慈「よろしく」

三瀬「信州は長野やで」

武部「坂本班長は埼玉の川越から」

武部、書類を取り出す。

武部「兼光、秘密保持契約書だ。よく読んで

納得したらサインして」

武部、書類を渡す。

菜々子、嫌そう。

菜々子「読むのは苦手なんですよ。秘密って！

ここにはどんな秘密があるんですか？」

武部、呆れている。

三瀬「アホやなあ、サインしていないやつに

秘密の内容を教えるわけないじゃろが」

菜々子、慌てて、内容も見ずにサイン

する。

武部「いいのか？」

菜々子、うなづく。

坂本、両手を強く叩きながら、

坂本「よし、それじゃ実践訓練に行くぞ、武

部！ 彼女にスピーカーマイク、体につけ

るドラレコの使い方を教えてやってくれ」

武部「了解」

曾我「今日はどこさ行くだ？　こんな朝っぱ  
らから、まだ6時ですよ」

坂本「四谷のペDESTリアンデッキ、ターゲ  
ットは盗撮犯、兼光は今日は見ているだけ  
でいい」

○同・駐車場（早朝）

曾我、バイクに乗っている。  
秋葉、バスの運転席へ、全員、乗りこ  
んでいる。

25

○同・オペレーター室・前（早朝）

久慈、網膜、顔、指紋、暗証番号を認  
証させて、カードリーダーを差し込み  
入室。

○同・中（早朝）

モニターが無数にある。机の上にはパ

ソコン3台とタブレット、パネル。

後ろにはソファ。

久慈、中から鍵をかける。着席してス  
イツチを入れていく。

久慈「おはよう、アーモンドアイ」

アーモンドアイ「おはよう、孝志」

久慈「今日は四谷のペDESTリアンデッキ、  
場所はここ」

久慈、パネルにタッチ、

久慈「ここから半径200m以内の防犯カメ  
ラの映像をすべてモニターに出してくれ」

アーモンドアイ「はい」

モニターに映像が映し出されていく。

久慈「盗撮しているような男がいたらすべて教  
えてくれ」

アーモンドアイ「はい」

点滅したモニターには階段下から見上  
げた男・15%、少し前かがみになっ  
てから見上げた男・20%の表示が出  
始めた。

久慈、顔を上げて視線も上げている。

久慈「許せる範囲ってことか。まあ俺もこれくらいはやるな」

アーモンドアイ「そんな顔をしてパンツ見るんだ」

久慈、顔をしかめ、舌を出している。  
立ち上がり、ソファに座り、スマホを  
取り出し、首にかけて目を閉じている。

○新宿通り・バス・中

後ろの窓から曾我のバイクが見えてい  
る。

バスの中は座席が半分しかなく、机、  
椅子、パソコン、ドローンなどが置か  
れている。

秋葉、運転している。

坂本、三瀬、大垣、榊原、座っている。

武部、菜々子に体につけるドラレコを  
装着している。

武部「これで○スだ。カメラは前に2つ、後

ろに1つある」

菜々子「体につけるドラレコって？　もっとおしゃれな名前はないのですか？」

武部「だよな」

武部、スピーカーマイクを取っている。

武部「これが女性用スピーカーマイク、イヤリングに見えるだろう。話すときは普通に話せて、耳に手を当てたりする必要はない。ただ周りの人は独り言を喋っているように見えてしまい、気味悪がられる」

菜々子「どんどん進化してますね」

菜々子、スピーカーマイクを耳につけながら、ドローンを見ている。

菜々子「このドローンは小さいですね」

武部、2つのドローンを手にしている、大きさは鳩ほど。

武部「クアッドコプターとも呼ばれてる。自動追尾装置、高性能カメラ、赤外線カメラ障害物があれば勝手に避ける。こっちは時速150km出せるぞ、このドローンが一

つ目の秘密だ」

菜々子、身を乗り出す。

秋葉、振り返って、

秋葉「着きました」

○四谷・ペDESTリアンデッキ付近・バス・  
中

バスは停止している。

坂本、スマホをスマホスタンドに入れ、  
机に立てる。

坂本、武部に向かって、

坂本「ドローン飛ばせ」

武部、ドローンとパソコンを抱え、バ  
スから降りていく。

坂本、スマホに話す。

坂本「久慈！ 着いた、ドローンの映像が見  
れたら連絡」

○警視庁神田庁舎別館・オペレーター室

久慈、スマホをスマホスタンドに入れ、

椅子に座り、スマホに話す。

久慈「準備 OK、ローンの映像を待ちます」

○四谷・ペDESTリアンデッキ付近・バス・

中

曾我、入ってくる。

武部、帰ってくる。FVP ゴーグルをはめてパソコンを操作している。

坂本、パソコンを見ている。

菜々子、榊原と話している。

菜々子「武部さんはあのゴーグルで下からド

30

ローンを見ているのですか？」

榊原「そんなわけないでしょう、ローンのカメラからペDESTリアンデッキを見ている」

菜々子、情けない顔で、

菜々子「そうだよね、私は何もわかってないわ」

武部、FVP ゴーグルを外す。

武部「ドローン OK」

坂本「よし」

スマホ（久慈）「ドローンからの映像が届きました」

三瀬、大垣と話しながら窓の外を見て  
いる。

三瀬「朝っぱらからパンツ狙ってるやつなんているのかよ。夕方の帰宅時間のほうが確率高いかも」

大垣「俺もそう思う。だってよ、みんな歩くのが速い、あれじゃあ盗撮できないっぺ」

スマホ（久慈）「盗撮確率20%ばかりですが、

31

だんだん人が増えてきました」

坂本「よし、待機場所を指定する。ケンはどう

真ん中、曾我は一番遠い階段下にバイクで、

三瀬は右の階段、ガキは左の階段。キバはガキと曾我の中間へ、さあ行け！」

榊原、曾我、三瀬、大垣、秋葉、バスから外へ飛び出していく。

次々に（着きました）の音が聞こえて  
いる。

菜々子、坂本に話しかける。

菜々子「班長！ 呼び方が変わりましたね」

坂本「榊原はケン、ガキは大垣、キバは秋葉、

武部はタケ」

菜々子「では私はどう呼んでもらえますか？」

坂本「はちきんと言いたいけど、2文字にしてください」

菜々子「はちはいやです」

坂本「名前は菜々子だったな、ナナにしよう」

菜々子、微笑んでいる。

32

○警視庁神田庁舎別館・オペレータールーム

モニターに反応がない。

久慈、頭を抱えている。

○四谷・ペDESTリアンデッキ・上・中央

榊原、手すりにもたれてスマホを操作している。

○同・遠い階段・下

曾我、バイクに寄りかかってスマホを操作している。

○同・左の階段・上

大垣、ベンチに座って目を閉じている。

○同・右の階段・上

三瀬、手すりにもたれてスマホを操作している。

○同・大垣と曾我の中間

秋葉、ベンチに座ってスマホを操作している。

○同・バス・中

坂本、スマホに話している。

坂本「そうか、もう少し待ってみるか」

武部、バスから降りてペDESTリアンデッキを見ている。

菜々子、窓から外を見ている。

菜々子「人が少なくなってきましたね」

坂本「全員戻ってこい！ 三瀬の言う通りや  
ったか！ 夕方出直すぞ！」

○新宿通り・バス・中

三瀬、菜々子と話している。

三瀬「兼光さんよ、スポーツバカで田舎もん  
のチームによく来たな」

菜々子、三瀬の腕を軽く叩いている。

菜々子「ぎゃー、私もその通りぜよ」

坂本、振り向いて、

坂本「兼光！ 夕方まで時間があるから射撃  
場に行つて、撃つてこい」

菜々子「はい」

○久慈宅・リビング

弥生、内線で話している。

弥生「申し訳ないけど連れてきてもらえま  
す？ 渡したいものもあるし」

弥生、片付けている。

チャイムの音。

弥生、ドアを開ける。

ガードマン、立っている。

瞳、入ってくる。

瞳「来ちゃった」

弥生「新保さん、いらっしやい、ちよっと待って」

弥生、キッチンに戻って箱を取り、ガードマンに手渡す。

弥生「連れてきてくれてありがとう、これ、みなさんで食べて」

ガードマン「いつもすみません」

ガードマン、帰っていく。

弥生、瞳、リビングへ、

弥生「迎えに行かなくてごめんなさい。88階からエントランスまで降りて行ってまた上がるのはしんどいのよ」

瞳「携帯番号聞かなかったから電話できなかつた。いきなり来てごめんなさい」

弥生「どうしたの？」

瞳「今日も家庭教師なの。早く着きすぎたから、望月さんいたらいいなと思って」

弥生、手招きしてソファに座る。

瞳、座る。

弥生「いやにおとなしいわね」

瞳、少しためらってから、にこっと笑って、

瞳「昨日帰ってからね、ゼミの宿題があって、終わった途端、ここに住みたーって思ったの。部屋がいっぱい空いてたし、厚かましいのはわかっている。でも聞くだけ聞いてみようかなって」

弥生「あらまあ」

弥生、立ち上がった、

弥生「何をご馳走しようかな」

弥生、冷蔵庫を開けてマンゴジュースを取り出し、箱を開けている。

弥生「和菓子とマンゴジュース、あわないかな？」

瞳「あうかも？」

○警視庁神田庁舎別館・オペレータールーム  
久慈、首を左右、上下に動かしながら  
モニターを見ている。

右上のモニターに50%の黄色表示。

久慈「ペDESTリアンデッキ(3)のカメラ  
か、若い野郎だな。動くなよ！ 紺のシャツ、  
ジーンズ、茶色のスニーカー、黒の  
バックパックと」

久慈、メモしている。

○四谷のペDESTリアンデッキ・右の階段・  
上

三瀬、手すりにもたれてスマホを操作  
している。

○同・付近・バス・中

坂本、武部、菜々子、座っている。

スマホ(久慈)「見つけました。若い男性、中  
肉中背、紺のシャツ、ジーンズ、茶色の  
スニーカー、黒のバックパック、現在、ケ

ンさんの右手10m先にいます。武部さん、ドローンで捕捉してください」

坂本「よし」

武部「やっときたな」

武部、FVRPゴーグルを着け、パソコンを操作している。

菜々子、拍手している。

スマホ（久慈）「男の前方斜め45度上からの映像をなるべく途切れることなく欲しいのですが」

武部「おう」

菜々子「盗撮しろ！　と思ってる。変な感覚ですね」

坂本「たしかにな」

スマホ（久慈）「現在、男は曾我さんのいる階段の上、90%でしたが、ターゲットの女子高生が振り向いたため未遂かもしれません」

坂本、気合の入った表情で、

坂本「全員聞こえるか！　若い男性、中肉中

背、紺のヨシャツ、ジーンズ、茶色のスニーカー、黒のバックパック、現在、曾我のいる階段の上。そのまま待機！」

○同・上・中央

榊原、顔を上げて、うなずき、うつむいて、スマホを操作している。

○警視庁神田庁舎別館・オペレータールーム

久慈、前のめりになってドロインの映像と防犯カメラの映像を交互に見ている。

久慈、スマホに話す。

久慈「動き出しました、ゆっくり歩いていきます。このまま行くと大垣さんの前を横切ります」

○四谷・ペDESTリアンデッキ・左の階段・上

大垣、ストレッチしながら、若い男を

ちらっと見ている。

○警視庁神田庁舎別館・オペレータールーム

久慈、スマホに話している。

久慈「女子高生の後ろに張り付いてます、歩き方からみて靴の中にカメラがあると思います」

久慈、防犯カメラの映像を拡大している。

久慈「スマホを見えています。撮ったと思います。場所は大垣さんの前5m」

40

○四谷・ペDESTリアンデッキ・バス・中

坂本、立ち上がっている。

坂本「男はガキの前5m、ガキ！お前にまかせた、キバは靴とスマホを確保、ケンハガキのフォロー、行け」

○同・左の階段・上

大垣、ゆっくり歩いている。

秋葉、榊原、速足で、

大垣「警察だ！ 盗撮したよな。現行犯逮捕する」

若い男、目を大きく見開いている。

大垣、榊原、若い男の両脇を固める。

野次馬たち、スマホで撮影している。

秋葉、靴を脱がし、アップルウォッチ、バックパック、スマホを取り上げる。

ストラップが落ちるが、すぐに拾ってポケットへ入れる。靴の中を見ている。

秋葉「カメラを見つけたでえ」

秋葉、若い男のスマホを見ながら、

秋葉「おい！ パスワード！」

若い男、観念して、

若い男「6628」

秋葉、若い男のスマホを操作している。にやりと笑う。

秋葉「ばっちりじゃのう」

榊原、大垣、若い男を連行していく。

秋葉、証拠品を抱えている。

若い男「盗撮の罪って重くないですよね？」

大垣、ぶっきらぼうに、

大垣「知るか、あとで班長に聞いてやる」

○警視庁神田庁舎別館・オペレータールーム

久慈、ガッツポーズをしている。

久慈「アーモンドアイ、ありがとう」

アーモンドアイ「やったね」

○四谷・ペDESTリアンデッキ・バス・中

武部、ドローンを手に入ってくる。

三瀬、曾我、入ってくる。

大垣、榊原、若い男、秋葉、入ってくる。

る。

榊原、若い男に手錠をかけ座らせる。

坂本、出迎えている。

坂本「お疲れ」

武部、靴を手を取って見ている。

武部「なかなかのもんだな」

坂本、若い男のスマホを見ている。

大垣、坂本に話しかける。

大垣「班長！ 盗撮野郎がどれくらいの罪になるのか聞いてるだっぺ」

坂本「去年までは迷惑防止条例でたしか一年くらい、今は性的姿態撮影処罰法とか性的影像記録保管罪とか新しい法律が施行されて5年食らったりする」

大垣「パンツ撮影して5年か」

若い男、うつむいたまま。

坂本、スマホに話す。

坂本「久慈！ 無事にすんだ。こちらはもう少し時間がかかる」

スマホ（久慈）「トレーニングしながら待ってます」

○四谷・交番（夕方）

大垣、榊原、武部、手錠に繋がれた若い男、入っていく。  
駐在、立ち上がる。

駐在「何事ですか？」

武部、警察手帳を見せて名刺を渡している。

武部「警視庁坂本班の武部です」

駐在、名刺を見て、机に置き、敬礼している。

駐在「はっ」

武部「四谷のペDESTリアンデッキで盗撮犯を捕まえた」

大垣、若い男を突き出す。

駐在、若い男を椅子に座らせる。

榊原、証拠品を机の上に置く。

武部「スマホ、カメラ、免許証など証拠品がこれだ。スマホに盗撮の証拠がばっちり写っている。明日には逮捕した時の映像及び音声データを届ける。取り調べなど後のことはよろしく頼む。聞きたいことがあれば名刺の番号に」

駐在「わかりました。ご苦労様です」

○警視庁神田庁舎別館・ミーティングルーム

（夕方）

久慈、ソファでスナックを食べている。  
坂本班全員、入ってくる。

久慈「お疲れ様」

大垣、スナックをつまんで、コーヒールを取りに行く。

三瀬、ソファにどーんと座る。

武部、離れたところで、女性職員と話している。

武部「久慈から受け取ったかな、逮捕の際の  
防犯カメラ映像、それと大垣、榊原、秋葉  
の体につけるドラレコの映像及び音声データ  
を四谷の交番まで明日中に、何度も言う  
がドロインの映像はダメだぞ」

女性職員「わかりました」

武部、ストラップをポケットから出す。

武部「それと逮捕の時に犯人のスマホからこの  
ストラップが落ちた。秋葉が忘れて持ち  
帰ってしまった。これも頼む」

菜々子、武部に近寄ってくる。

武部、菜々子の顔を見て、気がつく。

武部「答えるのを忘れてたな」

菜々子「ドローンの秘密ですね」

武部「ドローンには高さ制限だの、改正航空法だの、制約や法律があるのは知ってるか？」

菜々子「いえ」

武部「東京では人口が集中している地区では200g以上のドローンは全面禁止」

菜々子「200g以上あったような、でも警察が犯人逮捕に使用するなら許可されそうですが」

武部「許可されない」

菜々子「警視庁が法律違反をしいんですか？」

武部「よくない。だから秘密なのだ」

菜々子「わかりました。ドローンのことは誰にも話すなということですね」

武部「ものわかりがいいな」

坂本、大きな声で、

坂本「みんなご苦労、明日は17時集合、タ  
ーゲットは下着泥棒！ 何時に終わるかわ  
からないから、さあさあ帰った」

三瀬「わは！ 盗撮犯の次は下着泥棒かい！  
生活安全課やがな。明日は出勤遅いから今  
日は飲めるやん、行くぞー」

大垣、曾我、秋葉、喜んでいる。

○麻布・コンビニ・中（夕方）

店員1、棚に商品を補充している。

瞳、入ってくる。

店員1、少し驚く。

店員1「昨日、タワマン刑事と一緒にエント  
ランスに行ったでしょう？」

瞳「見てたの？」

店員1「喧嘩するのかと思って、そうじゃな  
かったよね」

瞳「部屋を見せてもらったの」

店員1、口をすぼめて前に突き出す。

店員1「へー、どうだった？」

瞳「すごいとしか言いようがなかったわ」

店員「俺も見たいな」

瞳「刑事じゃなかったわよ」

店員「知ってるよ。でもね、ストーカーされてる女性を助けたことがあるんだ、この前でね。それからタワマン刑事って呼ぶよ  
うになったんだ」

瞳「ふーん」

○神田・居酒屋・中（夜）

大垣、立ち止まってテレビを見ている。

レポーター、ニュースを伝えている。

レポーター「現場から中継します、鶴見のコンビニ前です、2時間前、現金3万円が奪  
われました」

防犯カメラの映像が流れている。犯人はフルフェイスヘルメットを被っている。

レポーター「犯人は入ってくるなり、カウン  
ターを乗り越え、ランボーナイフで店員を

下がらせて、レジを開け3万円を奪い、電動キックボードで猛スピードで逃走しました。犯行に要した時間はわずか30秒でした。県警は手口から2年間で神奈川県内で40件、全国では100件以上のコンビニで犯行に及んでいるランボーキッカーではないかとみています、以上、鶴見から桜田がお伝えしました」

大垣、つぶやく。

大垣「まだ捕まえられないのか」

大垣、席に戻ってくる。

三瀬、武部、曾我、秋葉、飲んでいる。テーブルにはビール、刺身などがある。

大垣「ランボーキッカーがまた鶴見でやったべ」

武部「またか」

三瀬「下着泥棒よりこいつだよな」

武部、カバンから小さな容器を出す。

曾我「武部さん、それはなんだですか」

武部「醤油、刺身の時はこっが必要なんや」

大垣 「ㄟㄟ 醤油だべか？」

秋葉、テーブルの醤油を持って、

秋葉 「この醤油じゃ、うもうないんじやろ」

武部、醤油を小皿に注ぐ。

三瀬 「ちよっと味見させてくれへん？」

武部、小皿を渡す。

三瀬、味見する、のけぞる。

三瀬 「あかんあかん！ 甘すぎる」

大垣、秋葉、曾我、味見する。

大垣、秋葉、曾我 「うわー」

武部 「おまえらにはわからんやろうな」

大垣 「天草の醤油だべか？」

武部 「もちろん」

秋葉 「熊本の人はみんなこれが好きなんじや

ろうな」

武部 「近くに熊本料理の店があるから、今度

連れて行ってやる。馬刺しがうまかぞ」

4人、声を揃えて、

秋葉 「行かん」

曾我 「行がね」

三瀬 「行けへん」

大垣 「行がねーっぺ」

○久慈宅・玄関（夜）

久慈、ドアを開ける。弁当を持っている。

瞳、走ってくる。

瞳 「お帰りなさい」

久慈 「おいおい、何してる？」

瞳 「遊びにきちやいけないの？ 家庭教師の前に来て、また帰りに寄っちゃった」

○同・リビング（夜）

瞳、久慈の手を掴み、リビングのソファに座らせ、隣に座る。

弥生、ソファに座っている。

久慈、弁当を抱えている。

久慈 「なにになになになに」

弥生 「お帰り」

久慈 「ただいま」

瞳「お願いがあるの、ここって部屋空いてる  
でしょう。私も住んではダメ？」

久慈、戸惑っている。

久慈「いいも悪いも昨日会ったばかりで、君  
のこと何も知らない」

瞳「望月さんはいいんじゃないって言ってく  
れた。でも久慈さんがどう言うかなって？」  
弥生「よさそうなお嬢さんじゃない？ 元氣  
があるし、頭いいし、賑やかになっていい  
と思う」

瞳、弥生を見てにっこり笑う。

瞳「ありがとう」

久慈、立ち上がる。

久慈「ちょっと待って、着替えてくる」

瞳「もしかしてその手にあるものは？」

久慈、弁当をテーブルに置く。

久慈「弁当だよ」

瞳「またー、毎日毎日それなの？ 信じられ  
ない」

久慈、着替えに行く。すぐに戻ってき

て、冷蔵庫からお茶を取り、テーブルで食べながら考えている。

瞳、久慈に近寄り、

瞳「で、どうなのよ」

久慈「食べてからな」

瞳「わかった」

瞳、ソファに戻るが、視線をそらさず、

久慈をじっと見つめている。

久慈、見られていることに我慢できず、

照れながら笑いだす。

久慈「まいったなあ」

瞳「あれ！ 照れてる？ うふ！」

久慈「あーもう食べながらでいいや、学生証

見せてくれ」

瞳、バッグから学生証を出す。

瞳「ハイ」

久慈、手に取って、学生証を見ている。

弥生、覗き込む。

弥生「これが院生の学生証なの？」

瞳「普通の学生と同じですよ」

久慈「出身は？ 仕送りしてもらってるの？」

瞳「いすみ市です、バイトだけでは足りないからもらってます」

久慈「いすみ市？ 聞いたことないけど」

瞳「九十九里浜があります」

弥生、右手で左手の手のひらを軽く叩き、

弥生「はいはい！ 千葉ね」

久慈「今はどこに住んでるの？ 一人暮らし？」

瞳「三鷹、大学が府中だから、一人だよ」

久慈「ここに住んだら遠くなる」

瞳「かまわない。家庭教師がすぐそこ、本郷にもキャンパスがあって時々行くので便利、もうひとつ法廷通訳の仕事があって裁判所に行くにはこちらが便利、だからなんの問題もない」

久慈「なぜここに住みたいの？」

瞳、目を大きく開いて

瞳「トランプタワー麻布ですよ、これが一番。

二番は望月さんとうまくやっけていけそうだから、三番は久慈さんが大金持ちじゃなかったこと。生活レベルが私より低い」

久慈「貧乏って言いたいんだろ！」

瞳「えへ！もうひとつあった。一人暮らしがつくづく嫌になったの」

久慈、弁当を食べ終わって、

久慈「二つだけルールがあるけどいいか？」

瞳「怖いな」

久慈「光熱費とかで毎月3万円、それと出て行ってくれと言われたら即刻退去してもらう。それだけ」

瞳、目を輝かせている。興奮して、

瞳「たったの3万円！信じられない、最上

階が、ワオ！即刻退去は当然だわ、納得」

久慈「居住権とかないからな、居候っている扱い」

瞳「わかるわかる」

久慈、間をおいて、

久慈「望月さんも賛成してるし、じゃあ一緒に

に住もうか」

瞳、久慈に抱きつく。

久慈、嫌がっている。

瞳、離れる。

久慈「部屋は好きなのを選んだらいい」

瞳「うー、うれしい」

弥生「問題があるわよ、部屋には鍵がない、

取り付けるのもダメなの」

瞳「えっ？」

瞳、少しためらったが、

瞳「わかった、引っ越しはいつになるかわか

らないけど、今晚泊してもらえる？　ここ

で寝たーい」

久慈「いいよ」

○同・瞳の部屋（早朝）

豪華なベッドとクローゼットしかない、  
がらんとした部屋。

瞳、寝ている。

久慈、そーっとドアを開け入っていく。

久慈「よく寝られた？」

瞳、慌ててデュベスタイルを引き上げ、  
両手で握りしめ、胸の前に、

瞳「えーうそでしょ」

久慈、悪びれずに、

久慈「刑事が嫌いって言ってたな、なぜ？」

瞳、ほっとして、肩を落とし、視線を  
上げて、ドアを指さす。

瞳「今度、ゆっくり話すから、出て行って」

」

## 第2話

### ○警視庁・警視監の部屋

デスクネームプレートには古賀警視監と書かれている。

坂本、古賀孝時（61）、ソファに座っている。

古賀「どうだ、やっていけそうか？」

坂本「昨日ようやく、メンバーが揃いましたので本格的な訓練ができます」

古賀「兼光はどうだ？ 溶け込めそうか？」

坂本「三瀬のおかげで、たった1日で溶け込んでいるように見えます」

古賀「そうか、彼女はFBIにいたとき、運悪くと言ったら語弊があるが、人を撃ったことがない、気にとめておいてくれ」

坂本「わかりました」

古賀「今日は下着泥棒だったな、交通課から罰金を払わない奴を逮捕してくれという要請、それから山梨県警から自動車窃盗団を検挙するのを手伝ってくれと言ってきた、

行ってくるか？」

坂本「はい」

古賀「詳しいことはメールを送る」

坂本「ランボーキットカーの逮捕の依頼はない  
のですか？」

古賀「まだない、いちど神奈川県警に行つて  
みるか」

○与野・市営住宅・4棟・三階の一室・居間

女子大生、女子高校生、パンティとブラ  
ジャーにイラストと名前を書いてい  
る。

母親、見ている。

女子大生「盗まれますように！　可愛いく書  
かなきゃ」

女子高生、積まれたパンティとブラジ  
ジャーを見て、

女子高生「これ全部！　書こうか」

女子大生「書いちゃえ」

女子高生「捕まえてくれるかな？　もう終わ

りにしてほしい」

母親「大掛かりらしいわよ。きっと捕まえてくれると思う」

○警視庁神田庁舎別館・ゲート

榊原、ショートパンツにHシャツ、ラ  
ンニングシューズ、バックパックを背  
負っている。ガードマンに手を振りな  
がら駆け抜けていく。

○同・トレーニングルーム

三瀬、大垣、秋葉、菜々子、久慈、ワ  
イクアウトしている。

榊原 汗びっしりで入ってくる。タ  
イムを計っている。

久慈「記録は？」

榊原「42分35秒」

久慈「まあまあだな」

榊原「シャワーしてくる」

○同・ゲート

曾我、バイクに乗ったまま、ガードマンと話している。そのあと駐車場へバイクを走らせる。

○久慈宅・リビング

瞳、弥生、そうめんを食べている。

弥生「後で、管理会社に行きましょう。鍵とアクセスカードが必要でしょ」

瞳「はい」

弥生「それから引っ越しなんだけど、事前に引っ越し申請書を書かないといけないかもしれない。大きい荷物があるなら、搬入エレベーターのことも知っておかなければだめで、養生範囲とかも厳しいの、タワマンは引っ越し代が高くつくわよ。大きい荷物がなかったら、家庭教師に来るたびに少しずつ持ってくるというのもありだと思う。鍵を持っていたらいつでも入れるから」

瞳「簡単だと思ってた。真剣に考えます」

弥生「いいことばかりじゃないのよ」

瞳「今朝ね。久慈さん、ノックもせずに入ってきてびっくりしちゃった」

弥生「あらま」

瞳「悪びれた様子もなく普通に」

弥生「そういえば、私の部屋に入る時もノックしないわ。で、何しにきたの」

瞳「刑事が嫌いな理由、教えてって」

弥生「そんなことで？ 怒らなかつたの？」

瞳「うん、出て行つてと言っただけ」

○警視庁神田庁舎別館・ミーティングルーム

(夕方)

榊原、大垣、曾我、武部、秋葉、ソファに座っている。

菜々子、久慈、三瀬、立って話している。

菜々子「立入厳禁と書かれたドアがあります

よね、あの中には何かあるんですか？」

久慈「スーパードンキーダコ」

菜々子「スパコンは何をするためなんですか？」

久慈「▶」・スパコン・関東全域防犯カメラ集中監視システム、通称アイモンドアイ」

菜々子、キョトンとしている。

菜々子「はあ？　なんですか、それ？」

三瀬「わかりやすく教えてやらんと兼光には無理やんけ」

菜々子、三瀬を軽く睨んで、

菜々子「うるさいぜよ」

久慈「関東全域の防犯カメラの8割がライブで見れるし、遡って1週間前までも見れる」

菜々子「関東全域って？　何万台もあるでしょ、久慈さんが見るんですか？」

三瀬、大笑いしている。

三瀬「目が何万個あっても足らんわ」

菜々子、頬を膨らませている。

久慈「見て、探すのが▶」のアイモンドアイ、俺は犯人の顔とかデータを入力して、お願いするだけ、わかる？」

菜々子「なんとなく」

久慈「人間が防犯カメラを見ていた作業スピードに比べて何万倍も速い」

菜々子「関東全域のカメラ！　それが24時間×1週間だとすごい量ってことですよね」

三瀬、菜々子の肩を軽く叩く。

三瀬「おっ、わかってきたな。だからスパコンじゃないとあかんわけよ」

菜々子「もしかして、それが第二の秘密？」

三瀬、喜んでいる。

三瀬「イエーイ！　鋭い！」

菜々子、呆気にとられている。

菜々子「えっ！　言ってみたものの、何が秘密なのかちっともわかんない」

三瀬、舌を出して、

三瀬「なんだ、それ！」

久慈「犯人を捜すだけならいいでしょう、が、悪用すると大問題になる」

菜々子、真剣に聞いている。

久慈「例えて言うと、俺がD&A夫だとする。

兼光さんはその妻、ようやく逃げ出して住所を変えて平穩に暮らしている。当然、夫に居所を知られてはならない。なのにアーモンドアイに君の顔や歩き方のデータを入力する。君がコンビニに立ち寄る、カメラに映る、するとどこにいるかわかってしまう」

菜々子、両手を挙げて震わせている。

菜々子「あっあっあーわかる、それじゃあ、どこにも隠れられない。アーモンドアイって恐ろしい」

三瀬「だからな、あの部屋には久慈しか入れない。久慈以外は誰も入ったことがない」

久慈「俺だって信用されてるわけじゃない。

サイバー犯罪課が常に監視している」

菜々子「ふー、秘密なのがわかった、悪用されない保証はないわ。久慈さんが辞める覚悟でやってしまう可能性はあるものね」

久慈「その通り」

菜々子「アーモンドアイって名前はかわいい

のに」

久慈「中国には似たようなシステムがあって、名前はスカイアイ。そこから名前をつけた」

三瀬「この前、古賀警視監と話したんだわ。

アーモンドアイもドローンも犯人逮捕だけに使用することを条件に法律の改正に動いてるって、時間がかかるからそれまで秘密にしておいてくれ、そんなこと言ってた」  
菜々子「そうなればいいですね」

坂本、やってくる。

全員、坂本のそばに集まってくる。

坂本「みんなそろってるな、武部！説明してくれ」

武部、前に出る。

武部「今から埼玉県与野に向かう。市営住宅3階で何度も女性の下着が盗まれている。バスと乗用車2台と曾我のバイクで行く、持参するのは体につけるドラレコ赤外線仕様、スピーカーマイク、15台のコードレス赤外線防犯カメラ、兼光は拳銃、まずは

8 時頃に現場で 15 台カメラを設置する作業がある、人員の配置を決め、一旦離れて食事しながら待ち、12 時に再び戻る、詳しくは現場で説明する、準備ができ次第出発する、以上」

三瀬「今夜、下着泥棒が来るって確率は？」

武部「決まって木曜日にやられている。先週、やられそうだったのだが、雨が降っていたため、断念したのだろう、今晚は天気もいい、来る確率は極めて高いと考えている」

坂本、久慈に指示をしている。

坂本「8 時にいて、12 時前に戻ってきたらいい。ドローンは低照度カメラを搭載して夜間視認用センサーをつけているがそれでも見にくいだろうし、以前からある防犯カメラは街灯が頼りなんでたいして役にたかない。ただ新たに 15 台赤外線カメラを設置するからなんとかなると思う。朝の 5 時まで張り込む予定だ、そのつもりでな」

久慈「覚悟しています」

坂本「深夜にひとりぼっちなんで寂しいと思うがな」

○久慈宅・弥生の部屋（夜）

書道家の部屋、毛筆、墨、墨汁、硯、文鎮、書道下敷き、和紙、作品も多数置かれている。

弥生、瞳とスマホで話している。スマホの表示に新保瞳の文字。

弥生「大事なことを忘れていたの」

スマホ（瞳）「なんですか？」

弥生「明後日の夜、隅田川花火大会があるの、上から花火が見れるのよ。よかったら来ない？」

スマホ（瞳）「わー行きます、行きます。友達も連れていっていいですか？」

弥生「いいわよ、じゃあ待ってるわ」

○与野・市営住宅・入り口付近・バス・中（夜）

全員、机の周りに集まって市営住宅の

平面図を見ている。1から15までの  
ナンバーが赤丸内に書かれている。

坂本「団地内に15個のカメラを取り付ける。

赤丸がついているところを覚えてくれ、高さは3m程度、2階のベランダが最も適しているので、まずは住民に了解をとってみて、ダメなら木や街灯に取り付けてくれ。武部は被害者宅に行って、洗濯ものが見える位置にカメラを取り付ける。12時まで消灯してベランダに鍵をかけ、決して音を立てないように、電話で一度、話しているが再度、念を押しておいてくれ」

武部、カメラを一台持ってバスから降りていく。

榊原、三瀬、秋葉、曾我、兼光、大垣、平面図を見ながら誰がどの位置に取り付けるか相談して、次々にカメラを持ち降りていく。

坂本、スマホをスマホスタンドに立て、スピーカーカーで話している。

○警視庁神田庁舎別館・オペレーター室（夜）

モニターには市営住宅内の防犯カメラの映像が流れている。

久慈、スマホをスマホスタンドに立てて、話している。

スマホ（坂本）「赤丸のついた平面図の写真を送った。番号が書いてあるのでカメラの位置をしっかりと把握してくれ、今15台のカメラを設置しているところで、徐々に映像を送っていく」

久慈「既存のカメラはいくつかは見えそうです、でも敷地の外に逃げられると街灯があっても見にくくて、ドローンだけでは相当厳しそうです」

○与野・市営住宅・4棟・三階の一室・玄関前（夜）

武部、母親と話している。

女子大生、女子高生、母親の後ろに立っている。

母親「ご苦勞様です。下着は名前を書いてベランダに干しています」

武部「ここは一番奥の棟だから狙われやすいですね。もう一度念を押しますが、12時前には消灯して、ベランダのガラス戸にきっちり鍵をかけて、犯人の気配を感じても何もしないでください」

母親「そうします。刑事さん！必ず捕まえてください」

○同・敷地内（夜）

三瀬、2階のベランダにカメラをとりにつけている。

三瀬の斜め向かいの木に登ってカメラを取り付けている榊原の姿が見える。

○同・入り口付近・バス（夜）

武部、パソコンでカメラの映像を見ている。

全員、帰ってきて再び平面図を見ている。

る。

坂本、平面図を指さしている。

坂本「ここは4棟あるから思ったより広い。

植え込みや花壇、子供の遊び場、自転車置き場に加えて、やっかいなのがずらっと停められている車だな。出入り口は2か所で、車はここここに止める。バイクは敷地内の真ん中に置いておく。バスはここに移動する、秋葉、三瀬、榊原はこちらの車の中、兼光、大垣、曾我はここ、盗んだと分かれば三瀬と大垣が犯人を捕まえにいく、曾我と榊原は真ん中に向かい、犯人を挟み撃ちにする、兼光はこちらの入り口、秋葉はこっちだな、武部と俺はバスの中にいるが、状況をみてどうするか決める。これでいこうと思うが何か意見があるか？」

曾我「必ずしも出入り口に逃げるとは限らないと思います。フェンスは2mほどだからよじ登ることもあるかも」

坂本「そうだな、武部と俺はフェンスの外で

待つことにするか、さあ飯だ」

○警視庁神田庁舎別館・オペレータールーム

（夜）

次々に送られてくる映像。

久慈、平面図を見ながら、モニターに番号札を貼っていく。

久慈、貼り終わってからスマホに話す。

久慈「班長！ 準備完了しました。腹ごしらえしてきます」

○神田・ラーメン店（夜）

久慈、スマホを見ながら、ラーメンと餃子を食べている。

○与野・中華料理店（夜）

全員、円卓を囲んでいる。中国茶とジュースがテーブルに。中華料理が運ばれてくる。

回転テーブルに大皿がいくつも置かれ

ていく。大垣、回転テーブルを時計回りに回している。

大垣「班長がまず料理を取って、時計回りに回していくのがマナーだっぺ」

坂本、大皿から料理を取る。三瀬たちもテーブルを回しながら、次々に取っていく。

三瀬「なんでそんなこと知ってるんや？」

大垣「常識、この回転テーブルは日本発祥だべ」

菜々子「少しずついろんなものが食べられるき、いいやねー」

坂本、久慈とZOOMを使いビデオ通話している。

坂本「一人で寂しいだろうと思ってな、なんだ、ラーメンと餃子か！経費で落ちるからもっと頼んでいいぞ」

スマホ（久慈）「これで十分です。でもそっちはうまそう！」

三瀬、立ち上がり、坂本のそばに移動

して、スマホを覗き込む。

三瀬「ZOOMより普通はLINEでしょう？」

坂本「LINEでもいいのだが、ZOOMの方が

複数と話せるし、チャットも画面共有もできるから俺はこればかり使う」

三瀬「ふーん、おーい！ 久慈よう、明後日、

隅田川花火大会あるやろ？ タワマンに行つていいか？」

スマホ（久慈）「いいですよ。家では飲まないから、お酒がないのでビールやウイスキー持参で来てください。食べるものは持つてこないで」

菜々子、榊原、大垣、秋葉、曾我、慌てて立ち上がり、坂本のそばへ行く。

菜々子「うちも」

榊原「俺も」

大垣「俺も行くだっぺ」

秋葉「わしも」

曾我「おいも」

三瀬「そんなに大勢で行ったら迷惑だろう

が！」

スマホ（久慈）「待ってまーす」

○与野・市営住宅・入り口付近・バス（深夜）

全員、座っている。

坂本「武部！ ドローンを飛ばしてくれ」

武部、ドローンとパソコンを持ち、降りていく。

坂本、スマホに話しかける。

坂本「久慈！ 起きてるか？」

○警視庁神田庁舎別館・オペレータールーム

（深夜）

久慈、スマホに話す。

久慈「班長！ 起きてますよ、赤外線カメラで撮った映像を見ているのですが、服装、性別などは判別できません、それから、すでに被害者宅の電気は消えています」

スマホ（坂本）「ドローンの映像がもうすぐ届く、それで服装などがわかるかもしれない」

久慈「了解」

○与野・市営住宅・入り口付近・バス・中（深夜）

武部、帰ってくる。FVRPゴーグルをはめてパソコンを操作している。スマホに話す。

武部「久慈。ここは物音ひとつしない、高度150mだと音が聞こえてしまうので300mにせざるを得ない、これでなんとか見れるか？」

○警視庁神田庁舎別館・オペレータールーム  
（深夜）

久慈、モニターを見ている。ドローンの映像が届く。スマホに話す。

久慈「ドローンの映像が届きました。やはり見にくいですが、なんとかかなりそうです」

久慈、映像を見ながら、

久慈「アーモンドアイ、不審な男がいたら教

えてくれ！」

アーモンドアイ「まかせて」

○与野・市営住宅・入り口付近・バス（深夜）

坂本、立ち上がる。

坂本「準備ができた、所定の位置についてくれ」

曾我、秋葉、榊原、三瀬、菜々子、大垣、曾我、スピーカーカーマイクをつけ、体につけるドラレコを装着して、静かに降りていく。

曾我、バイクを押している。

○警視庁神田庁舎別館・オペレータールーム

（深夜）

久慈、モニターをじっと見ている。

久慈「アーモンドアイは眠くならないからいいいな」

アーモンドアイ「寝るなよ！」

久慈「さっきまではサラリーマンがちらほら

帰ってきてたけど、もう誰も歩いていない。  
暗いけど見づらくないか？」

アーモンドアイ「動きがわかるから問題ない」

○与野・市営住宅・入り口・一台目の車・中

（深夜）

車はスモークフィルムが貼られていて、  
外からは中が見えない。

秋葉、三瀬、シートを半分倒してじつ  
としている、榊原、後部座席で横にな  
っている。

79

三瀬「被害者宅は3階だろう、どうやって登  
る？」

榊原「身軽なやつだろうな」

○同・別の入り口・二台目の車・中（深夜）

車はスモークフィルムが貼られていて、  
外からは中が見えない。

菜々子、大垣、シートを半分倒してい  
る、曾我、後部座席にいる。

菜々子「待っていると眠くなる」

大垣、ブラックコーヒーとガムを配っている。

○警視庁神田庁舎別館・オペレータールーム  
（深夜）

久慈、立ち上がってストレッチをした  
り、むやみに歩き回っている。

○与野・市営住宅・入り口付近・バス（深夜）  
武部、パソコンを見ながら、頬を叩  
いている。  
坂本、窓から外を見ている。

○警視庁神田庁舎別館・オペレータールーム  
（深夜）  
モニターが点滅している、確率50%  
の表示。  
大垣たちがいる車の横を通り、男が辺  
りを見回しながら中へ入っていく。

久慈、気がつく。

久慈、スマホに話す。

久慈「班長、怪しい男がいます。確率50%。服はわかりません。身長は高く、痩せています。今、大垣さんのいる入り口から中へ入りました。武部さん、ドローンで捕捉できますか？」

スマホ（武部）「おう」

○与野・市営住宅・入り口付近・バス（深夜）

武部、FVPRゴーグルをはめてパソコンを操作している。

坂本、大きく息を吐いて、坂本「全員、聞こえるか、ようやく現れたよ。うだ、服装はわからない、身長は高い、やせ型の男。大垣のいる入り口から入った。いつでも出られるように」

武部、スマホに話す。

武部「久慈！ 捕捉した」

スマホ（久慈）「ありがとうございます、今、

2棟を通過、まっすぐ4棟へ向かっています」

○同・別の入り口・二台目の車・横（深夜）  
大垣、静かにドアを開けて外に出て、上腕部を、続いて腿を叩いている。菜々子、曾我、ゆっくり出て、そーっとドアを閉めている。

○同・入り口付近・一台目の車・横（深夜）  
三瀬、秋葉、榊原、車の横に立っている。

○同・入り口付近・バス・中（深夜）  
坂本、武部、スマホに見入っている。スマホ（久慈）「4棟に着きました。裏へ回っています。確率99%。見上げて、周りを確認して、手に何か塗っています。1階のベランダに手をかけ、登っていきます。うひょー！ ボルダリングだ！ 速い！ 腕

と足だけであつという間に3階に到達、ベランダの中に入り、下着を掴んで、ポケットに入れていきます」

坂本「男は下着を盗んだ。とてつもなく身軽だぞ、ガキ！　右から4棟に向かえ！　三瀬は左から！　ナナ、曾我、ケン、キバ、所定の位置へ！」

○同・中央付近（深夜）

大垣、右側を疾走している。

三瀬、左側を進んでいく。

後ろに曾我、榊原の姿が見える。

○同・入り口付近・バス（深夜）

スマホ（久慈）「男が下に降りました、辺りを見回してから大垣さんの方にゆっくり歩いています」

坂本「ガキ！　正面にいる。三瀬、右へ！　ケン、曾我！　行け！」

坂本、武部に行けと合図。

武部、急いで降りる。

○同・3棟付近（深夜）

男、正面から大垣が、右手から三瀬が来るのに気がついた、一気に走り出す。

大垣、トップスピード。

男、大垣が迫ってきた瞬間、左に行くと見せかけて右に大きくステップを切り、三瀬の方に向かう。

大垣、勢い余って芝生に突っ込んでいく。

84

三瀬、両手を広げて、

三瀬「警察だ！止まれ！」

男、左に向かい、車のボンネットに手をかけジャンプ、植え込みを軽々と飛び、シーソーを飛び、手すりを滑り降り、右に左に自在に走り抜けていく。

三瀬、すぐ横をすり抜けられる。

榊原、正面から迫っていく。

男、花壇を超え、自転車を飛び越え、

車を次々に交わしていく。

榊原、淡々と追っていく。

榊原「パルクールか、フリーランニングをやっています。予測のつかない動きをするので、捕まえそこないましたが、追います」

曾我、駐車している車や障害物に邪魔され、思うように走れない。

榊原、大声で、

榊原「待て！この野郎！」

坂本、武部、フェンスの外で待ち構えている。

85

大垣、足を引きずって、歩いている。  
三瀬、走っている。

男、パルクールで植え込みや花壇を飛び越え、手すりなどを利用して逃げ回る。

榊原、距離を保ちながら追っていく。  
菜々子、入り口横の電柱の後ろに隠れている。

秋葉、入口横で、そわそわしている。

団地の明かりがあちこちつき始め、人が降りてくる。スマホで撮影している。被害者の女子大生、女子高生、母親、走ってくる。  
男、足色が少し鈍っている。  
榊原、じわじわ差を詰めている。  
男、何度も後ろを振り返っている。  
曾我、一気に差を詰めてきている。

○同・別の入り口（深夜）

男、入り口までやってくる。  
榊原、迫る。  
男、後ろを見ながら走って、入口を通過。  
菜々子、電柱の後ろから思い切り足を出す。  
男、もんどりうって倒れる、起き上がれない。  
榊原、菜々子、取り押さえている。  
曾我、急停止している。

榊原「下着の窃盗だな。現行犯逮捕する」

菜々子、手錠をかける。

榊原、犯人のポケットから下着を取り

出す。

榊原「下着がありました」

男、起き上がれない。

坂本、武部、走ってくる。

坂本「ナナ！ やるじゃないか」

坂本、スマホに話す。

坂本「久慈、終わったぞ」

スマホ（久慈）「やりましたね」

野次馬が集まっている。スマホで撮影

しながら、犯人を罵っている。

秋葉、バスを入り口横につける。

三瀬、車をその横へ。

大垣、やってくる。

母親、女子大生、女子高生駆け寄ってくる。

母親「ありがとうございます。犯人の顔を見てもいいですか？」

曾我、男を引っ張り上げる。

女子大生、男の頬に思い切り平手打ち。

女子高生、男の股間に前蹴り。

男、うっと声をあげて、うずくまっ  
ている。

榊原、女性たちを制止している。

榊原「気持ちわかるけどだめですよ」

菜々子「よっぽど腹に据えかねてたんだ。い  
い気味」

坂本、母親に向かって、

坂本「今の暴力は映像に撮られています。隠  
すことはできませんので、証拠として提出  
します。後々どうなるかは私にはわかりま  
せん。犯人の家の家宅捜索がすぐにでも行  
われます、盗まれた下着があなたたちのも  
のか確認してもらう必要がありますので、  
警官が伺うと思います」

母親「殴ったことは謝ります。今日は本当に  
ありがとうございます」

菜々子「お咎めがないように願っています」

榊原、男を連行しながら、

榊原「パルクールの技は見事だったな」

男「次は逃げ切ってやる！」

榊原「バカか？」

大垣、足を押さえながら、ふてくされてる。

三瀬、大垣の足を気にかけている。

大垣「俺がミスったばかりに大捕り物になって悪かった。あの素早さには参ったっぺ」

三瀬「俺も動きが読めなかった。で、足は大丈夫か？」

大垣「あー、多分、打ち身だけだと思う」

坂本、全体を見渡して、

坂本「交番へ犯人を引き渡して帰るぞ」

○久慈宅・瞳の部屋（早朝）

久慈、疲れた様子で、瞳の部屋のドアを開けてベッドのそばへ、瞳、寝ている。

久慈、黙って瞳を見ている。

瞳、気づいて、デュベスタイルを胸に抱き、体を起こす。

久慈「ごめんごめん、起こしてしまったか。もしかしたら今日も泊ってるのかと思い、覗いてみただけなんだ」

瞳、微笑んでいる。

瞳「来るような予感がしてた。もしかして今帰宅？ お酒飲んだの？」

久慈「仕事してた」

久慈、瞳の顔に息を吹きかけてる。

瞳、目を見開いている。

久慈「な、お酒飲んでないだろう」

瞳「びっくりするじゃない。キスされるのかと焦った」

久慈、立ち上がり、出ていく。

久慈「徹夜はこたえる、眠くなってきた。またな」

瞳、小声で、

瞳「驚かせてくれるじゃん」

### 第3話

○久慈宅・リビング（夕方）

弥生、書道の生徒4人（中年女性）、ソファに座って話している。

キッチンで瞳と女友達が寿司、オードブル、ローストビーフ、リブ、特大のケーキ、フルーツ、和菓子、お皿、グラス、スプーン、箸を綺麗に並べている。

久慈、榊原、三瀬、菜々子、曾我、大垣、秋葉、ビール、ウイスキー、ジュース、氷を持ち、入ってくる。

弥生「いらっしやい、重いでしょう」

榊原、三瀬、菜々子、曾我、大垣、秋葉、挨拶しながらキッチンまで飲み物を運んでいる。

三瀬、料理を見ている。

三瀬「すげー料理が並んでる」

瞳「生徒さんたちが用意してくれたの」

久慈、三瀬たちをリビングへ招いてい

る。

三瀬、大垣、菜々子、秋葉、曾我、榊

原、ソファに座る。

三瀬、生徒1、2に話しかける。

三瀬「なんか気を遣わせたみたいですね」

生徒1「いいのいいの、若い刑事さんが来るって聞いて張り切っちゃった」

生徒2「刑事って大変な仕事でしょう、ご馳

走しなきゃね」

弥生「もうすぐ花火が上がるわよ、さあ食べ

ましよう、飲みましよう」

全員、キッチンに向かう。

瞳、ローストビーフをカットして皿に

より分けている。

女友達、グラスに氷を入れ、飲み物を

注いでいる。

菜々子、指さし確認しながら、何から食べるか迷っている。

大垣、オードブルから取っていく。

大垣「まずは前菜からだっぺ、スモークサー  
モン、生ハム、カルパッチョ、バーニヤカ  
ウダ、どれもうまそう」

菜々子「わかるけど、お寿司もデザートも美  
味しそうで」

三瀬、寿司をこそっと取り、ロースト  
ビーフとビールを片手に、

三瀬「俺はこれで十分」

久慈、オードブルとローストビーフ、  
リブを食べながら、窓から外を見てい  
る。

瞳、オードブルを食べながら久慈のそ  
ばへ、

久慈「皇居が見えるだろう。花火はその向こ  
うから上がるはず」

瞳「東京タワーはここより低いんだ。スカイ  
ツリーは同じくらいの高さに見えるね。あ  
っ花火が上がった」

久慈、全員を呼んでいる。

全員、窓のそばへ、

花火が上がるたびに歓声。

大垣、菜々子、話している

大垣「彼女、欲しくなったべ、手をつないで

花火を見たい」

菜々子「マッチングアプリしてみれば？　メ

タバースマッチングアプリは？」

大垣「やってるの？」

菜々子「私は経験ないけど、友達ハマって  
いるわよ」

大垣「考えてみるかな」

次々に花火があがっている。大歓声。

生徒1・三瀬の隣に、

三瀬「花火を上から見て、おいしいもの食べ  
て、おー贅沢だわ」

生徒1「がんばって仕事してるから、ご褒美！」

三瀬「お姉さん、いいこと言ってくれるね」

生徒1、大げさに三瀬の背中を叩く。

生徒1「お姉さんって！　もう、酔ったんか」

曾我、久慈と瞳のそばへ、

曾我「久慈よう！　いきものががりの

HANABIとか YOASOBIのなんじゃったかな、花火の歌を聞きだぐなった」

瞳「あの夢をなぞって、やね」

曾我「そうそう」

榊原「久慈さん！ BLUETOOTHスピーカー

はありゃーすか AIKOの HANABIもあるし」

久慈、取りに行く。

生徒1「あんたらおもしろいなあ、めっちゃ訛ってるやんか」

三瀬「あれ、大阪かいな、はんなりとしたお姉さんに見えたのに」

生徒1「あんたが大阪やいうのはすぐわかったがな、わてはれっきとした大阪のおぼはんや、久しぶりに大阪弁が出てもうたがな、ケーキ切ったるさかい、誰ぞ、食べるか？」  
菜々子、瞳「食べまーす」

○同・瞳の部屋（朝）

久慈、そーっとドア開けている。

荷物が増えている。

瞳、起きています。

久慈「あれっ、もう起きてる」

瞳「もう驚かない」

久慈「荷物が増えたな」

瞳「昨日、友達にも手伝ってもらったの」

久慈「大きい荷物は？」

瞳「家具とか洗濯機など大きいものはリサイ

クルショップに引き取ってもらおう」

久慈「いいの？ 出ていくことになったら、

また買うことになる」

瞳「その時はその時、明日に最後の荷物を持

ってきて終了」

久慈「がんばったな、じゃあ仕事に行くわ」

瞳「私も大学に行くから、一緒に出よう」

○トランプタワー麻布・居住者用エントランス（朝）

コンシェルジュ、ガードマン、久慈と

瞳に気づく。

コンシエルジュ「おはようございます。タワマン刑事」

久慈「おはよう」

ガードマン「彼女？ 泊ったの？ 朝帰り？」

久慈、睨んでいる。

久慈「違う違う、ルームメイト」

瞳「居候なの」

ガードマン「あのストーカー被害にあった女性  
性が相談したいことがあるって言ってた。

刑事さんの携帯番号を勝手に教えるわけに  
はいかなかったです」

久慈「俺の携帯番号伝えておいて」

ガードマン「行ってらっしゃい」

○麻布・コンビニ・前（朝）

久慈、瞳、コンビニの前を通過してい  
る。

店員1、久慈と瞳を見つけて飛び出し  
てくる。

店員1「あれ！ あの時の女性？ やるな

あ！ タワマン刑事」

久慈「出てくるんじゃないよ。仕事しろって」  
瞳、笑ってる。

○警視庁神田庁舎別館・ミーティングルーム

（朝）

全員、揃っている。

坂本、入ってくる。

坂本「おはよう、今日の予定を武部から」

武部「交通違反して罰金を払わない。裁判所

の呼び出しにも応じない。それも複数回。

そいつらを見せしめのためにまとめてとっ

捕まえる。行先は東京都内でターゲットは

6人。平日なんでおそらく会社にいる。人

数が多いので今日は2チームに分ける。各

チーム3人逮捕してくれ、なお女性記者1

名が取材のために同行する。坂本班長、三

瀬、秋葉、曾我が△チーム。俺、榊原、大

垣、菜々子が□チーム、以上」

三瀬「見せしめってか」

榊原「記者が同行って、何か聞かれたら？」

武部「世間話だけして、仕事の話は班長にまかせておけばいい」

坂本、今日の予定表を久慈に見せている。

坂本「久慈、今日は暇だと思うけど、準備だけは頼む」

久慈「了解」

○警視庁神田庁舎別館・駐車場（朝）

清水優子（34）、カメラマン、待っている。

坂本班全員、やってくる。

優子「東都新聞の清水です。今日は同行取材させていただけますのでよろしく願います」

カメラマン「よろしく」

坂本「邪魔はしないでくれよ、それから刑事たちの顔出しは禁止、質問は俺が答える、それでいいか？」

優子「かまいません。でもひとついいですか？」

優子、三瀬に向かって、

優子「ラグビーの三瀬さんですよ。警視庁に入られたとは驚きです。ジャツカルの三瀬といえはラグビーファンならみんな知っていますよ。かっこよかったです」

三瀬、おおいに照れる。

三瀬「あちゃー」

坂本「清水さん、三瀬のことや他の刑事のことについて書くのはダメ。約束してくれるか？」

優子「もちろんです。知らないふりはできなかったのです。知れないふりはできなかったのです。」

坂本「清水さんとカメラマンはバスに乗ってくれ」

○秋葉原・家電量販店・前・車・中

武部、大垣、榊原、菜々子、車内で打ち合わせている。

武部「犯人はパソコン売り場に勤務、名前は

森田、写真とデータはこれ。大垣と俺で逮捕に向かう。榊原は正面入り口に、菜々子は通用口に、出入口は2つしかないので逃げられたときはどちらかが押さえてくれればいい、何か質問は？」

榊原「質問はありません。逃げられないようお願いします。ここは人通りが多いので追いかけるのは簡単じゃない」

菜々子「私も取り押さえられるか不安です、私を突破されたらと思うと」

武部「まあ、心配しないで、さあ行こう」

○同・中

大垣、武部、店内へ、

榊原、兼光、所定の位置へ、

大垣、一直線に二階のパソコン売り場へ、

武部、速足で左から回り込んでいく。  
大垣、写真を見ている。

大垣「いました。森田です。写真と一致しま

した。逮捕します」

大垣、森田の真横へびったりつく。

森田、たじろいでいる。

大垣、左手で森田の右腕を掴みながら、逮捕状を見せる。

大垣「警察です。森田さんですね、交通違反の件で逮捕状が出ています。ご同行願います」

森田「逮捕ってなんですか？もしかして駐車違反のことですか」

武部、森田の左腕を掴んでいる。

大垣「おわかりのようで、駐車違反8回ですね、罰金を一度も払わず、出頭にも一度も応じていませんね」

大垣、手錠をかける。

店長、店員たち集まってくる。

店長「何事ですか？」

大垣「繰り返しますが、駐車違反8回、罰金を一度も払わず、出頭もしてこないの逮捕します。これが逮捕状です」

店長、森田に向かつて、

店長「お前、バカか！ 刑事さん、今ここで罰金を払って許してもらえないでしょうか」

森田、うなだれている。

武部「残念ながら無理です。私たちは逮捕するよう命令されてるだけです。これから警視庁の交通課に身柄を引き渡します。これからこのことはそちらでお願いします」

大垣、武部、森田を連行していく。

店長、店員たち、騒然としている。

○同・車・中

榊原、菜々子、戻ってくる。

武部、大垣、森田、戻ってくる。

武部「簡単だったな。交通課に身柄を渡して次に向かうぞ」

大垣「ちよろいだっぺ」

○新宿通り・バス・内

秋葉、運転している。

優子、カメラマン、坂本、三瀬、座っている。

曾我、バイクでバスの後方を走っている。

優子「坂本さん！ お伺いしてもいいですか」

坂本「ああ」

優子「私は警視庁の番記者になって2年になります。坂本班を一度も見かけたことがないので」

坂本「このチームは結成して間がないからな」

優子「知り合いの刑事さんに坂本班と同行取材に行くんですと言ったら、誰？ って返事が、まったく知らないようでした。どういうことですか？」

坂本「俺たちは別館にいるから、本庁の人たちと交流がない」

優子「直属の上司は？」

坂本「古賀警視監」

優子「えー、ナンバー2じゃないですか」

坂本「詮索はそこまで、着いたようだな」

○新宿・木戸建設会社・前・バス・内

曾我、入ってくる。

坂本、窓からビルを見ながら、写真と逮捕状を手に持っている。

坂本「大きいビルだな、三瀬と秋葉にまかせろ。清水さんとカメラマンも同行する。ターゲットは専務の木戸。写真はこれ。6階の専務室にいるはずだ。曾我は1階のエレベーター付近で待機、バイクは入口横、俺はバスの中にいる。受付やガードマンに止められるだろうが、上手に対処しろ。連絡されて社内どこかに移動されるとこのビルは広いので探すのは難儀、逮捕理由は駐車違反24回、一度も罰金を払ってない。逮捕状はこれ」

坂本、写真と逮捕状を三瀬に渡す。

三瀬「専務だろ！ 金に困ってるわけではないのに、なんなんだよ。24回もシカトつて」

秋葉「ブツブツ言うたらんで、さあ行くでえ」

三瀬、秋葉、優子、カメラマン、降りていく。  
曾我、降りて、バイクを移動させている。

○同・受付

三瀬、秋葉、優子、カメラマン、受付の女性と話している。

曾我、エレベーター前にいる。

三瀬、警察手帳を提示している。

三瀬「木戸専務を逮捕する！ 誰とも話すな

よ、あの刑事がずっと見ているからな」

三瀬、曾我を指さしている。

女性、うなずいている。

三瀬、秋葉、優子、カメラマン、エレ

ベーターに乗りこむ。

曾我、女性をじっと見ている。

○同・専務室

三瀬、ノックすると同時に部屋に飛び

込む。

秋葉、優子、後に続く。

カメラマン、撮影しながら入っていく。

専務、2人の男性とソファで談笑している。一斉に振り向く。

三瀬「木戸専務ですね」

木戸「なんだ、貴様ら」、

男性1、男性2、立ち上がる。

三瀬、キツと睨む。

三瀬「そのまま動くなよ。警察だ、木戸専務に逮捕状が出ています。ご同行願います」

107

三瀬、逮捕状を見せる。

専務「逮捕だと、わしが何をしたって言うんだ」

三瀬「駐車違反24回」

専務「駐車したのは俺じゃない、運転手の代わりに俺がサインしただけだ。逮捕するなら運転手だろうが」

三瀬「専務とあろうお方がくだらん言い訳しやがって」

カメラマン、回り込んで撮影している。

専務「こらっ！ お前！ 勝手にカメラを回すな」

男性1、カメラを奪いにいく。

秋葉、すかさず止めに入る。

三瀬「これ以上話すことはない」

三瀬、手錠をかけようとする。

専務、暴れて殴りかかる。

三瀬、拳をかわして、力づくであつと

いう間に抑え込む。

秋葉、手錠を取り出す。

三瀬、専務を押さえ込みながら男性二人を強く睨む。

三瀬「手を出すなよ。公務執行妨害でお前らも逮捕されたいか！」

男性1、2、動けない。

専務、押さえ込まれ、後ろ手に手錠をかけられている。

専務「この野郎、覚えてろ！ 後悔させてやる」

三瀬「ご勝手に」

三瀬、秋葉、専務を引きずり上げ、強引に引っ張って部屋を出ていく。  
優子、カメラマン、慌てて後を追う。  
男性 1、2、呆けたように見送っている。

○同・受付

三瀬、秋葉、専務を連行していく。  
曾我、後ろにいる。  
専務、わめき散らしている。  
カメラマン、撮影している。  
人がたくさん集まってくる。スマホで撮影している。  
三瀬、受付の女性に向かって話す。

三瀬「騒がせたな」

○同・前・バス

曾我、バイクに乗っている。  
三瀬、秋葉、専務を中へ引っ張り込む。

優子、カメラマンも乗りこむ。

坂本「冷や冷やさせるなよ。俺も加勢しようかと迷ったわ」

優子「三瀬さん、強い！」

専務、強引に座らされている。

専務「お前ら、ちゃらちゃらするな」

三瀬「黙れ！ さっさと罰金払っとけばこんなことにならない。会社内の信用はがた落ちだろう、自分のクビの心配しとけ！」

専務「やかましいわい」

坂本「交通課に専務の身柄を預けて、次行くぞ」

三瀬「班長！ 腹減った！」

坂本「おう！ 二人目を逮捕したら、食べさせてやるからな」

○お茶の水・ビル

大垣、菜々子、犯人を連行している。

○成城学園前・道路上

三瀬。曾我、犯人を連行している。  
カメラマン、撮影している。

○浅草・道路上

大垣、榊原、犯人を連行している。

○大手町・うどん店・内

坂本、三瀬、秋葉、曾我、優子、カメラマン、座敷に座り、食事している。  
武部、菜々子、大垣、榊原、入ってくる。

111

坂本「お疲れ、さー食べてくれ」

大垣、注文している。

坂本「3人逮捕したのか、負けたな、うちはまだ一人残っている」

武部、菜々子、大垣、榊原、席につく。

武部「秋葉原、お茶の水、浅草だったので近かったし、手間もかからなかっただけです」  
坂本「申し訳ないが手伝ってくれるか、最後のやつがややこしそうなんでな」

カメラマン、榎原を見ながら、優子と  
小声で話している。

カメラマン「あの人、もしかしたら榎原さん  
じゃないかな？ 箱根駅伝で何度も見た、  
出雲や全日本にも出てた、マラソンもやつ  
てたはず」

優子「えーそうなの？ 聞いてみるわ」

武部、大垣、榎原、菜々子に料理が運  
ばれてくる。

優子、坂本に話しかける。榎原を指さ  
している。

優子「あの人、駅伝の榎原さんじゃないです  
か？」

坂本「そうだよ」

カメラマン、したり顔。

優子、カメラマンに小声で話す。

優子「このチームはどうなってるの？ 三瀬  
さんといい、榎原さんといい、他のメンバ  
ーも調べなきゃ、とんでもない人たちの集  
まりかもしれない。そーっと写真撮ってお

いてくれる？」

○南千住・結城のアパート・付近・バス・内  
全員、バスの中にいる。

坂本、久慈とスマホで話す。

坂本「待たせたな。南千住の防犯カメラを引っ張り出してくれ、ドローンの映像も後で送る」

スマホ（久慈）「待ちくたびれました。了解です」

坂本、振り向いて全員に話す。

坂本「名前は結城。逮捕理由は60kmオーバ―のスピード違反、罰金も払わず、出頭もしない。アパートの2階、階段上がって右から3つ目が結城の部屋、このアパートは窓から飛び出ると四方八方、どこにでも屋根伝いに行ける。先に窓の下で待とうかと思ったが、落ちて怪我をする可能性がある。それで人数もいることなんで出来れば下で捕まえたい」

曾我「確かに、屋根の上ではやりたくないな」

三瀬「俺が正面から行くから後は頼む」

坂本「三瀬！ 先に大家から鍵を借りてきて

くれ」

三瀬、降りていく。

坂本「武部！ ドロロンを頼む」

武部、ドロロンとパソコンを持って降りていく。

坂本「榊原は窓の真下に、秋葉は車で正面に。

大垣は左端で。右側は誰もいなくていい。

ここから降りてもらおう。バスは右側100

114

m先に停車、曾我のバイクもバスの横で、  
菜々子、武部、俺はバスの中」

武部、戻ってくる。FVPゴーグルを装着してパソコンに向かう。

三瀬、大家を伴なって戻ってくる。

榊原、秋葉、大垣、曾我、降りていく。

スマホ（久慈）「ドロロンの映像が届きました。

結城は部屋にいるようです。人影が見えます」

坂本「三瀬！ 大家さんで行ってってくれるか、清水さんはどうするか自分たちで判断してくれ！ 邪魔にならなければいいから」

三瀬、大家、降りていく。

優子、カメラマン、話しながら降りていく。

榊原、秋葉、大垣、曾我、所定の位置にいる。

バスは移動している。

三瀬、大家、階段を上がり結城の部屋へ、

115、

○同・結城の部屋・前

大家、優子、カメラマン、三瀬の後ろにいる。

三瀬、チャイムを押し、強くノック。

三瀬「結城さん、いらっしやいますか、警察です。ドアを開けてください」

反応がない。

三瀬、さらに強くノック。

三瀬「いないのですか？ 逮捕状が出ている

のでドアを開けます。大家さんお願いしま  
す」

大家、鍵を開ける。

部屋の中にいた結城、窓を開けて屋根  
に飛び降りる。

三瀬、部屋に入るが一步及ばない。

三瀬「こらっ、待てー、結城！ 窓から逃げ  
ました。後を追います」

優子、カメラマン、慌てて階段を下り  
ている。

○同・バス・中

スマホ（久慈）「結城は真下と左に人がいるの  
を見て右に逃走中」

坂本「三瀬、ゆっくりでいい、落ちるなよ、  
全員まだ追うな、結城が降りてから捕まえ  
る」

○同・屋根の上

三瀬、窓から降り、声を張り上げてい

る。

三瀬「結城！ 待ちやがれ、止まれ！ 止まれ！」

結城、50mほど屋根伝いに右に逃げ  
てから、誰もいないのを見て、飛び降  
りる。

○同・バス・中

スマホ（久慈）「結城が右に降りました」

坂本「曾我、ケン、キバ、ガキ、予定通り右  
だ！ 追え！」

117

○同・道路・上

曾我、バイク発進。

榊原、疾走していく。

大垣、走っている。

秋葉、走っている。

優子、カメラマン、秋葉の後ろから追  
っている。

榊原「結城の姿は見えています、足には自信

がありそうですけど、徐々に詰まっています」

坂本、運転しながらバスを移動させ、先回りしている。

曾我「見えました。正面にいます。後ろからケンが追っているので挟み撃ちできそうです」

秋葉、スピードを緩めている。

秋葉「終わりだな」

カメラマン、秋葉を抜いていく。結城、小さな橋のところで、右に曲がり、幅1mの小川の上を両手両足をいっばいに広げ、壁と壁を押さえてカエルの格好で少しずつ前に進んでいる。榊原、橋まで来たが、追うべきか迷っている。曾我也やってきたが留まっている。

榊原「S A S U K E ですよね」

曾我、ゲラゲラ笑っている。

曾我「まさにS A S U K E。でも遅い」

カメラマン、撮影している。

榊原「班長、一筋、向こう側で待ち伏せできませんか？」

武部、菜々子、向こうの橋に向かって走っている。

○同・小さな橋の上

結城、疲れたがなんとか壁を越えて、橋の上に到着。

菜々子、武部が目の前にいる。

結城、諦めて座りこむ。

菜々子「結城さんですね。逮捕状が出ています」

武部、結城の肩を叩き、

武部「S A S U K E ! 完全制覇だな」

結城、上目遣いに見ている。

武部、手錠をかける。

カメラマン、撮影している。

結城、疲れて立ち上がれない。

武部、結城を引っ張り上げている。

武部「さあ立て」

○同・道路・バス・内

秋葉、菜々子、武部、結城、榊原、曾我、バスの中へ。

カメラマン、優子、大垣、遅れてバスの中へ。

大垣「あれ、三瀬さんは？」

坂本「三瀬！どこにいる？」

三瀬「まだ屋根の上です。結城の部屋に戻ろうとしたものの滑って登れないし、降りる場所が見つからへん、われながらどんくさい」

榊原、手を叩いて喜んでいる。

大垣、大笑いしている。

榊原「たきゃーいところが苦手」

優子「ふふふ、三瀬さんでも弱点ってあるん

ですなー」

坂本「迎えに行くわ」

○同・結城の部屋・中

大垣、榊原、窓から乗り出して三瀬を見ています。下には残りのメンバー。

大垣「どうするかな、三瀬さん100kgはあるから引っ張り上げるのは無理だっぺ。となると下に降りるしかないけど」

榊原「三瀬さん、窓から屋根によう行けたなあ」

三瀬「捕まえてやろうと思うとさっと体が動いたんやで」

坂本「誰か大家さんに梯子を借りてきてくれ」  
121

大家、武部、梯子を抱えて三瀬のいる屋根に立てかける。

ようやく三瀬が降りてくる。

坂本「お疲れ！ SASUKEを交通課に引き渡してから帰るぞ」

○上野付近・バス・内

秋葉、運転している。

優子、三瀬の隣に座っている。

大垣はその後ろ。

優子「三瀬さん今日はごくろうさまでした。

大活躍でしたね。これから予定はありま

す？ 食事しながらラグビーの話をしませ

んか？」

大垣「ええなあ、女性から誘われちよる」

三瀬、後ろを振り返って、

三瀬「ちっとは考えてみるって、俺はバカだ

けどこれはわかるやん。魂胆があるってこ

とじゃないか、彼女が知りたいことを喋っ

てくれるとね」

優子「それはないですよ、ラグビーが大好き

なだけです」

三瀬「新聞記者でなかったら喜んでお供しま

すが、さすがに見え見えで、今回はお断り

や」

優子「あー残念」

○久慈宅・キッチン（夕方）

ルンバが2台掃除している。

瞳、弥生、キッチンのテーブルでお茶を飲んでいる。

瞳「手伝っていたいただいてありがとうございます。ごさいました。後は自分でやります」

弥生「荷物が思っていたより少なかったけど、また小さい冷蔵庫が増えちゃった」

瞳「この部屋に合わないとか言っておきながら、捨てるに捨てられなくて」

弥生「ところで孝志とはうまくやっけていけそう？」

瞳「早朝にいきなり入ってくるのには参りましたけど、なんかなれちゃった」

弥生「あらあら」

瞳「自分でもよくわからないのですが、今日は来るかなって」

弥生、意味深な表情。

弥生「あらまあ」

○同・瞳の部屋（早朝）

久慈、そーっと入っていく。

荷物がさらに増えている。

瞳、ぐっすり寝ている。パジャマの前がはだけている。デュベスタイルはめくれている。

久慈、しばらく何も言わず眺めている。

久慈「おはよう、おっぱい見えてるわ」

瞳、絶叫。

瞳「ぎゃー」

瞳、慌ててパジャマを整えて、デュベスタイルを引き上げる。

久慈、胸を押さえながら、のけぞっている。

久慈「びっくりした。大声出しすぎ」

瞳、俯いて、

瞳「引っ越しで疲れて起きれなかった、誰にも見せたことがなかったのにー、見られてしまった、ショック！」

久慈「綺麗なおっぱいだっただよ」

瞳「あーあー褒められても嬉しくない」

久慈「引っ越し無事に済んだんだ」

瞳 「うん」

久慈 「まだおっぱいが目に焼き付いているわ」

瞳 、ようやく顔を上げて、口をとがら

せている。

瞳 「ただで見たんだから何か奢ってよ！」

久慈 「スタバのフラペチーノ」

瞳 「安すぎる」

久慈 「ドミノピザ、ホタテ」

瞳 「それがいい」

久慈 の携帯が鳴る。

久慈 「もしもし」

スマホ（珠理） 「あのう、麻布トランプタワーに住んでいる佐野です。以前ストーリーカーから守っていただいた・・・」

瞳 、久慈を見ている。

久慈 「あーガードマンから相談があるって聞いたけど」

スマホ（珠理） 「そうなんです、一度お伺いしてもよろしいでしょうか」

久慈 「いいですよ、今晚でもよければ」

○警視庁神田庁舎別館・トレーニングルーム  
坂本、菜々子とワークアウトしながら話している。

坂本「古賀警視監から聞いたのだが、実際に人を撃ったことがないんだな」

菜々子「ありません。人形は散々撃ちましたけど」

坂本「では聞くが、犯人を撃てと命令されたときにためらわずに撃てるか？」

菜々子「撃てると思います。撃てないようじゃ坂本班にいる意味がありません」

○川越・坂本宅・居間（夜）

二世帯住宅。

坂本の妻有香、坂本、くつろぎながら座って話している。

父親やってくる。

有香「おばあさんが心配なの」

坂本「どうした」

有香「まずあまり食べない、1日中うとうと  
しててほとんど動こうとしないの」

坂本「たしか90歳だったよな」

有香「病院に行きましようと言ってもどこも  
悪くない、痛いところもないって」

坂本「それは困ったな」

父親「有香さんの妹の莉緒さんが勤めている  
病院に連れていこうとしたのだが、怒り出  
す始末でな」

坂本「高血圧の薬を飲んでるから、副作用な  
のかも」

父親「様子を見るしかないかもしれん。年齢  
からくるものだったら病気ではないだろう  
し」

○久慈宅・リビング（夜）

佐野珠理（28）、久慈、ソファに座っ  
ている。

珠理「ストーリーカーから守っていただけで本当  
にありがとうございました。久慈さんはタ

ワマン刑事って呼ばれてるんですね」

久慈「たくさんお礼をいただいてこちらこそ恐縮です。佐野さんの事件があつてからその呼ばれるようになってしまった。その後ストーカーは来なくなつたのですか？」

珠理「おかげさまで。私のことはもう諦めたようです」

瞳、帰ってくる。

久慈「お帰り」

珠理「奥様ですか？」

瞳「違います。ただのルームメイトです」

珠理「私、佐野といいます。35階に住んでいて、以前久慈さんにストーカーを追い払ってもらつたのです」

瞳「新保です。あー聞いてます、こいつも少しは頼りになつたんだ」

久慈「それで相談つてなんですか」

瞳「私はお邪魔ですよね」

珠理「いえ、よろしければ」

瞳、にこにこしながら、久慈の隣に座

る。

珠理「ストーリーカーが私から離れたのはありがたいのですが、凝りもせず私の同僚に付きまとい始めたのです、元々、同じ会社にいましたので」

久慈「それで」

珠理「あいつは執拗です。メールや電話での嫌がらせ、脅迫、それが私の場合、一年続きました。同僚が同じ目にあうかと思うとたまりません。それで久慈さんに相談しようかと」

久慈「今はつきまといているだけです」

珠理「朝、車に乗って出かけると必ず見かけるそうです。帰ってくると公園にいたり、道端に立っていたりして、怖くて犬の散歩も一人では行けないし、買い物も車で行くしかありません」

久慈「接近禁止命令は出せると思います、ただ逆効果になるかもしれませぬ」

瞳、久慈の肩に手を置いている。

瞳「なんとかしてやりなよ」

久慈「そう言われてもなあ」

瞳「よくあるじゃん、何度も警察に相談したのに何もしてくれなくて、それでストーカーに殺されたとか」

久慈「脅かすなよ。彼氏はいないのですか？」

珠理「いないようですね」

久慈「ボディガードを雇うのが最善かな」

珠理「そうですね、彼女は裕福なので勧めてみます」

久慈「彼女は何歳？　どこに住んでいるのですか？」

珠理「たしか26か27歳だったはず、田園調布に住んでいます」

久慈「そんなに遠くないですね。俺もなにかしてあげられることがないか考えておきます」

○同・瞳の部屋（早朝）

久慈、朝食を持ってやってくる。

瞳、起きてる。

久慈「おはよう、今日はおっぱい見せてくれないんだ」

瞳「おはよう、残念でした。それ何？ 昨日のお詫び？」

久慈「まあな、たまには作るんだ」

瞳「ありがとう、やさしいところもあるのね」

久慈、テーブルに朝食を置き、本を手にとって見ている。

久慈「英語の書籍か、これが読めるんだ、これはスペイン語かな、これはイタリア語、でも思ったより少ないな」

瞳「今は書籍を買わなくてもいいの。電子書籍サービスやオンラインライブラリーを利用して世界各国の本を原書でパソコンやスマホにダウンロードしてるからね」

久慈「あーそうなんだ」

瞳「何か国語が喋れるといても自慢にならない、どこか一つの言語のスペシャリストにならなきゃダメ」

久慈「世界を旅する時には役にたつよ」

瞳「その時だけでしよう。ポケトークとかど  
んどん進化すると通訳なんか誰も必要とし  
なくなる」

久慈「ポケトークってたしか30以上の言語  
に対応してるよね」

瞳「英語のスペシャリストになって、それに  
加えて、MLBに詳しいとか、アメリカの法  
律に詳しいとか専門的な知識が必要」

久慈「厳しそうだな」

久慈、瞳、朝食を食べている。

久慈「それはそうと最初に会った時、刑事は  
嫌いって言ってたよな」

瞳「言ってたよね」

久慈「どうして？」

瞳「法廷通訳の仕事以外に、時々、刑事さん  
の取り調べの通訳を頼まれることがあるの。  
あの日がそうで・・・」

○（回想）取調室

刑事、取り調べている。

アメリカ人男性容疑者、ふてくされて  
いる。

瞳、通訳している、

刑事「お前が後ろから殴ったんだろうが」

瞳「You probably hit him from behind?」

容疑者「I am scared of the Japanese detective」

瞳「刑事さんが怖い」

刑事「ちゃんと質問に答えろ！」

瞳「Just answer my question」

容疑者「Do you like sushi? Order it  
by ubereats」

瞳「寿司は好きですか? ウーバーイーツで

注文してください」

刑事、きれる。瞳に向かって、

刑事「通訳が悪い、単に訳せばいいってもん

じゃない、俺が怒ったら、お前も怒れ! こ

れじゃあ埒が明かない」

瞳「そんなことを言われても・・・」

刑事「通訳を代えてもらおう、お前はもういい」

(回想終わり)

○久慈宅・瞳の部屋（早朝）

瞳「それでムカムカしてたのよ。なのにコン

ビニでタワマン刑事ってわけわかんない言

葉が耳に入ってきて、余計にね」

久慈「そういうことか、電話番号聞いてなかったんで教えてくれる？　メアドもな」

瞳「LINEは？」

久慈「SNSはやめたんだ。仕事柄しゃべってはいけないこともいろいろあるんで」

瞳「そうなんだ、じゃあスマホ貸して。私が登録する」

久慈、スマホを渡す。

瞳「なんなら待ち受け画面、私の写真にする？」

久慈、呆れている。

久慈「なんで？」

## 第4話

○久慈宅・瞳の部屋（早朝）

久慈、そーっとやってくる。

瞳、起きている。

久慈「おはよう」

瞳「おはよう、昨晚ね、お母さんに引っ越し

たって話したの」

久慈「事後承諾かよ」

瞳「へへ、そうなの、そしたらね、今日、見に来るって」

久慈「だろうな、娘を心配してるんだ」

瞳「うーん、それもあるけど、トランプタワ

ー麻布を見たいんだって？」

久慈「親子だなあ」

瞳「それはそうと、洗濯はどうしたらいい？」

久慈「ここは大型の洗濯機が禁止」

瞳「ポータブル洗濯機は？」

久慈「いいみたい」

瞳「じゃあ、買ってくる。それでコインランドリーと半々くらい利用するか」

久慈「望月さんがびっくりしてた。お前がバ  
スルームからなかなか出てこないって」

瞳「またお前っていう、ほかになにかいい呼  
び方ないの？」

久慈「俺のことをこいつとか言うくせに」

瞳「そんなこと言った記憶はありません、  
でも呼び方を決めようよ？」

久慈「新保さんはいやだな、よそよそしい」  
瞳「どうしようかな、孝志って呼びたいけど」

久慈「年上に呼び捨てかよ」

瞳「望月さんもそう呼んでるしね」

久慈「はあ？」

○警視庁神田庁舎別館・ミーティングルーム

(朝)

全員、揃っている。

坂本、やってくる。

全員「おはようございます」

坂本「おはよう」

坂本、タブレットを見ながら、話して

いる。

坂本「3時に山梨へ行く。山梨県警から応援の要請で、盗難車を外国に輸出する窃盗団の一斉摘発をする。事務所、倉庫、船舶などが対象になるが、我々は盗難車を保管している倉庫に向かう。武器を持っている危険な連中が相手なので、全員拳銃所持、防弾チョッキ、制服着用、体につけるドラレコ、スピーカーマイク、兼光はライフルを、武部はドローンを、曾我はモトクロス用のバイクで、ただし坂本班は後方支援なので先頭に立つことはない。バス一台で行く。バイクは積み込む。詳細は現地にて改めて説明する」

曾我、飛び上がっている。

曾我「おおお、やっと出番がきたー」

坂本「倉庫は山あいにあるらしく、空き地や農地、林に囲まれて道路は未舗装、だからモトクロス用のバイクがいる」

曾我「まだ時間あるすか？ モトクロス用の

バイクは使ってなかったの点検整備をしたい」

坂本「あー存分にやってくれ」

兼光、緊張している。

菜々子「私も射撃練習場へ行ってきました」

坂本「久慈！今日は一緒に来るか？監視

カメラもない場所だし、たまには現場の空  
気を感じたら？」

久慈、ガッツポーズ。

久慈「行きます。一人くらいはとっ捕まえま  
すよ」

坂本「バスから出るな！見てるだけだ」

久慈、啞然。

久慈「えー、トレーニングしてるんだけど」

坂本「勝手な行動したら二度と同行させない」

久慈「わかりました。飲み物や軽食を買って  
きたり、雑用は引き受けますよ」

### ○同・駐車場

曾我、モトクロス用バイクを整備して

いる。

秋葉、手伝っている。

○同・射撃場

菜々子、電子イヤーマフを装着して、ライフルを伏射で撃っている。

大垣、三瀬、榊原、耳栓をして拳銃を撃っている。

○神田・コンビニ

久慈、おにぎり、パン、スナック菓子などを購入している。

○山梨県大槻・倉庫・近辺

パトカー40台、白バイ3台が集結している。

坂本、武部、タブレットを見ながら、山梨県警捜査員からの状況説明に聞き入っている。

久慈、菜々子、自動販売機で飲料を購

入して、バスに持ち込んでいる。

○同・バス・内

軽食、ドリンクをみんなが車内でほおばっている。

坂本、武部、戻ってくる。

坂本「俺にもなんかくれ」

久慈、おにぎりとお茶を坂本と武部に手渡している。

坂本、武部、食べている。

全員、坂本の周りに集まっている。

坂本「40台のパトカーが倉庫を取り囲む。

捜査員90名が一気に正面から突入する。

先頭は機動隊、山梨県警、警視庁、坂本班は最後尾、三瀬、大垣、秋葉、榊原、武部の5人が行く。曾我は裏口近くに白バイが3台いるのでそこに合流。指示は白バイ隊員から聞くこと、バスは裏口近くに駐車しておく。バス内には俺と兼光と久慈、残念ながらライフルは使用しないことになった。

ドローンも今日は飛ばさない」

菜々子、がっかりしている。

菜々子「ええっ！ 私も見てるだけですか」

坂本「ああ」

大垣「最後尾なんて何にもできないっぺ」

三瀬「なんで俺たちが呼ばれたんだろう、誰

でもよかったんっちゃう？」

秋葉「楽でええのう」

坂本「そうかといって気は抜くな、ぼやっと

してるって怪我につながる。曾我、裏口に今

から行ってくれ」

曾我、バスから降りて、モトクロス用

バイクで走り出す。

坂本「山梨県警が何か月も内偵捜査をしてや

っと一斉検挙にこぎつけた。10人前後が

中にいるらしい」

坂本に無線が入る。

坂本「よし、出発だ」

パトカー40台、一斉に走り出す。バス

は最後尾。

○同・裏口

舗装されていない、ぬかるんだ道、段差がいくつかあって、後ろに竹藪、その後ろは山。

曾我、裏口に到着して白バイ隊員、植田、真鍋、茂原と話している。

曾我「警視庁からきた曾我です。よろしく」

茂原「山梨県警の植田と真鍋と茂原です。モトクロス用のバイクじゃないですか、すごい」

植田「曾我さんって？　もしかしてプロのモトクロスライダーじゃありませんか？」

曾我「そうだったです、過去形ですが」

真鍋「日本でトップの阪田真之介選手を脅かすと言われてましたよね」

茂原「やたらと詳しいな」

曾我「そんなこともありました。でも彼には到底かなわなかった」

植田「ジャンプした後の空中でのパフォーマンスが華麗だったんですよ。まさかこんな

ところで会えるなんて感激です。バイクを見せてもらっていいですか？」

曾我「どうぞ」

植田、バイクを持ち上げて、真剣に見ている。

植田「軽い、こんなに軽いとは、あのターンができるわけだ。2ストロークエンジンなんです、パワーが桁違いだわ。サスペンションはこんなになってるのか、豪快なジャンプをしても壊れない」

真鍋、茂原も覗き込んでる。

車の音が次第に大きくなってきている。無線が入ってくる。

茂原「今から突入するそうです」

全員、バイクに乗って身構える。

坂本のバスが来て、少し離れたところに停車。

○同・敷地内

機動隊員15名が防護楯を前面に構え、

防護ヘルメット、防弾ベストを着用し、トンプアー型警棒、スタンガン、催涙ガスランチャーを武器に突入していく。正面にはプレハブの事務所、左には整備工場があり、右には盗難車がずらつと並んでいる。

整備工場から3人、飛び出してくる。窃盗団員1、インパクトレンチで機動隊に立ち向かい、防護楯を叩いているがびくともしない。3名の機動隊員に防護楯を三方から被せられ、押さえつけられて逮捕。

窃盗団員2、プライヤを右手に持ち、飛び蹴りを試みるが空振り、あっけなく逮捕。

窃盗団員3、鉄パイプを振り回し、逃げたり、攻撃したりしている。捜査員たち、続々入ってくる。

窃盗団員4、車の中に隠れているが、捜査員に見つかり、引きずり出されて

いる。

機動隊員、事務所に突入していく。

窃盗団員5、激怒しながら日本刀を構えている。

窃盗団員6、7、逃げ出している。

窃盗団員3、スタンガンを押し付けられ、うずくまっている。逮捕。

三瀬、大垣、秋葉、榊原、武部、最後に入っていくが、入口付近で立ち止まってる。

秋葉、盗難車を眺めている。

秋葉「やっぱりな、盗難される車といえばランクルにプリウス、レクサス、ハイエースもけっこうある」

武部「外国で人気があるんだな」

秋葉「売れる車しか盗まない」

三瀬「今の車って強固なセキュリティで簡単には盗めないはずなのに」

秋葉「おそらくこれだけ大掛かりな組織だとあらゆるセキュリティを解除してしまう」

秋葉、視線を上げる。

○（回想）道路上

怪しい男、スクリュードライバーとハンマーを持ち、ハンドルに固定されているステアリングブロックを破壊している。

秋葉「ステアリングブロックでも簡単に外されてしまう」

怪しい男、玄関横にいて機器を使っている。別の男、車のドアを開け乗りこむ。

秋葉「これはリレーアタックという手法。

スマートキーの電波が盗まれている」

怪しい男、バンパーに特殊な機器を接続している。車のドアを開け、エンジン始動。

秋葉「これはCANインベーター。内部通信ネットワークにアクセスされて簡単にセキュリティ解除できる」

怪しい男、停車してる車に強引に乗りこみ運転手を引きずり出して、そのまま運転していく。

秋葉「荒っぽい手口もある」

（回想終わり）

○同・敷地内

大垣「秋葉はさすがに車のこととなったら詳しいだべ」

三瀬「こんなところで立ち話していいのかな。こっぴどく怒られそう。機動隊や捜査員たち窃盗団を次々に捉えてるっていうのに」

捜査員、窃盗団員を連行し、三瀬たちの横を通り抜けていく。  
三瀬たち、それを眺めている。  
工場内にいた窃盗団員8、9、逃げるのを諦めて素直に出てくる。  
窃盗団員6、7、裏口から出ようとし

ている。

武部、裏口を見ている。

武部（スピーカーマイク）「2人、裏口から出ようとしています」

○同・裏口

窃盗団員6、裏口から外へ出て、竹藪の中に入っていく。

窃盗団員7、右に進み、ぬかるんだ道を逃げていく。

曾我、急発進して、土の段差をジャンプ、竹藪の中に突っ込んでいき、窃盗団員6を追い越し、急ターンで進路を塞ぐ。

茂原も後を追っている。

窃盗団員6、動けない。

曾我、茂原に話す。

曾我「手錠をかけてくれ、俺はもう一人を追う」

植田、真鍋、窃盗団員7を追うが、ぬ

かるみでタイヤが空回り、追いきれない。

窃盗団員7、ぬかるみを超えて山の中に入ろうとしている。

菜々子、バスから降りて走ってくる。後ろから久慈も見ている。

曾我、追いかけている。ぬかるみに突っ込んでいき、段差も軽々とジャンプ。

またたく間に山へ向かい、坂を豪快に上っていく。窃盗団員7に追いつき、飛びかかって押さえ込んでいる。

植田、白バイを捨て、走ってくる。手錠をかけている。

菜々子、曾我に向かって拍手して、こぶしを高く上げている。

久慈、両手を高く上げ、大きく振っている。

菜々子「かっこいい！」

久慈「やるなあ！」

曾我、植田、真鍋、茂原、窃盗団員6、

7' 裏口に戻ってくる。

真鍋「曾我さん、さすがです」

茂原「真鍋と共に、この2人を中の捜査員に引き渡す。すぐに帰ってくるけど、もし誰か出てきたら頼むぞ」

植田「曾我さんがいるから大丈夫です」

茂原、真鍋、窃盗団6'、7'を連行し、中の捜査員に引き渡している。

○同・事務所

最後まで抵抗している窃盗団員5'、機動隊員に囲まれている。

機動隊員1「日本刀を捨てろ！ それ以上抵抗すると撃つ！」

窃盗団員5'、日本刀を振り回している。

機動隊員たち、マスクを装着した後、催涙ガスランチャーで催涙弾を撃つ。

窃盗団員5'、涙が止まらず、嘔吐して倒れこむ、逮捕。

○同・敷地内

捜査員たち、敷地の端から端まで、窃盗団が隠れていないか一列に並んでしらみつぶしに探してしている。  
レッカー車が数台やってくる。

○同・正面入り口・付近

捜査員たち、次から次に引き上げていく。

武部、秋葉、三瀬、外に出て、話している。

レッカー車が次々に盗難車を運んでいく。

三瀬「機動隊員が持つてる防護楯はいつから透明になったんや？」

武部「昔は金属やった」

秋葉「銃弾も跳ね返せるのかのう？」

武部「ライフル弾は貫通するらしいけど9mm弾は防げる」

三瀬「完璧ではないんや」

○同・裏口

曾我、バスにバイクを積み込んでいる。

白バイ隊員に会釈している。

坂本、バスを発車させる。

○同・正面入り口

坂本、正面にバスを止め、降りて、県

警捜査員に挨拶している。

武部、三瀬、秋葉、榊原、大垣、バス  
に乗りこむ。

152

○高速道路・バス・内

全員、座っている。

菜々子「曾我さんはすごかったです。プロの  
ライダーの技を見せてもらいました」

坂本「曾我だけでもがんばってくれて、あり  
がたい」

三瀬「すみません、俺たちはなんの役にもた  
たなかった」

久慈「でもあれだけの数の捜査員が突入する

と、迫力ありますね。だから少しは役にた  
ってるのですよ」

大垣「実感わかないっぺ」

○麻布・コンビニ（夜）

久慈、弁当とお茶を買っている。

店員1、弁当を温めている。

店員1「いつもありがとうございます。タワ  
マン刑事」

久慈「おう」

店員1「ランボーキッカーを捕まえてくださ

いよ」

久慈「コンビニ強盗だな、たしか、あれは神

奈川県警の管轄だ」

店員1「昨日、店長会議があって、ランボー  
キッカーがもしやってきたら抵抗せずに金  
を渡せと言われた。オーナーとしては3万  
円くらいなら、店員が怪我するよりいい  
てこと。まああんな恐ろしそうなナイフ突  
きつけられたら逆らえないですけど。でも

これってランボーキツカーにしてみればやり放題ってことですよね。オーナーの気持ちもわかるけど」

久慈「警察はいったい何をしてるんだ、って言いたいんだろ」

店員1「はい」

○神田・オープンカフェ（夜）

開放的な雰囲気。テラス席がある。

菜々子、三瀬、大垣、曾我、テラス席で飲んでいる。

菜々子「落ち着いたヨーロッパ調のいいお店ですね。誘ってくれてありがたいぜよ」

大垣「仕事仲間の女性を飲み誘うのはセクハラだとか言われるから気を遣うべ」

菜々子「友達と会っても仕事の話はできないし、奥歯に物が挟まったような会話になつてしまう、時々でも誘うとーせ」

曾我「兼光さんが来るだば大歓迎」

菜々子、何か言いたそうだが、迷って

いる。

菜々子「あのう・・カミングアウトしちゃおうかな」

三瀬、身を乗り出す。

三瀬「なんかいな？」

菜々子、意を決して、

菜々子「私ね、女性しか愛せないのです。男性に愛情や性的魅力を感じないのです」

曾我、なんともいえない表情。

曾我「いー」

大垣「レズビアンだべか？ そんな風には見

えないけど」

菜々子「なんでカミングアウトしたかという  
と、このチームは独身男性ばかりでしょ、  
誰ぞがうちのことを気に入ったりする可能  
性はゼロではないですよ。その時になっ  
てから、レズビアンですってお断りするが  
は嫌やったき」

曾我「彼女はいるの？」

菜々子「今はおらんよ」

三瀬「このことはここだけの秘密？ それともチームのみんなに話してもええんか？」

菜々子「是非、話しとーせ」

曾我「残念！ 兼光さんのごどえーなど思ってたんだが」

菜々子「お世辞でもうれしいです」

大垣「将来、子供は欲しくねえべか？」

菜々子「欲しいです。それは大きな問題。みなさんトップアスリートですから、どなたかの精子は欲しい」

三瀬、曾我、大垣、互いの顔を見あっている。

三瀬「返事ができねー」

曾我「榊原がさ、たしか精子バンクさ登録するどか言ってた」

菜々子「三瀬さん、曾我さん、大垣さん、秋葉さん、榊原さんの精子を毎年、もらって、5人産むの。いろんなアスリートの子供が次から次へと生まれてきて将来楽しみ」

大垣「頭がくらくらする」

○久慈宅・瞳の部屋（早朝）

久慈、そつとやってくる。

瞳、寝ている。

久慈、ベッドに腰かけて瞳を見ている。

瞳、うっすら目を開けてから、にこっ

と笑う。

瞳「おはよう」

久慈「おはよう、呼び方決めた。孝志と瞳でいくか！」

瞳「じゃあ決まりね、さあ、瞳って呼んでみ

て！ 孝志！」

久慈、体をよじって、顔をしかめて言う。

久慈「くう、おいつ瞳！ ってか」

瞳「もっと普通に」

久慈「瞳！」

瞳「言えたじゃん」

久慈「それはそうとバスルームからなかなか出てこないのはなぜ？」

瞳「あーそのことね、一度入ったら出たくな  
い」

○（回想）同・浴室

大理石で出来ている、浴槽が広い。ポ  
ッドキャストを聞きながら気泡マッサ  
ージにジャグジーの中で、瞳、泳いで  
いる。水流パターンが変化していく。  
水を入れると色が変わる。浴槽から出  
てシャワーマッサージしながらうっと  
りしている。

158

（回想終わり）

○同・瞳の部屋

瞳「もう何時間でも遊んでられるの」

久慈「真っ裸で」

瞳「今、想像しただろ！」

久慈「想像してない。おっぱい見たから」

瞳「こらっ、孝志！」

○警視庁神田庁舎別館・トレーニングルーム

(朝)

三瀬、大垣、久慈、ワークアウトしている。

優子が榊原とやってきた。

優子「おはようございます」

三瀬「おはようございます。あれ、清水さん、どうやって入ったの？」

優子「榊原さんがいいタイミングで来てくれたの」

榊原「知らない人じゃないんで、断れなかった」

優子「三瀬さん、別館ってなんなの？ やたら広い敷地でいったいなにをしようとしているの？」

三瀬、大垣、久慈、榊原、黙っている。  
坂本、武部、やってきた。

優子「おはようございます。班長！ 調べましたよ。三瀬さんはラグビーでしょ、榊原さんは箱根駅伝で、大垣さんは100m、

秋葉さんがレーザーで、曾我さんはモトク  
ロスライダー、兼光さんが射撃、トップア  
スリートばかりじゃないですか。あとの3  
人はよくわからなかったのだけれど」

大垣「さすが、有能な記者さん、ビンゴ！」

優子「もっと詳しく教えてくださいよ」

坂本「清水さんは古賀警視監とは面識あるだ  
ろう？」

優子「はい」

坂本「警視監に聞いてくれ」

優子「やはりそうですか」

坂本、離れたところにいる久慈に向か  
って歩いていく。小声で話している。

坂本「神奈川県警からランボーキッカーを逮  
捕してくれという要請がきた。犯行時の映  
像を見たのだが、フルフェイスヘルメット  
で顔が全く分からない。歩様もだめなんだ。  
走って、カウンターをジャンプして金を掴  
んで、またジャンプ、走って、キックボ  
ードで猛スピードで逃げて、歩いていること

がない。どうやって見つけるのかわからないが、まずは探してみてくれるか？」

久慈「やってみます」

坂本、携帯が鳴り、話しながら、武部のところにやってくる。

坂本「私事で申し訳けないが祖母が亡くなっ  
た」

武部「ご愁傷様です。病気だったのですか？  
すぐに帰ってください」

坂本「老衰だったようや」

武部「大往生ですね」

坂本「今日を入れて3日休むことになる」

大垣、三瀬、駆け寄ってくる。

大垣「俺たちも葬儀に参列したいのですが・・・」

坂本「うーん、気持ちはありがたいが、祖母  
だからそこまでしてくれなくても」

三瀬「奥さんに会ってみたいし、こんな機会  
でもない」と

坂本「そうか、葬儀のことはわかり次第連絡  
する」

○同・オペレータールーム（朝）

久慈、入ってくる。中から鍵をかける。

スイッチを入れる。

久慈「おはよう、アーモンドアイ」

アーモンドアイ「おはよう、孝志」

久慈、ランボーキッカーの映像データを  
を入力する。

久慈「ランボーキッカーをまずはライブで見  
つけてくれ！」

アーモンドアイ「わかりました」

久慈、ランボーキッカーの犯行時の映  
像を見ている。

久慈「顔がわからない。耳も隠れていて、目  
もわからない。歩様もやはり無理か、これ  
じゃあ、どうしようもないかも」

モニターには何も表示されない。

久慈「じゃあ、この1週間の映像では見つけ  
られないか？」

モニターには何も表示されない。

久慈「参ったな、どうしたらいい？」  
アーモンドアイ「考えろ！」

○久慈宅・リビング（夜）

久慈、帰ってくる。

弥生、瞳、瞳の母親、お茶を飲んでい  
る。

瞳、母親に視線を送っている。

瞳「お母さん！ 彼が久慈さん」

母親、立ち上がり、深々とお辞儀する。

母親「娘がお世話になります」

久慈「初めまして、お会いできて嬉しいです」

母親「びっくりしたんですよ。こんな高級マ  
ンションに引っ越すなんて、それも無理や  
り押しかけたみたいで」

久慈「元気なお嬢さんなんのでいっぺんに明る  
くなりました」

母親「大学に入っても彼氏も作らず、勉強し  
か興味がないと思っていたんですよ。いつ  
のまにか化粧もするようになって、雰囲気

が変わってきました」

久慈、瞳を見て、

久慈「彼氏はいなかったの？」

瞳「うん」

久慈「へー信じられない」

弥生「お母さんは高校の英語の先生なのよ。

ごはんは食べたの？」

久慈「カップラーメンでも後で食べる」

弥生「お母さんが伊勢海老とサザエを持って

きてくれたの」

久慈、キッチンに行き、冷蔵庫を開けて  
ている。

久慈「うわー、うまそう！　ありがとうございます

います」

母親「朝、取れたばかりだから、お刺身で召

し上がってください」

久慈「サザエは焼いてもいいですか？　醤油

の香ばしいにおいが、たまらなく好きなん  
で」

母親「喜んでもらえて、持ってきた甲斐があ

ります」

瞳「ご飯もあるよ、用意してあげる」

久慈「やさしいな」

瞳「今日だけだよ」

瞳、立ち上がりながら、

瞳「お母さんも今晚、ここに泊まってるいい？」

久慈「いいに決まってるだろう」

瞳「わー、一緒にお風呂に入ろう、すごいんだよー」

久慈、弥生、笑っている。

○久慈宅・瞳の部屋（朝）

久慈、入っていく。

瞳、母親に目配せしている。

瞳「ねー、ノックもしないで入ってきたでしょ。いい根性してるのよ。お母さんがいたってまったく気にしないんだから」

母親、笑っている。

久慈「仕事に出かけるから、お母さんに挨拶しようと思って」

母親「こんな生活って、私には想像もできなかったけど、楽しそうだから安心したわ。望月さんとも仲良くなれたし、また遊びに来ます」

久慈「いつでもどうぞ、いすみならそれほど遠くないですよ」

母親「2時間もかからないかな」

瞳「お母さん！ 仕事もあるし、お父さんがほったらかされて可哀そうでしょ」

母親「いいの、冬になったらタコがおいしいので持ってきます」

久慈、にっこり笑っている。

### ○川越・葬儀会館

警視庁関係の花輪も並んでいる。

参列者が多い。

三瀬、大垣、久慈、菜々子、秋葉、曾我、武部、榊原と古賀警視監、焼香している。

坂本と親族が見ている。

焼香が終わると坂本が駆け寄ってくる。

坂本「警視監！ 祖母の葬儀なのにご足労かけてすみません」

古賀「わしも、一度お邪魔したかったからな」

坂本「みんなもわざわざ来てくれてありがとう。寿司を用意してるから食べていってください」

古賀、右手首を左右に振って、

古賀「親戚でもないから遠慮させてもらおう」

坂本「そう言わずに、親族とは別の部屋を用意しています」

古賀、みんなにどうするか聞いている。

古賀「それじゃ、お言葉に甘えるか」

三瀬、背伸びをしている。

三瀬「あちゃー、清水さんが来てる。訃報の連絡があったときに確かいたよな」

みんな、立ち止まって優子を見ている。

優子、軽く会釈して焼香に向かう。

焼香が済むと、やってきて、坂本に挨拶している。

優子「この度はご愁傷様です」

坂本「清水さん、忙しいのにわざわざ来てくれてありがとうございます。こちらへ来てください」

○同・別室

全員、寿司をつまんでいる。ビールを飲んでいいる。

大垣「参列者が多いですね。この頃は家族葬とか小さなお葬式ばかりなのに」

坂本「本人の遺言で盛大に見送ってほしいと言われてたんだ。近所のお年寄りがこぞって来てくれてる。誰とでもおしゃべりしてた人気者だったからな」

優子、古賀、話している。

古賀「時期が来たら話すから、今はそっとしておいてくれないか」

優子「坂本班の方たちは口が堅い。何を聞いても古賀さんに聞いてと？」

古賀「悪いようにはしない」

優子「約束ですよ」

有香、有香の妹莉緒、やってきた。ビールをついでいる。

有香「主人がお世話になっていきます。今日はありがとうございました」

坂本「妻の有香で、隣はその妹の莉緒」

全員、会釈している。

古賀「こちらこそお世話になっていきます」

三瀬「班長の奥さんと妹さんに会えてよかったです、お二人とも綺麗なかたですね」

武部「大家族だし、お子さんもいて奥さんも忙しいでしょう」

有香「ぼーっとしているよりいいですよ、1日があっというまに過ぎてしまいます」

武部「班長は家に帰らないことがけっこうあります。仮眠室でそのまま朝までいたりしています。仕事熱心なので許してあげてください」

有香「皆さんにご迷惑じゃなければいいのですが」

久慈「私たちが迷惑をかけてばかりですよ」

有香「ビールが足らなければすぐにお持ちします。ゆっくりしていただくさい」

有香、莉緒、立ち去る。

三瀬「清水さんて仕事熱心ですね」

優子「皆さんに嫌われていますよ」

古賀「確かに鬱陶しくて、しつこい記者だけど信頼もされているからなあ。こちらが記者さんが必要とする時があるんだよ。そういう時に清水さんの顔が浮かんでしまう」

優子「お褒めいただいたような？ なるべく嫌われないように心がけます」

久慈、坂本と古賀警視監のそばに行く。

久慈「ランボーキッカーですが、顔がわかる映像はありませんか、いただいたデータでやってみましたが、アーモンドアイでも無理でした」

坂本「警視監！ 神奈川県警に聞いてもらえますか？」

古賀「電話してみる」

古賀、立ち上がり、隅に行き、スマホ

で話している。

古賀「そうか、やはりないのか、わかった」

古賀、スマホを切る。戻ってくる。

古賀「ないそうだ。なんとかならないか？」

久慈、考えている。

久慈「捜査資料を見せてもらえないでしょう

か」

古賀「送らせる」

第5話

○久慈宅・リビング

弥生 お菓子を取り分けている。

瞳 お茶を入れて、ソファに腰かける。

ルンバが掃除している。

瞳 「おいしそう」

弥生 「新保さんはおいしいおいしいって言う  
てくれるから、ついつい食べ過ぎてしまう」

瞳 お菓子を頬張っている。

瞳 「幸せ」

弥生 「孝志と仲がよさそうじゃない？」

瞳 「毎朝、驚かせてくれるんで」

弥生 「ねーねー聞いて！ 今度、私、ドラマ  
に出演することになったの」

瞳 「えー！すごいじゃないですか！」

弥生 「でもね、映るのは手だけなの。時代劇  
なんだけど、おばあさんが文をしたためる  
シーンがあって、私が書くの」

瞳 「顔が映らないのは少し残念」

弥生 「そのドラマの題字も私が書くことにな

ったの」

瞳「望月さんの字って特徴がありますもんね」  
弥生「私の生徒さんがSNSをやってくれたおかげなんです、たまたまプロデューサーさんの目に留まったみたいで」

瞳「撮影はいつですか？ 放映日が決まりました教えてください！ 必ず見ます」

弥生「まだ未定。いいエステサロン知らない？ 手だけ少しでもきれいにしなくちゃ」

瞳「調べます」

○同・瞳の部屋（早朝）

久慈、入っていく。

瞳、起きている、

久慈、不思議そうな表情。

久慈「それってパジャマでもネグリジエでもないよな」

瞳、立ち上がって、ポーズをとっている。

瞳「クロップトップっていうの、セクシー？」

久慈「おー、少しだけセクシー、ウエストが見えてるし、以前は普通のパジャマだったのに」

瞳「リラックスできるのよ。それより聞いた？

望月さんテレビに出るんだよ」

久慈「聞いたよ。カルチャーセンターで教えてるだけかと思ってたら、いろんなことに挑戦し始めた。生徒さんも増えてるみたいだし、頂き物も多くなってるよな。ガードマンとかにバンバンお裾分けしてるようで、俺が通るたびにありがとうって言われる」

瞳「私にも食べる食べるって。お金持ちの生徒さんが多いみたいよ。有名なお菓子がいつもあるから、すごくありがたい」

久慈「太るなよ、瞳はスタイルいいんだから」

瞳「ほー孝志が褒めてくれるんだ。食べ過ぎないように気をつけよっと」

○警視庁神田庁舎別館・オペレータールーム

久慈、捜査資料をタブレットで読んで

いる。読み終えたのちに、急に立ち上がる。

久慈「もしかしたら？」

久慈、タブレットを抱えて、部屋から出ていき、さっと鍵をかけ、走っていく。

○同・トレーニングルーム

久慈、キヨロキヨロ探している。

三瀬、ベンチプレスをしている。

大垣、休んでいる。

久慈「秋葉さんと曾我さんを見ませんでしたか？」

三瀬「さっきまでいたんやけど」

大垣「多分、ミーティングルームで何か飲んでると思う」

久慈、走っていく。

○同・ミーティングルーム

久慈、タブレットを抱えて駆け込んで

くる。

秋葉、曾我、コーヒーを飲んでいいる。

久慈「秋葉さん、曾我さん、教えてください」

秋葉「どしたん？」

久慈、タブレットを操作して捜査資料  
を見せる。その中にある1枚の写真を  
指さす。

曾我、秋葉、覗き込む。

久慈「たまたまスマホで撮られた写真が添付  
してあって、この電動キックボードは  
改造していると書かれています」

曾我「おおっ！　これってランボーキッカー  
の捜査資料だすな」

久慈「写真からどこをどう改造したのか？

わかります？」

曾我、秋葉、写真に見入っている。

曾我「モーターだな。普通はボードの下にあ  
るのだが、でかいモーターに替えたため、  
ボードの上に取り付けてある。折りたたみ  
る構造なんだが、これだと無理だな、乗り

にくそう」

秋葉、タイヤを見て、

秋葉「ラージホイール化してるからタイヤが  
でかい。安定感はばっちり」

曾我「バッテリーは見えないけどおそらくア  
ップグレードしているはず」

秋葉「変速機もいじっていると思うが、写真  
だけではわからない」

曾我「これだと時速100kmはいける、速  
いはずだよ」

久慈「改造する人は多いですか？」

曾我「好きなやつはいるからなあ。でもここ  
までやる奴はまずいない。理由は簡単、危  
険すぎるし、キックボードでそんなスピー  
ドを出す意味がない」

秋葉「タイヤがでかいから安定感が増してい  
るけどな、俺なら絶対に乗らない」

久慈「ありがとうございます」

久慈、走っていく。

○同・オペレータールーム

久慈、慌ただしくセキュリティを解除、中から鍵をかける。電動キックボードの写真データを入力する。

久慈「アーモンドアイ！ おそらく世界に一つしかない、電動キックボードを探せるか？」

アーモンドアイ「やってみます」

久慈「頼む」

モニターに反応がない。

久慈、首を左右に振っている。

久慈「ダメか？ 1週間遡っても無理か？」

モニターに反応が出た。98%の表示。

久慈、目を見開いている。

久慈「おうおうおう！ アーモンドアイ！

頼りになるなああ、2日前か？ 場所は藤

沢？」

モニターに次々映像が出ている。

久慈「おおう、3日前は茅ヶ崎、4日前も茅ヶ崎、5日前は伊勢原か、あー捜査資料に

よると5日前の伊勢原でコンビニを襲って  
いたな」

モニターにランボーキッカーの顔が映  
っている。

久慈、飛び上がって、走り回っている。

久慈「さすが！　アーモンドアイ！　6日前  
の茅ヶ崎でヘルメットを被っていない。顔  
がわかった。30歳くらいだろうな」

アーモンドアイ「孝志！　興奮しすぎ、血管  
切れるぞ！」

久慈、部屋から出ようとしたとき、モ  
ニターにライブで電動キックボードが  
出た！　98%の表示。

久慈「茅ヶ崎の海岸近くか！　もしかしたら  
茅ヶ崎に住んでいるのかもしれない、これ  
だけデータが集まると、行動パターンがわ  
かりそうだ」

○六本木・エステサロン

シンプルだが、リラックスできるよう

自然光が取り入れられ、心地よい空間。  
受付カウンターのスタッフが出迎えて  
いる。

弥生、キョロキョロしている。

瞳、さっさと入っていく。

瞳「予約した望月です」

スタッフ「お待ちしていました。ハンドマツ  
サージ、パラフィンパック、爪の形を整えを  
ご希望ですね。お呼びいたしますのであち  
らでお待ちください」

瞳、弥生、待合スペースで話している。

180

弥生「緊張する！ 生まれて初めてなの。こ  
の年になってまさかエステに来るなんて想  
像もしなかった。手が荒れているでしょう。  
リング農家だったからどうしようもないの  
よ」

瞳「私もやってみたいけど」

弥生、瞳の手をとって、見ている

弥生「必要ない。綺麗な手じゃない？」

スタッフ、やってくる。

スタッフ「望月さん、どうぞ」

瞳、立ち上がる。

瞳「じゃあ、私は大学に行ってきます。帰ったらチェックするからね。洗い物、洗濯もだめだし、アルコールで手を消毒するのもだめだからね！」

弥生「おー怖！ つきあってくれてありがとう  
う」

○警視庁神田庁舎別館・ミーティングルーム  
全員、立っている。

181

坂本、入ってくる。

坂本「昨日は葬儀に参列してくれてありがとう  
う」

坂本、一呼吸溜めて、

坂本「今日はランボーキッカーを捕まえる！」

大歓声！

三瀬「どうやって見つけたん？」

武部「久慈のお手柄！ 電動キックボードの  
モーターやバッテリー部分を改良したため、

世界に一つの特異な形状になっている。おかげでアーモンドアイの網に引っかかり、とうとう顔も判明した。ランボーキッカーは茅ヶ崎に住んでいる。閑静な住宅街のカメラに何度も映っている。今日は現行犯というわけにはいかないので、逮捕ではなく任意同行を求めることになるが、拒否された場合、電動キックボードを改造して速度超過したということとで別件逮捕する。そして神奈川県警に引き渡す」

三瀬「久慈！ やりよったなあ。アーモンドアイは物を見つけないこともできるんや」

久慈、どや顔。

曾我「キックボードの時速はどれくらい出てるかわがる？」

久慈「逃走するときは80kmは軽く出てます。もっと出るかもしれません」

秋葉「そりゃ速いのお」

久慈「住宅街を走行している時は30kmくらいですな」

大垣「道路にロープを張るってのはどうだっ  
ぺ？ キックボードでジャンプはできる？  
スケボーじゃあるまいし」

曾我「20kmくらいのスピードならジャン  
プできる。80kmで走行しながらジャン  
プすることはありえない。ジャンプ台があ  
ればできるが一般道にそんなものはない」  
坂本「道路は1車線が約3mほどだから2車  
線だとしてもロープは10mあればいける  
か、武部、10mロープを5本用意してく  
れ。ランボウナイフを所持しているから注  
意を怠るな！ 兼光は拳銃所持、曾我はバ  
イク、武部はドローンを、全員、防刃チヨ  
ツキ着用、体につけるドラレコ、スピーカ  
ーマイク、車は2台とバス、計3台でいく」

○茅ヶ崎・住宅街・バス

坂本、武部、住宅街をタブレットの  
MAPを見ながら、歩いてチェックして  
いる。

他はバス内に集まっている。

坂本、武部、戻ってくる。

武部、写真を机に置いている。

武部「あと30分ほどでランボーキッカーはここを東から西へキックボードに乗って通過するだろう。キックボードの写真はこれ、顔写真はこれだ」

曾我、三瀬、秋葉、榊原、大垣、菜々子、  
写真を見ている。

坂本「住宅街なので人通りが少ないから、車  
内で待機する。ここから東へ100mの地

点に武部と秋葉、ランボーキッカーかどうか確認。三瀬と菜々子はここで待機。任意同行を求める。榊原は西へ200m先の交差点を右に曲がったところ。大垣と俺は左へ曲がったところ。曾我はそのまま直進して100m先にバイクで」

三瀬「榊原は一人で大丈夫か？」

榊原「曲がってきたらスピードが落ちるので  
なんとかなる」

坂本「もう一人いればよかったのだが、ただ右へ曲がると300m先が行き止まりだ。土地勘があるのなら行かないと思ってな。秋葉、武部、大垣、俺、榊原はロープを準備して、ランボーキッカーが来たら直前に張る」

曾我「もし80kmで走ってきて転倒させると下手すりゃ死にます。やりすぎじゃないですか？」

坂本、スマホをスマホスタンドに立て、スピーカーカーにして久慈と話す。

坂本「おい、久慈、ランボーキッカーはヘルメットをかぶってるか？」

久慈（スマホ）「着用している時、していない時があります」

坂本「そうか、かぶってなければロープはやめよう。かぶっていればロープを引っ張る。これでどうだ」

曾我「それならいいと思います。でもかぶっていない場合、そのまま逃走されてしまう

かもしれません」

坂本「ドローンとバイクと車で追う。よし、そろそろ所定の位置へ」

秋葉、武部、東へ車を移動。

曾我 バイクで西へ。

三瀬、菜々子、車に乗りこむ。

坂本、大垣、榊原を乗せたバスは西へ。

ドローンはすでに上空にいる。

○警視庁神田庁舎別館・オペレータールーム

久慈、ドローンの映像を見ている。

スマホをスマホスタンドに立てている。

モニターには茅ヶ崎の防犯カメラの映像。  
像。

久慈「来るかな？ 来ない？ 来てほしいな、

来てくれないかな」

アーモンドアイ「独り言が多い！ 気が散

る！ 孝志！」

久慈「気が散る？ わけがわからないことを

言うようになったな。あー待ってる時間

が辛い、冗談でも言ってくれ！」

アーモンドアイ「久慈ってうじうじ、ぐちぐち、くじくじ、言うなあ？ なんちゃって？」

久慈「ダジャレのつもりなのか、くだらない、もう喋らなくていい」

アーモンドアイ「モニター見ろ！」

武部のいる位置から200m東の防犯カメラにキックボードの姿。

久慈、スマホに話す。

久慈「武部さん！ 200m東からキックボード！ ドローンで自動追尾してください」<sup>187</sup>

スマホ（武部）「よし」

久慈「班長、ランボーキッカーかもしれない  
ん」

スマホ（坂本）「ヘルメットは？」

久慈「つけています」

久慈「ドローンの映像が届きました」

○茅ヶ崎・住宅街・道路

坂本、スマホを耳に当てている。

坂本「ケン、ガキ、キバ、ロープの用意！」  
大垣、ロープの片方を街灯に結んでい  
る。

榊原、ロープの片方をフェンスに結ん  
でいる。

スマホ（久慈）「アーモンドアイが98%の表  
示、ランボーキックカーに間違いありません、  
もうすぐ武部さんの横を通ります」

スピーカーマイク（秋葉）「顔はわかりませ  
んが、電動キックボードは写真と同じです」  
坂本「三瀬、ナナ、頼んだぞ」

秋葉、通り過ぎるのを待ってから、ロ  
ープの片方を電柱に結んでいる。  
三瀬、菜々子、ゆっくり車から降りて  
いる。

電動キックボードを蹴りながら、ラン  
ボーキックカーがやってくる。

三瀬、キックボードの前に立ち塞がる。  
菜々子、三瀬の後ろにいる。

三瀬「止まってください」

ランボーキッカー、地面を強く蹴り、スピードを上げて横をすり抜けていく。

三瀬「警察だ、止まれ！」

菜々子、拳銃を抜きながら、

菜々子「止まりなさい！　待て！　止まらな  
いと撃つ！」

ランボーキッカー、さらにスピードを  
上げる。

三瀬、菜々子、車に戻るか、追うか迷  
っている。

坂本「こちらに来るぞ。曾我、バイクを発進

189

させて、左折させるように仕向ける、ケン、  
ガキ、構えろ！　三瀬、ナナ、車で追え、  
キバ、タケも車で追え！」

ランボーキッカー、猛スピードで走っ  
ている。

前から曾我、後ろから車が2台。

ランボーキッカー、交差点で左折！

大垣、ランボーキッカーが来るのを見  
て、一気にロープを引く。

ランボーキッカー、ロープが張られた瞬間、重心を下げ、ハンドルを引き上げ、足を地面から離し、軽々とロープの上を越えていく。空中で足を戻し、膝を曲げて見事な着地、そのまま猛スピードで逃走。

坂本、大垣、啞然としている。

曾我、バイクで追うがロープが張られていて急停車。

大垣、慌ててロープを手から離す。

曾我、再スタート。

榊原、ロープを引きずりながら走ってくる。

スマホ（久慈）「ドローンは追尾しています。

大垣さん、ぼーっとしてないで」

大垣「まいった」

坂本「くそったれ！ 曲がった時にスピードがぐっと落ちたから、飛べた。ロープをもう少し高くしておけば」

2台の車、やってくる。

曾我、追いかけている。

三瀬「兼光さんが後ろから拳銃抜いたのがわかった。ここでは撃つなよと祈ったわ」

菜々子「威嚇だけですよ、安全装置は外してません」

坂本、ロープを片付け終わるのを待っている。

坂本「追うぞ！」

3台の車、追いかけている。

坂本「秋葉！キックボードのバッテリーはどれくらい持つ？」

秋葉「改造してるんで、100%充電してれば10時間は持つでしょう」

ランボーキッカー、右折、左折を繰り返し、スピードを緩めることなく走っている。

曾我、一定の間隔を空けて余裕で追尾している。

3台の車、一列になって続いている。ドローン上空を静かに飛んでいる。

坂本「曾我！ 捕まえられそうか？」

曾我「止める方法が？ 体当たりすれば大怪

我、前に回り込んで急停車するのも危険」

大垣「ロープがあるじゃないか、カウボーイ  
のように投げ縄にして捕まえるってのは？」

三瀬「おーそれはいい、って言うてはみたくも  
のの、誰か投げられる人はいる？」

誰からも返事がない

菜々子「誰か、やってみれば？」

大垣「練習しとけばよかったな」

スマホ（久慈）「3台の車が一列に追うなんて

策がなさすぎます」

坂本「そうだよな、曾我はこのまま追う。秋

葉は曾我の後ろ、俺たちは一つ左の道へ、

三瀬は右の道を走行し、先回りしてみよう」

曾我、追っている。

秋葉、曾我に続いている。

坂本のバス、左折して右折。

三瀬、右折して左折していく。

三瀬、スピードを上げる。

坂本のバス、スピードを上げる。

ランボーキツカー、左折する。坂本のバスが突然、現れて、慌てて左折してバスの横をすり抜けていく。

坂本のバス、歩行者を避けて、ゆっくりコーナーしている。

坂本、いらついている。

坂本「歩行者には注意しろ！ 三瀬、無理するなよ」

三瀬、少しスピードを落としている。ランボーキツカー、余裕で走行している。

曾我、追っている。

秋葉、ぴったり曾我の後ろにいる。

秋葉「キックボードは小回りが利くから捕まえるのが難儀だわ」

スマホ（久慈）「いつかは捕まる、もう諦めたらしいのにな、あれっ？」

ランボーキツカー、スピードがガクツと遅くなる。

曾我「パンクか故障か！ ランボーキッカーが止まりました。キックボードを調べてます。このまま捕まえていいですか？」

坂本「待て！ ランボーナイフがあるかもしれない。キバ、曾我、慎重に二人で捕まえる！」

ランボーキッカー、キックボードを捨て、走り出す。民家の壁を越えて、中へ、

曾我、バイクから降りる。車から降りてきた秋葉と共に民家の壁を越えていく。

ランボーキッカー、庭を横切り、さらに隣の壁を登っている。

曾我、追いついている。ランボーキッカーの右足を掴んでいる。

秋葉、左足にくらいつき、引きずりおろして、馬乗りになり、手を押さええている。

曾我、手錠をかける。

曾我「連続コンビニ強盗の疑いで任意同行を  
求める。いいか？」

ランボーキッカー、毒づいている。

ランボーキッカー「任意同行？ 逮捕してる  
じゃないか！」

曾我「電動キックボードの違法改造、スピー  
ド違反、及び住居不法侵入の現行犯で逮捕  
する」

秋葉、所持品を調べている。スマホ、  
免許証がある。

秋葉「ランボーナイフは持っていない、ほう、  
赤城って名前か、自宅にランボーナイフが  
あるだろうな」

ランボーキッカー「不当逮捕だろ。コンビニ  
強盗なんてしてない。住居不法侵入だって  
追いかけてくるから怖くなって逃げたんだ。  
キックボードの改造くらいで逮捕されるの  
はおかしい」

曾我「ははは、おかしいのか、神奈川県警に  
連行する」

曾我、秋葉、腕を抱えて連行していく。

住民、覗いている。

曾我、警察手帳を住民に見せている。

曾我「すみません、お騒がせして、警視庁です。強盗犯を逮捕できました。すぐに退去します」

住民、門を開けている。

家の前には2台の車とバスが止まっている。

三瀬、大垣、曾我のバイクを押している。

菜々子、電動キックボードをバスに積み込んでいる。

曾我、秋葉、ランボーキッカーを車に乗せている。

坂本、神奈川県警に連絡している。

大垣、三瀬、両肘をたたんで拳を体の前で合わせている。

大垣「無敵だっぺ」

三瀬「無敵やんけ」

武部、スマホに話す。

武部「久慈！ お前が見つけてくれてみんなががんばった！ うまくいった」

スマホ（久慈）「やったー」

坂本「曾我と秋葉に兼光の3人で神奈川県警まで連行してくれるか、今、電話したら県警本部長が出てきてえらく興奮してたぞ、感謝されるだろうな」

### ○神奈川県警・前

人がたくさん集まっている。

秋葉の車が入ってくる。

曾我のバイクが続く。

秋葉「なにかあったのかな？」

菜々子「わたしたちを見えますよ」

玄関に車が到着。

秋葉、菜々子、ランボーキッカーを降ろしている。

県警本部長が出迎えている。

課長や捜査員が多数、拍手している。

曾我、バイクを止める。

秋葉「俺たちを歓迎してる？」

曾我、車から電動キックボード及び所持品を降ろしている。

県警本部長の荒木が握手を求めてくる。

県警本部長「本部長の荒木だ。よく捕まえてくれた、神奈川県警あげて感謝する」

曾我、秋葉、菜々子、握手しているが、戸惑っている。

課長、部下に向かって命令している。

課長「おい、ランボーキッカーを留置場へ連  
行しろ」

部下たち、ランボーキッカーを連れていく。

曾我、電動キックボードと所持品を課長に渡す。

曾我「証拠品の電動キックボードと所持品です。ランボーナイフは所持していませんでした」

課長「確かに預かった」

県警本部長「古賀さんに頼んでよかったよ、まかせてくれと大見え切ってただけのことはある。私の部屋に来て話を聞かせてくれるか」

○同・県警本部長の部屋

曾我、秋葉、菜々子、緊張している。県警の捜査員10人以上が立っている。

本部長「座ってくれ」

曾我、秋葉、菜々子、ソファに座る。事務員、コーヒートケーキを運んでくる。

本部長「改めてお礼はさせてもらう」

曾我「そんな、お礼なんて必要ないですよ」

本部長のスマホが鳴る。スマホを耳に当てて聞いている。立ち上がり、ガッツポーズ。

本部長「自宅からランボーナイフが見つかったぞ！」

捜査員、大歓声。

曾我、秋葉、菜々子、一緒に喜んでい  
る。

本部長「我々がどれだけランボーキッカーを  
捕まえたかったかわかってないだろ。神奈  
川県でやりたい放題しやがって、マスコミ  
には神奈川県警は何をしていると散々叩か  
れ、警視庁、埼玉県警からも嫌味を言われ、  
針の筵やった。本当にありがとう。古賀さ  
んにも坂本さんにも感謝の言葉を伝えてほ  
しい」

秋葉「もちろん伝えます」

課長「逮捕したときの状況を詳しく教えてく  
れるか」

秋葉「明日、逮捕に至るまでの映像及び音声  
をまとめてお渡しします。口で説明するよ  
りわかりやすいと思います、不明な点があ  
ればいつでもお答えいたします」

課長「それはありがたい。もうひとつ、坂本  
さんがおっしゃってたんだが。逮捕は神奈  
川県警がしたということにしてほしいと、

本当にそれでいいのか？　なぜ手柄を自慢しない？」

曾我「いつもそうなんです、県警さんの捜査や努力があつてこそですから」

曾我、秋葉、菜々子、ケーキを食べて、  
コーヒ―を飲んでいる。

本部長「そうか」

曾我「ごちそうさまでした。ケーキおいしかったです。そろそろ帰りたいたいのですがよろしいでしょうか」

本部長「ご苦労様」

捜査員全員、敬礼して、ご苦労様でしたと声をそろえている。

本部長、部下にむかつて、

本部長「お見送りしろ」

曾我「そこまでしていたただかなくてけっこうです。気持ちは十分伝わりました」

本部長「わかった、またお願いすることがあるかもしれない。その時はよろしく」

菜々子「ケーキをご馳走してくれるならがん

「ばります」

本部長「婦警さん、やっと話してくれたな。  
二度目はもっとおいしいケーキをご馳走する」

菜々子「約束ですよ」

○久慈宅・リビング（夕方）

ソファに座って、瞳、弥生の手を調べている。お菓子が置いてある。

瞳「きれいになったねー、しっとりしてる」

弥生「週に2回、通うことに決めた、ハンド

クリームもジェルも買ったしね」

瞳「爪もきれい。でも光っているのはいいの？」

弥生「ちよっとやりすぎたかな。さすがにネイルはしなかったけど」

○丸の内・広島焼の店（夜）

秋葉、三瀬、曾我、武部、菜々子、大垣、榊原、飲んでる。

テーブルの上にはもんじゃ焼き、牛す

じ広島焼、岩ガキ、ビール。

武部「乾杯！」

秋葉、三瀬、曾我、菜々子、大垣、榊原「乾杯！」

三瀬「今日は仕事をした」

武部「神奈川県警からえろう感謝されたんや  
ってな」

曾我「緊張して疲れるす」

菜々子「えへ、ケーキをご馳走してくれまし  
た」

秋葉「お礼を改めてするって本部長がいいよ  
った」

菜々子「楽しみー」

武部「三瀬よう、関西人が広島焼を食べつと  
か？」

三瀬「オタフクソースやし、関西でいうモダ  
ン焼きやからいけまっせ、キャベツが少し  
多いけど」

秋葉「キャベツが多いのが広島焼、今は夏な  
んで広島のカキがないのが残念、でもこの

岩ガキはうまい」

大垣「仕事してうめえもの食べれたら幸せだ  
っぺ」

菜々子、大ジョッキでビールをぐいっ  
と飲んでいる。

菜々子「くー、ビールがうまいぜよ」

○麻布・コンビニ・中（夜）

久慈、弁当を買っている。

店員1「タワマン刑事！ ランボーキッカー  
を捕まえてくれてありがとうどざいます」

204

久慈、何とも言えない表情。

久慈「ニュースでやってたの？」

店員1「神奈川県警が記者会見してましたよ」

久慈「あーそうなんだ」

店員1「俺としては久慈さんが捕まえてくれ  
たって思ってます、一昨日に捕まえてと頼  
んだ途端でしたもの、これでビビらなくて  
すみませす」

久慈「警察もやるだろ！」

○久慈宅・瞳の部屋（早朝）

久慈、そーっと入っていく。

瞳、起きてる。

久慈「瞳、おはよう」

瞳「おはよう、孝志、テレビ見た？」

久慈「いや、昨日は遅かったから見てない」

瞳「神奈川県警がランボーキツカーを捕まえ  
たんだよ」

久慈、宙を見て、少し、まじめな表情  
で。

久慈「ちよっとだけ自慢してもいいか？ 瞳

にだけは言いたい、ランボーキツカーを捕  
まえたのは坂本班なんだ。俺が防犯カメラ  
を解析して見つけた」

瞳、疑いの眼差し。

瞳「本当？」

久慈、ミスった表情。

久慈「言わないほうがよかったかな」

瞳「だって、今までほとんど仕事の話をしな  
かったのに、急に言い出すから、戸惑っち

やった」

○警視庁・警視監の部屋

古賀、坂本、捜査一課長、ソファに座っている。

古賀「坂本！ 北田のことは知っているよな」

坂本「令和の鬼畜・北田と呼ばれてますよね」

古賀「あーそいつだ」

ㄋ「令和の鬼畜・北田は若い女性6人を軽井沢

の別荘に1年間にわたり拉致し、胃、肝臓、小腸、乳房、子宮にメスを入れては縫合を繰り返した。また、ハンマーで骨折させてから手術をする。カテーテルや内視鏡を挿入しているなど、到底人間のすることとは思えない行為が行われた。

北田の父親は北田総合病院の院長で、息子が医者試験に何度も不合格となり、精神状態が不安定になったため、別荘に一人で住まわせて、資金を潤沢に与えた。

北田は手術道具や麻酔マシン、手術用テ

ブル、電気メスなども揃え、薬もネットで購入していた。

女性の一人が逃げ出し、警察に助けを求めたため、事件が発覚。監禁場所が突き止められ、捜査一課及び地元警察60人が一斉突入したが、北田は逃走した

幸い残りの女性たちは保護されたが、全身に手術痕があり、感染症にかかった女性もいた。精神的な影響が最も大きく、全員がPTSDを発症した。

この事件は殺人よりもひどいとして、マスコミが連日報道し、逮捕できなかった警察に対しては非難が集中。北田の顔は連日テレビやネットで報じられたが、9か月経過した今も逮捕されていない。捜査本部は解散し、北田は既に死亡したのではないかという憶測も流れている」

捜査一課長「令和の鬼畜・北田は逃げることにかけては用意周到、まんまとやられた」

古賀「課長の悔しさはわかるだろう。千載一遇のチャンス逃したのだから、飲みかけのコーヒーがまだ暖かかったらしい。悔やんでも悔やみきれないわな」

捜査一課長「すべて私の責任です」

古賀「それでだな、捜査一課が正式に北田を逮捕してくれと依頼してきた。やってくれるか？」

坂本「もちろんです」

捜査一課長「ランボーキッカーを捕まえたのも、君たちなんだな」

坂本「ええ、まあ。ところでなぜ北田はあれほどマスコミが大騒ぎしたのに逃げおおせている理由はなんですか？」

捜査一課長「噂なんだが、整形したのではないかと言われている、死亡説もあるがこれは信じたくない」

坂本「捜査資料はすべて見せてください」

捜査一課長「よろしく頼む」

第6話

○久慈宅・瞳の部屋（早朝）

久慈、入ってくるが元気がない。

瞳、起きている。

瞳「おはよう」

久慈「普通のおばさんだった望月さんがドラマに出る。瞳は何か国語も話せるし、友人は桁違いの金持ちだし、うちのチームには箱根駅伝に出たとか、オールブラックスとかオリンピックに出場したすごいやつばかり、それに比べて俺はなんの取り柄もない」

瞳「孝志！ バカじゃない！ 慰めてほしいの？ 愚痴を言ったところで何か解決するの？」

久慈「キツイな、やさしくしてくれ」

瞳「甘ったれてるんじゃない、久慈じゃなくて愚痴って名前に変えたら！」

久慈「お前まで・・・じゃなくて、瞳までダジヤレかよ」

○警視庁神田庁舎別館・ミーティングルーム

坂本、資料を渡している。

久慈、驚いている。

久慈「えっ！ あの令和の鬼畜・北田ですか？」

坂本「ランボーキッカーを逮捕したというのが、警察内部で噂になっている。捜査一課がプライドを捨てて、我々に協力を求めてきた。これが北田の捜査資料だ」

○同・オペレータールーム

久慈、意気込んでいる。

久慈「おはよう、アーモンドアイ」

アーモンドアイ「おはよう、孝志」

久慈「必ず見つけてくれ」

久慈、データを入力している。

モニターに北田の顔がアップになっている。  
いる。

久慈「まずはライブで！ 頼むぞ！」

モニターになんの反応もない。

久慈「1週間、遡って調べてくれ」

モニターにちらほら反応はあるが、北田である確率10%未満

久慈「関東にはいないのか？ 死んだ？ 整形してる？」

○同・ミーティングルーム

久慈、坂本のそばに行く。

久慈「やってみましたが、見つかりません」

坂本「そうか！」

久慈「これから毎日、チェックします」

坂本「捜査一課と連絡を密にする。何かわかれば伝えるから」

211

○本郷・喫茶店

瞳、友人とパンケーキを食べながら、アイステイラーを飲んでいる。

友人「高級タワマンで同棲してるんだって？」

瞳「同棲じゃなくて同居」

友人「彼氏が出来たってもっぱらの噂だよ」

瞳「彼氏じゃない。けどおっぱい見られた」

友人「えー嘘、どうしたらそんなことになるのよ。酔っ払ってたとか？」

瞳「毎朝、私の部屋に来るの。あの時は引越して疲れて、あられもない恰好を見られちゃった」

友人「ははは、油断してたんだ。ところで、瞳はまだバージンのまま？」

瞳「そうだよ。でも、もうそろそろ卒業してもいいかなと思う」

友人「人によって違うし、慌てることはないよ」

瞳「彼氏もいないから、どうにもならないんだけど」

友人「その同居相手はダメなの？」

瞳「毎朝来るけど、多分、ふざけてるだけだよ」

友人「その人は仕事は何？」

瞳「警察に勤めてるの」

友人「瞳に似合わないよ」

○警視庁神田庁舎別館・トレーニングルーム

久慈、大垣、菜々子、ワークアウトしながら話している。

大垣「新保さんとはつきあってないのか」

久慈「なにもないですよ」

大垣「もったいないべ、俺はな、このごろマツチングアプリにはまってるのだけど、意外性がないというか、ランナーの知り合いはたくさんいるのに、紹介してくるのがランナーばかりでいやになるっちゃ」

菜々子「趣味が同じ人を選びますからね」

大垣「メタバースアプリもやってみたけど、仮想空間ってのは俺にはあわない、まったく違うタイプの女性とつきあうのはどうしたらいい？」

菜々子「私も友達はアスリートばかり」

久慈「新保の友達で誰かいないか聞いてみま  
す」

大垣「期待しないで待ってるべ」

○同・ミーティングルーム（夕方）

全員集まっている。

坂本、入ってくる。

配達員が大きな荷物を二つ、台車に載せてやってくる。クール便と書かれています。

三瀬、受け取って、サインしている。

三瀬「うほ！ 神奈川県警荒木さんからだわ」

みんな集まってくる。

菜々子「何かな」

武部、開けている。

曾我「シューマイですか？」

久慈「50個以上ある？」

菜々子「横浜のシューマイ大好き」

武部、女性事務員に箱ごとシューマイを渡している。

坂本「みんな分けるが、持って帰るのは明日になってしまう。冷蔵庫に入るのかな」

女性事務員、運んでいく。

坂本「よし、仕事だ、ランボーキッカーを捕

まあたからか、依頼が急に増えた。報告がある！　今まで体につけるドラレコと云っていたのが名前がようやくわかった、その名はボデイカメ」

三瀬「なんかダサイけど、体につけるドラレコよりはましか」

武部「深夜0時に府中市に行く。ターゲットはドリフト野郎。車種は日産シルビア。金曜日深夜に出没する。パトロールしているパトカーの前でドリフトやらスピンターンで挑発してくる。サイレンを鳴らして追いかけるのだが、テクニックがすごくていつも逃げ切られてしまっている。ナンバーも所有者もわかっていのだが従業員が20人以上いる社有車で、誰が運転していたのか、その特定ができないらしい。マスク、帽子、サングラスで顔を覆っていてズシステムやパトカーのドラレコも役に立っていない。要するに警察を馬鹿にしている。こいつをなんとか現行犯で捕まえてくれと

いう依頼だ。秋葉！ お前の出番だ」

秋葉「カーチェイスか！ ふざけた奴ですね。車をぶつけてもいいのですか？ 止めるには一番簡単な方法です」

坂本「車は壊してもいいが、大きな事故はダメだ」

秋葉「それは十分注意します。スパイクストリップで逃走車両のタイヤを破損させたいのですが、その設置は可能ですか？ それから応援のパトカーで道路を封鎖できますか？」

216

坂本「少し待ってくれ、府中署と相談する」  
坂本、府中署に電話している。

秋葉「ドリフト専用タイヤがないと思います、すぐに手配できますか？」

武部「すぐに持ってこさせる」

秋葉「トヨタのGT86ならドリフトが簡単なのですが、スポーツカーなので衝撃には弱い。それでスカイラインで追いかけていたのですが」

武部「OKだ」

坂本、スマホをポケットに入れる。

坂本「スパイクストリップは重さは4kg程度、長さは3mのものを、うちが4本用意する。道路封鎖はパトカー6台でやる」

秋葉「あと、同乗者ですが、酔う人は邪魔なだけなんで、もし酔ったらその場で降りてもらいます。さらにギャーギャー騒ぐ人も」

三瀬「兼光は騒ぐからあかんで」

菜々子「ふん！」

武部「同乗できる者はいるか？」

みんな、ためらっている。

三瀬「酔うかどうかわからないんで」

曾我「俺は大丈夫ですが」

武部「曾我はバイクで秋葉の後についてほしい、他にはいないか？」

久慈、手を上げている。

久慈「俺はどうですか、乗り物酔いしたことありません」

武部「うーん、久慈でもいいか。深夜なので

防犯カメラはほとんど役に立たないからな、坂本さん、久慈が同乗してもいいですか」

坂本「いいぞ、酔ったら放り出されるぞ」

久慈、満面の笑み。

武部「班長のバスに大垣、兼光、曾我、俺の車に三瀬と榊原、秋葉の車に久慈、今回は凶悪犯ではないので、拳銃や防弾チョッキは必要ないが、秋葉と久慈はヘルメット着用。バイク、スピーカーマイクにボディカメラ。以上、途中で腹ごしらえして行くぞ！」

久慈、見回している。

久慈「誰か！ 手錠、手錠を貸してください、初めて逮捕できるかもしれないんで」

○府中市分倍河原・そば屋（夜）

全員、せいろ、ぶっかけ、かき揚げそば、鴨焼きなど食べている。

坂本「そばでは力が出ないかな」

三瀬「ここのそば！ うまいっす」

大垣「もう一杯、頼んでもいいだべか？」

坂本「いいぞ」

大垣、大声でオーダーしている。

大垣「きざみぶっかけ」

菜々子、振り返っている。

菜々子「私もとろろせいろ、もらえますか」

曾我「兼光さんはよく飲むし、よく食う」

菜々子「えへ！ 遠慮ということを知らない  
もんで」

○府中警察署・前（深夜）

秋葉のスカイライン、曾我のバイク、  
1台のパトカー、入り口付近で待機し  
ている。

坂本のバスと2台のパトカー、入口を  
出て左へ、

武部の車と3台のパトカー、入口を出  
て右へ移動していく。

久慈、サイレンを手に持ち、手錠を確  
認して、入り口を見つめている。

秋葉「入れ込むなよ。追跡が始まったら必要

なこと以外は喋らないでくれ。ただし歩行者の姿を見かけたら教えてくれ。深夜なので黒っぽい服は気がつかないことがあるから、車は見えてるんで教えなくていい」

久慈「了解、ドリフトやスピントーンを公道で行なうとどういう罪になる？」

秋葉「ははは！ 捕まえたときに逮捕理由を述べたいんだ。わかりやすいのは道路交通法違反、具体的には危険運転罪、速度違反といったところか」

久慈「速度違反は何キロオーバーって言わないと、スピードメーターを見る余裕はない」

秋葉「そうだな、ただこの車にはデータロガーが装備されていて確認することができる」

久慈「データロガーって？」

秋葉「走行記録計」  
横にいるパトカーがライトを点滅させている。

秋葉「来たぞ、日産シルビアだ。シートベルト！ サイレンはまだ、パトカーを先に行

かせる」

○府中市内・道路（深夜）

秋葉、パトカーに先に行けと合図している。  
パトカー出ていく。  
その後ろをシルビアがついていき、さらに秋葉のスカイライン。  
曾我のバイクはその後ろに続く。  
500mほど走って、シルビア、速度を上げ、パトカーを追い抜いていく。  
パトカー、サイレンを鳴らす。  
スカイライン、久慈がサイレンを車体の屋根に設置。  
パトカー、速度を緩める。  
スカイライン、パトカーの前に出てシルビアを追う。  
シルビア、大通りを走行していたが、右折して2車線の道路へ、スカイライン、サイレンを鳴らしなが

ら、ピタリとマーク。

曾我のバイクがついていく。

パトカー、追跡をやめて直進していく。

秋葉「ドリフト野郎、速いな、やる気がでて

きた」

久慈、必死に周りを見ている。

シルビア、さらにスピードをあげる。

スカイライン、ついている。

秋葉「もうすぐドリフトするぞ、つかまれ」

○同・別の道路上（深夜）

パトカー3台と武部の車、停止している。

大垣、三瀬、スパイクストリップを道

路脇に置いている。

もう一台、パトカーがやってくる。

○同・さらに別の道路上（深夜）

パトカー2台とバス、停止している。

坂本、榊原、菜々子、スパイクストリ

ップを道路脇に置いている。

榊原「スパイクストリップは事前に設置すると一般車が通れなくなります。直前に投げるのですか？」

坂本「できるか？」

榊原、スパイクストリップを投げては回収、また投げては回収している。

### ○同・道路上

シルビア、さらにスピードをあげてドリフトを決め、左折していく。

スカイラインもドリフト、強烈な横からの $\ominus$ が久慈を襲う。久慈耐えている。

曾我もバイクを45度倒してカーブを曲がって、ついてくる。

シルビア、さらにドリフトしながら右折、さらにドリフトしながら左折。

スカイライン、ドリフトしながら、右折、左折してピタットとついている。

曾我、ついている。

歩行者、驚いた表情でカーチェイスを

見ている。

久慈「右前方に歩行者！」

秋葉「了解」

シルビア、スピードを落として、大通りに出ていく。

秋葉「次はスピンターンをしてくるだろうな」

久慈、感心している。

久慈「ギアを入れる手つきが決まってる」

シルビア、スピードを上げてスピンターン。

スカイラインもスピンターン。

シルビア、もう一度スピンターン。

スカイラインもスピンターン。

シルビア、バックして秋葉の車に近づいてくる。

久慈、こぶしを握り締めている。

久慈「あわわわわ」

スカイラインもバック。

シルビア、バックしながらスピンターン。

スカイライン、バックからスピンターン。

シルビア、スピードを落としている。曾我、バイクを止めて見守っている。

秋葉「戸惑ってるな、おそらく今まではあれで逃げきれてたんだろう」

久慈「余裕あるな」

秋葉「あれくらい楽勝だよ」

シルビア、スピードを上げている。

スカイライン、ついている。

曾我、ついている。

秋葉「そろそろ終わりにしていいかな、飽きてきた。一気にスピードを上げ、前に回り込んで力づくで止める、衝撃は半端ないし、怪我するかもしれない、それでもいいか」  
久慈「やろう」

秋葉、久慈、ヘルメットを被る。

秋葉、気合の入った表情、スピードをあげる。

シルビア、右折。少し先にバスと2台

のパトカーが道路を封鎖している。  
道路脇にいた榊原、スパイクストリップを素早く投げる。  
シルビア、慌ててハンドルを切ったが間に合わない。スパイクストリップに乗り上げる。タイヤがはずたずたに破損して、空き地に突っ込んで停止。  
スカイライン、手前で急停車している。  
榊原、菜々子、シルビアに向かう。  
久慈も降りて走ってくるが、遅れている。

226

榊原、ドアを叩いている。

榊原「ドアを開けろ」

シルビアのドアがゆっくり開く。ドリフト野郎、じっとしている。

榊原「危険運転罪で逮捕する」

菜々子、手錠をかけ、ドリフト野郎のマスクに帽子、サングラスを取っている。

久慈、地団駄踏んでいる。

久慈「くそー間に合わなかったか」

榊原「すまない。また今度な」

久慈、犯人に向かって悪態をついてい  
る。

久慈「お前のテクニクはたいしたことない、  
またやったら何度でも捕まえてやる、警察  
を馬鹿にしてふざけていた代償はきっちり  
払ってもらうからな」

菜々子、笑っている。

菜々子「無理矢理、怒っちゅー、気がすんだ？」

久慈「ちよっとだけ」

榊原「降りろ！」

榊原、久慈、ドリフト野郎を府中署員  
に引き渡している。

府中署員「ありがとうございます」

府中署員、レッカー車を手配している。  
武部の車、パトカー3台、やってきて  
いる。

久慈、坂本に向かって、

久慈「いいところで待ち構えていましたね」

坂本「府中署員がここを通るかもと教えてくれたおかげだ」

久慈「秋葉がぶつけて止めようかと話してたところだったんです」

坂本「そうか。秋葉のテクニクすごかった  
だろ」

久慈「同乗してよくわかりました、班長、俺は酔わなかったんでまた機会があればお願いします」

坂本「まあいつの日かだな」

坂本、府中署員と話している。

大垣、三瀬、両肘をたたんで拳を体の前で合わせている。

大垣「無敵だっぺ」

三瀬「無敵やんけ」

武部「調子に乗ってないでスパイクストリップを片付けて、曾我のバイクを積み込むのを手伝ってやれ」

三瀬、大垣「おう！」

三瀬、大垣、スパイクストリップを片

付けてから、曾我のバイクをバスに積み込んでいる。

坂本、久慈と話している。

菜々子、久慈の隣にいる。

坂本「久慈、今晚泊めてくれるか？ トラン

プタワ―麻布を見たくなった」

久慈「いいですよ。部屋は空いてます、ただ

女性が二人同居していますが」

坂本「ほう、お前やるな」

菜々子、目を輝かせている。

菜々子「私も行きたい。あの贅沢なお風呂に

入ってみたい。ついて行っていい？」

久慈「はいはい」

○久慈宅・リビング（夜明け前）

久慈、坂本、菜々子、小声で話している。

久慈、冷蔵庫にシューマイを入れている。

久慈「この時間なんで二人とも寝ています。

バスルームは三つあるんですけどすぐに入れます。部屋は左奥が班長で、その手前に兼光さんでいいですか？ シーツとかタオルは自由に使ってください。部屋には鍵がありません」

菜々子「泊めてもらって本当にありがとうございます」

坂本「噂にたがわぬすごい部屋だな。豪勢な風呂とやらを堪能するか！」

○同・キッチン（朝）

弥生と瞳、シューマイなど朝食を食べている。  
テーブルの上に久慈からのメモ、メモには（上司と同僚が泊まっています。起こさないで、冷蔵庫にシューマイがあります。食べて！ 久慈）と書かれています。

瞳「上司と同僚って誰かなあ、起きてくれたらいいのに」

弥生「朝の4時ころに声が聞こえてた。多分徹夜で働いていたんだと思う。なかなか起きてこないんじゃない？」

瞳「8時間寝たとしたら12時に起きるのね。

午前中に法廷通訳の仕事で霞が関の東京地方裁判所に行って、そのあと大学に行く予定なんだけど、大学はキャンセルして帰ってこようかな」

弥生「何か話したいことがあるの？」

瞳「花火の時はお客さんがいっぱいいてあまり話せなかったから。望月さんの今日の予定は？」

弥生「私は午後カルチャーセンターで教える予定、12時ころには出なくちゃならない」

瞳「微妙な時間ね」

弥生「私が出かける前に彼らが起きてきたら、待ってもらおうように頼んであげるけど」

瞳「ありがとう」

瞳、メモを書いている。

メモには（12時頃に昼食を買ってきます。シューマイおいしかったです。新保）と書かれている。

○同・リビング

瞳、風呂敷に包まれた弁当を重そうに持ちながら帰ってきて、会釈をしながら、弁当をキッチンに置いて、リビングにやってくる。

久慈、坂本、菜々子、コーヒを飲んでいる。

232

瞳「いてくれたんだ」

久慈「わざわざ帰ってくることはないのに、紹介します、新保瞳さん、東京外大の大学院生です。こちらは上司の坂本さんに同僚の兼光さん」

瞳「坂本さんは初めましてですね、新保です。来ていただいて嬉しいです。兼光さんは花火の時間にお会いしましたね」

坂本「坂本です。よろしく」

菜々子「噂してたんですよ」

瞳、キッチンに行き、お茶を入れてい  
る。弁当を風呂敷から取り出してている。

瞳「どうせ孝志は悪口しか言っていないんでし  
よ。昼食買ってきました。食べてください  
ね」

瞳、弁当とお茶を運んでくる。

久慈「待ってました。腹減ってたんだ」

坂本「これはこれは！ 松花堂弁当でしょう」

菜々子「懐石料理じゃない、こんなのご馳走  
になっ  
ていいの？」

233

瞳「なんの取り柄もないのに高い給料もらっ  
ている孝志が払ってくれますから」

久慈、啞然。

久慈「おいおい！」

瞳「お世話になってるんでしょ、これぐら  
いしないとね」

久慈、瞳を指さして、指を上下に振っ  
ている。

久慈「自分が食べたかったんだろ、やられた」

菜々子、にやっとしていいる。

菜々子「なんかいいコンビね」

久慈、坂本、菜々子、瞳、弁当を食べていいる。

瞳「坂本さんに聞きたいことがあります。孝志はどうして今の仕事に抜擢されたのですか？」

菜々子「私も聞きたい」

久慈「班長！ 答えなくていいですよ」

瞳「この前も孝志が愚痴るのですよ。まわりはすごい人ばかりなのに、俺にはなんの取り柄もないって」

久慈「しゃべりすぎ！」

坂本、箸を置いて、

坂本「久慈を選んだのは俺じゃなくてもっと上の警視監なんだ、ちらっと理由を聞いた記憶はあるのだが」

瞳、久慈、菜々子、身を乗り出している。

坂本「あれっ！ なんだったかな、なんかは

つきりしない答えだった」

久慈、ずっとこけている。

坂本「でもな、久慈はがんばっている。取り柄はなくてもランボーキッカーを逮捕できたのは、彼のお手柄」

久慈、どや顔。

瞳、思い切り、久慈の背中を叩く。

瞳「あー本当だったんだ」

坂本、食べている。瞳、菜々子を見て、

瞳「兼光さんて何が得意なんですか」

菜々子「射撃です」

瞳「あーっ、あなたがオリンピック選手なんだ」

菜々子「過去は過去。まだチームの役にたっていないんですよ。一度も発砲していないし」

瞳「スポーツ万能？」

菜々子「まあ、身体能力はあります」

久慈「スポーツバカを自認してる」

瞳、久慈を睨む。

瞳「ひどいこと言う」

菜々子、笑いながら、

菜々子「まさにそうぜよ、頭はからっきし！

新保さんの頭脳が羨ましい」

瞳「私はひどい運動音痴なんで、真逆ですよ  
ね、今日だけと言わずまた遊びにきてくれ  
ませんか、仕事の話は抜きにしているいろ  
とお喋りしたい」

菜々子「必ず来ます、お風呂にまた入りたい  
し、プールで泳ぎたい」

瞳「そういえばまだプールで泳いだことがな  
いじゃない、是非是非」

坂本、手で腿を叩いている。

坂本「思い出した！」

久慈、箸を止めている。

菜々子、瞳、じっと見ている。

坂本「久慈が選ばれた理由、思い出したわ。  
信用できるからって言ってたな。ギャンプ  
ルしない、借金もない、酒もほどほど、そ  
れとさつきわかったんだが乗り物酔いしな  
い」

久慈、またずっこけている。

瞳「なんですか、それは、孝志は悪いことばかりしますよ。朝っぱらから私の部屋に忍び込んでオツパイ見たりするのに」

菜々子「ぎゃー変態ぜよ」

久慈、頭を抱えている。

久慈「ちよちよ」

坂本「新保さん、訴えたら？俺が逮捕してやる」

久慈「班長まで！」

坂本「まあ警視監が言ってるし、期待通りに働いてくれている。信用できるというのは大事なことだろ」

瞳、久慈を見て、

瞳「わかりますけど。少し納得できないところも。でも信用されているなら裏切るなよ！」

久慈、右手を振っている。

久慈「うるさい！うるさい！」

瞳「もう愚痴はなしね」

○同・瞳の部屋（早朝）

久慈「そーっと入っていく。

瞳「起きています。」

瞳「孝志は懲りないねー。あれだけ責められたのに堂々とやってくる」

久慈「瞳が待っていてくれるからね」

瞳「体をよじっている。」

瞳「うーん」

久慈「だってさ、嫌なら怒るだろう」

瞳「さらに体をよじっている。」

瞳「うーん」

久慈「瞳にしては珍しく言い返さないんだ」

瞳「体を元に戻して、

瞳「どういうわけか少し待ってる」

久慈「おっ素直だな。ところで兼光さんはレズビアンだってさ、俺は直接には聞いてないけど、飲んだるときにカミングアウトしたらしい」

瞳「そうなの？　少し意外、曾我さんが気に

入ってたように見えただけ、がっかり  
しただろうなあ」

久慈「あまり彼女とは話す機会がないから、  
遊びに来たら聞いてみて」

瞳「女同士だから聞いてみるよ、言っとくけ  
ど私はレズじゃないよ」

久慈「わかってるよ。瞳は男好き」

瞳、ゴジラのような顔。

○同・リビング

珠理がソファに座っている。

久慈、お茶を入れている。

珠理「すいません、突然お邪魔して、先ほど  
エントランスで見かけて、今日は休みかも  
しれないと思って」

久慈「佐野さん、ストーカーはまだ友達につ  
きまとっていますか？」

珠理「やはりエスカレーターしているようで、  
携帯にメールが執拗に送られてくる。無言  
電話も毎日かかってくる。道端に立って望

遠レンズで撮影してるらしいです」

久慈「やばくなってきましたね、近くの警察署へ相談に行くべきです。今日は私は休みなので一緒に行きましようか？」

珠理「連絡してみます」

珠理、電話している。

珠理「来るそうです」

久慈「ボディーガードはついていないのですか？」

珠理「雇ったのですが、気が合わなかったよ  
うで今はついていません」

久慈「彼女の名前は？」

珠理「名倉沙羅羅（サララ）です」

○トランプタワー麻布・前

ボルボXC40が止まっている。

長身でモデルのような名倉沙羅羅（2  
6）、車の横に立っている。

珠理、手を振りながら駆け寄っていく。

後ろに久慈。

珠理「名倉さん、久しぶり、この人がタワマン刑事の愛称で呼ばれている久慈さん」

沙羅羅「名倉沙羅羅です。お休みの日にすみません、先輩はいいなあ。刑事さんがそばにいてくれて」

久慈「おっと、ボルボのSUVですか、名倉さんにぴったりですね。さて、メール、着信履歴、ストーリーカーの写真、ありますか？」

沙羅羅「はい、スマホの中にすべてあります」

久慈「佐野さんから相談されていたのに、今まで何もできなくてごめんなさい」

沙羅羅「今日、同行してもらえただけで本当にありがたいです」

#### ○田園調布・交番

久慈、巡査と話している。

巡査「警視庁の方に来られるとプレッシャーですね」

久慈「以前から相談されていたのですが、できる限りのことをしていただけたらと思います」

ます。詳しいことは彼女から聞いてくださ  
い」

沙羅羅、珠理、巡査にスマホを見せて  
相談している。

久慈、眺めている。

○同・ボルボの車内

沙羅羅、久慈、珠理、話している。

沙羅羅「今日はありがとうございました。明

朝、巡査がストーリーカーに文書で警告してか  
ら、後日、公安委員会に接近禁止命令の申

242

請をします。パトロールもしてくれませう。

これでストーリーカーが諦めてくれたらいいの  
ですが」

久慈「気を抜いたらダメですよ、十分注意し  
てください。何かありましたらいつでも連  
絡してください」

沙羅羅「ありがとうございます」

珠理「お手数かけました」

○麻布・ケーキ屋

久慈、弥生、ケーキを買っている。

○麻布・コスメショップ

久慈、弥生 SUQQU のスムースクリアクレンジングオイルを買っている。

○久慈宅・キッチン（夜）

久慈、弥生、テーブルでお茶を飲んでいる。ケーキとプレゼントが置いてある。

243

瞳、帰ってくる。

弥生、久慈「お誕生日おめでとう」

瞳、びっくりしている。

瞳「えっえっ？ どうして私の誕生日を知ってるの？」

弥生「新保さんがここに住みたいって言ったときに、学生証を見せてくれたじゃない」

瞳「あーあーなるほど、覚えてくれてたんだ。

めっちゃ嬉しい」

瞳、弥生にハグして、久慈にハグして  
いる。

弥生、プレゼントを渡している。

弥生「はい、私たちからのプレゼント！」

瞳「何々？ 開けていい？」

瞳、開けている。

瞳「わー、これ、欲しかった」

久慈「ますますきれいになるな」

瞳、久慈の肩を軽く叩いている。

瞳「ほほほ！」

弥生「ピザの宅配頼むわよ。プルコギのピザ  
が食べたいからつきあってくれる？」

瞳「もちろんです」

弥生「ケーキは後でね」

第7話

○久慈宅・久慈の部屋（早朝）

瞳「そーっと入っていく。」

久慈「寝ている。」

瞳「ベッドに腰かけて久慈を見ている。」

突然、大声で、

瞳「おはよう！！」

久慈「ベッドから落ちそうになっている。」

瞳「やったー」

久慈「態勢を立て直している。」

久慈「やられた」

瞳「昨日のお礼を言おうと思ってね」

久慈「伸びをしている。」

久慈「ケーキまだ残ってた？」

瞳「あるよ」

○警視庁神田庁舎別館・トレーニングルーム

（朝）

全員、ワークアウトしている。

坂本、入ってくる。

武部、手を叩いている。

武部「集合！」

全員、集まってくる。

坂本「今日は川崎市堀之内に行く」

三瀬「うひょー、ソープランド」

坂本「三瀬が喜ぶと思った。埼玉県警から依

頼があった。ターゲットは殺人犯で3年前

から逃亡中の鈴木、もう65歳、勤めてい

た埼玉の工場で些細なことから、かっとな

って、後輩をナイフで刺して殺害。アーマ

ンドアイが堀之内近辺でホームレスをして

いるのを見つけた、空き缶を集めて、生活

している。行動範囲も狭くていくつもの防

犯カメラに毎日捉えられている。ただ住ん

でいる場所はわからない。簡単に逮捕でき

そうだが、ナイフを所持しているかもしれ

ないので防刃チョッキ着用、ボデイカメ、

スピーカーマイク、ドローンはいつも通り、

曾我、バイクは必要ない。兼光は拳銃所持、

バスで行く」

大垣「おじいちゃんだもんな、もう走れない  
だろうから楽勝」

三瀬「俺一人で十分じゃん、全員で行く必要  
はなさそうだけど」

坂本「そうかもしれないが殺人犯だからな、  
気を抜かずにいこう」

○同・オペレータールーム（朝）

久慈、セキュリティを解除。中に入り、  
中から鍵をかけ、スイッチを入れる。

247

久慈「おはよう、アーモンドアイ」

アーモンドアイ「おはよう、孝志」

久慈「まずは令和の鬼畜・北田を探してくれ」

アーモンドアイ「はい」

モニターには何も映らない。

久慈「1週間、遡って調べてくれ」

モニターには10%の表示がちらほら、

久慈「今日もダメか」

久慈、気を取り直して、

久慈「鈴木を探してくれ」

アーモンドアイ「了解」

モニターに次々に鈴木映像が映っている。98%の表示

久慈「堀之内界限をうろろしてるんだ」

久慈、スマホをスマホスタンドに立て、話している。

久慈「班長、鈴木をカメラが捉えています。

白髪交じりのひげが特徴です。閑散とした

ソープ街を自転車を押しながらゆっくり歩いていきます」

スマホ（坂本）「もう見つけたのか、到着するのにまだ30分ぐらいかかりそう」

久慈、スマホを首からかけて、ソファに座って、目を閉じている。

○堀之内ソープ街・バス・中

秋葉、運転している。

全員、座っている。

三瀬「俺は蒲田に住んでるから川崎は近いん

だけど来たことがなかった。おうおうおう  
ソーランドが華やかだけど、午前中だか  
らかな、誰も歩いてない。何軒あるんだろ  
う」

榊原「70軒くらいあるはずですよ」

大垣「詳しいべな、よく来るのか？」

榊原「学生の時に近くに住んどったで。裏通  
りに行くとちよんの間なんてのも残っとる  
はずですよ」

菜々子「ちよんの間ってなんやか？」

榊原「20分くらいでセックスする昔の青  
線ですよ」

菜々子「へー、そがなのまだあるんじゃのお」

榊原「川崎競馬場もすぐそこにあるし、ホー  
ムレスは多いし、最初は怖かったです」

秋葉「着きました」

坂本、スマホに話している。

坂本「久慈、着いたぞ」

スマホ（久慈）「5分前には捉えたのですが、  
新しい映像が来るまでしばらく待ってくだ

さい」

坂本「武部、ドローンを飛ばしてくれ」

武部、ドローンとパソコンを持って降りていく。

○警視庁神田庁舎別館・オペレータールーム

久慈、モニターを見ている。

ドローンの映像が届く。

久慈「いました。京急川崎駅前にあるアパホテルの前を北東に向かって自転車を押しながら、歩いていきます、ゆっくりなんですぐに見つかるはずですよ。武部さん、ドローンで捕捉できますか？」

スマホ（武部）「了解」

○川崎・堀之内・近辺・バス内

武部、FVP Googleを見つけ、パソコンを操作している。  
全員、坂本のそばにいる。

坂本「秋葉、アパホテル前に」

秋葉、バスを発進させる。

武部、スマホに話している。

武部「久慈、捕捉した」

スマホ（久慈）「映像はばっちりです」

坂本「三瀬、ナナ、ガキ、さっさと捕まえてくれ」

○川崎・アパホテル前

バス、アパホテル前に停車。

鈴木、50m前方にいて道端で休んでいる。

秋葉「50m先にいました」

三瀬、菜々子、大垣、バスから降りていく。

三瀬、鈴木の真ん前に、菜々子、三瀬の後ろにいて、銃に手をかけている。

その後ろに大垣。

三瀬「警察だ。鈴木だな、殺人の容疑で逮捕する」

鈴木、顔を上げた途端、立ち上がり、恐ろしい形相で素早くポケットからナイフを取り出し、三瀬に向かってナイフを突きつける。

三瀬、慌てて下がり、左に体を躲す。

鈴木、後ずさりして、立ち止まってスマホで話していた女子高生を左手で肩を引き寄せ、クビに右手でナイフを押し当てようとした瞬間、菜々子の銃が火を噴く。

鈴木の右腕上部に命中、ナイフが吹っ飛ぶ。鈴木うずくまり、右腕を押さえ、うめいている。  
大垣、鈴木のそばへ行き、止血している。

野次馬が集まってくる。スマホで撮影している。

三瀬、スピーカーマイクで話してる。

三瀬「兼光の銃弾が鈴木の右腕に命中、救急車をお願いします」

女子高生、しゃがみこんでいる。

三瀬、菜々子、女子高生に駆け寄る。

三瀬「怪我はないか？」

女子高生、か細い声で、

女子高生「大丈夫です」

三瀬、菜々子に戻るよう促す。

菜々子、戻っていく。

人がどんどん集まってくる、スマホで

撮影している。

坂本、榊原、駆けつけてくる。

坂本「後はまかせろ。三瀬、女子高生をバス

253

の中へ、大垣、榊原、鈴木を救急車が来る  
までバスの中へ、武部、ドローンを降ろし  
たらこちらに来てくれ」

武部、ドローンを降ろしている。

三瀬、女子高生を抱えてバスに乗せて  
いる。

大垣、榊原、鈴木を抱えながらバスに  
戻っていく。

坂本、自転車を端に寄せて、落ちたナ

イフを手袋をして拾っている。

武部、坂本のそばに来る。

坂本「武部！ 大垣と共に救急車が来たら鈴木に付き添って病院まで頼む。俺は神奈川県警本部長に連絡して事後処理にあたる」

武部「わかりました」

坂本、バスに戻り、

坂本「三瀬、女子高生の家族に連絡して事情を説明してやってくれ」

三瀬、女子高生と話している。

坂本、スマホに話している。

坂本「警視監！ 坂本です。埼玉県警から依頼がありました鈴木を逮捕したのですが、鈴木が女子高生にナイフをつきつけたため、発砲しました。鈴木は右腕を負傷」

スマホ（古賀）「女子高生は無事か？」

坂本「無事です。怪我はありません」

スマホ（古賀）「よし、埼玉県警には俺から連絡する」

坂本、神奈川県警本部長に電話しよう

と、スマホを操作してるが、手が止まる。宙を睨んでいる。

坂本「参った、参った」

坂本、再び、スマホを操作している。

坂本「警視監、何度もすみません、重大なミスをしてしまいました」

スマホ（古賀）「何をした！」

坂本「神奈川県内で逮捕しようとしたにもかかわらず、神奈川県警に事前に連絡するのを忘れていました。さらに人質に危険が及ぶとの判断とはいえ、発砲してしまいました。こちらがすめばすぐに神奈川県警に赴き、謝罪しますが、もし問題が大きくなったときは古賀さんに迷惑がかかるかもしれません」

スマホ（古賀）「そうか、わかった、本部長に俺も謝罪しておくが、坂本も謝っておいてくれ」

坂本「わかりました」

坂本、神奈川県警本部長に電話してい

る。

救急車がやってくる。

鈴木を運び込み武部、大垣が乗りこむ。

野次馬がさらに増えて、スマホで撮影

している。

救急車が出ていく。

坂本、三瀬と話している。

坂本「女子高生はどうしてる？」

三瀬「お母さんがもうすぐ来てくれます」

坂本「パトカーを一台使えるように頼んでみ

る。病院に行くか、県警の事情聴取に行く

か、相談しながら決めてくれ」

三瀬「大丈夫そうに見えますが、最後まで面

倒見ます」

坂本「頼んだぞ」

神奈川県警のパトカーが来ている。

捜査員と鑑識、降りてくる。

坂本、バスから降りる。

坂本「坂本です、ご苦労様です」

捜査員「県警本部長から指示をお伝えします。

神奈川県警本部に来ていただき、説明してください。それから婦警さんのためにケーキを用意して待っていますとのこと。現場を鑑識に調べさせますがよろしいでしょうか？」

坂本「お願いします」

捜査員、ロープを張っている。

鑑識、薬莖や銃弾がないか探している。

坂本、バスに乗りこみ、

坂本「婦警さんって！ 兼光のことか？」

ケ  
257

「キってどういうこと？」

菜々子「まさか、覚えてくれたんですね、ランボーキツカーを捕まえたときに本部長と約束したのです」

○川崎・病院・前

救急車、病院へ到着、

救急隊員、鈴木をストレッチャーに乗せて運んでいる。

武部、大垣、付き添っている。

武部、スマホで話している。

武部「班長、鈴木はすぐに手術します、これからどうすればいいですか」

スマホ（坂本）「埼玉県警が来るまで逃亡しないように見張っておいてくれ」

武部「わかりました」

○警視庁神田庁舎別館・オペレータールーム

久慈、榊原と電話で話している。

久慈「簡単に終わると思ったらそうじゃなかったな」

258

スマホ（榊原）「みんなバタバタしている」

久慈「それはそうと兼光さんはどうしてる？」

スマホ（榊原）「ケロっとしてるように見える

けど、内心はわからない。それにしてもさすがオリンピックに出ただけのことはある。

上腕のど真ん中に見事に命中させた。あつというまの出来事だったな、巻き込まれそうになった女子高生は無傷ですんだから完璧な仕事だったんだが、班長や古賀さんは

後始末が大変そう、当分帰れそうにない」

○川崎・アパホテル・前・バス

女子高生の母親、やってきた。心配そうに娘に駆け寄っている。

三瀬、母親に話しかけている。

パトカーがやってきて、母親、女子高生、三瀬を乗せて去っていく。

捜査員がやってくる。

捜査員「坂本さん、もうお聞きすることもなさそうなので県警に行っていただけですか」<sup>259</sup>

坂本「わかりました。秋葉、県警まで」

○神奈川県警・本部長室

課長以下6人が立っている。

本部長、坂本、曾我、菜々子、榊原、

秋葉、ソファに座っている。

テーブルにコーヒートケーキが並べられている。

坂本、机に頭をこすりつけている。

坂本「申し訳ありません。神奈川県内でそちらに断りも入れずに鈴木を逮捕してしまいました。埼玉県警が依頼してきたのに、神奈川県警に連絡が入っていると勝手に思い込んでしまったせいです。さらに人質に危険が及ぶとの判断とはいえ、発砲してしまいました、大騒ぎになっています」

本部長「表向きは大変遺憾だと言っておこう。マスコミにはそう答える。連絡がなかったことについてとやかく言う気はない。なぜならランボーキッカーを捕まえてくれた君たちを窮地に陥れるなんてできるわけがない。この件は私と古賀警視監にまかせてくれ。神奈川県警はこれからも坂本班と良好な関係でいたいからな、問題は発砲したことだろう。日本のマスコミは発砲には厳しい、この件は我々に聞かれても答えようがない。警視庁に聞いてくれと言うだけだ」

坂本「ご迷惑かけて本当にすみませんでした」  
本部長「謝罪はもう十分だ。婦警さん、みな

さん、ケーキを食べてくれ」

全員、食べている。

菜々子「ありがとうございます、いただきます、いただきます。本部長！ 先日はシューマイをたくさん送っていただきありがとうございます、いただきました」

本部長「中華街のシューマイはなかなかだろ  
う」

菜々子「とってもおいしかったです」

本部長「人質は無傷で犯人だけを制圧するのはあつぱれだ、婦警さんが撃ち抜いたんだな、いい根性しているじゃないか」

菜々子「手が勝手に動いていました。自分でも驚いています」

本部長「後始末が大変だぞ、覚悟するんだな。でも君たちはよくやったと思う、だから毅然とした態度で立ち向かえ」

坂本「ありがとうございます」

本部長「神奈川県警にはSITという特殊捜査班があるのをご存じか？」

菜々子「はい、知っています」

本部長「婦警さんにはいつか応援を頼むかもしれない。坂本さん、いいだろう？」

坂本「即答はしかねますが、古賀警視監と相談のうえ、できる限りご期待に添いたいと思います」

○同・駐車場・バス・内  
全員、座っている。

坂本「三瀬のボディカメの映像が必要なんで  
MICRO SDカードあるか？」

武部、渡している。

坂本「兼光、おまえも」

菜々子、渡している。

坂本「秋葉、古賀警視監と打ち合わせをしな  
ければならない、最寄り駅で俺を降ろして  
くれ、君たちは病院に行き、鈴木を引き渡  
しを見届けて、武部と大垣を乗せて帰って  
くれ」

○警視庁・警視監室

古賀警視監、坂本、ソファに座り、話している。

古賀「ばかやろう、神奈川県警に連絡も入れず、逮捕に向かいやがって」

坂本「本当にすみません」

古賀「ランボーキツカーで感謝された神奈川県警だったからよかったものの、そうでなかったら大問題になってたぞ。下手すりゃ、チームは解散なんてことになりかねない」

坂本、頭を下げている。

古賀「二度とやるなよな。さて、もうすでに

263

SNSには女性警官が発砲した動画も上がってきている。おおむね好意的ではあるが、もし女子高生に当たっていたらとか、他にやり方があったのではとか否定的な意見も3割ほどある」

坂本「決定的な動画ですか？」

古賀「いや、撃たれた後だな。うずくまってる犯人や女子高生の表情とかだ」

坂本、三瀬と菜々子の MICRO SD カ

ードを机に置いている。

坂本「これには決定的な映像が映っているはずですが」

古賀「スマホでは画面が小さいな」

古賀、秘書を呼んで、パソコンで再生させている。

優子、駆け込んでくる。

優子「坂本さんもらしてたのですね。古賀警視監に聞きたいことがありました」

古賀「清水さん！ 相変わらず素早いな」

優子「女性警官が発砲したと聞いて兼光さんだとピンとききました。詳しいことを教えて

もらえますか？」

古賀「これ以上ないタイミングだな。今、まさに発砲した時の映像を見ようとしてたんだ」

優子、目を大きく見開いている。

優子「私にも見せてもらえますか？」

坂本「見てもらったほうがいいと思います」

古賀「そうだな」

秘書、手招きしている。

古賀、優子、坂本、パソコンの画面を  
食い入るように見ている。

坂本「これは兼光のボデイカメの映像だな」

優子「三瀬さんがナイフに後すぎりして左に  
逃げて、前方がぼっかり開いたのですね」

古賀「鈴木が女子高生を左手で押さえ、ナイ  
フを上げた瞬間、発砲している」

優子「これってまるで映画を見てるかのよう  
です、華麗っていえば語弊があるかもしれ  
ませんが、まさにスナイパー」

古賀「撃つたのは兼光だが、名前は伏せてく  
れるか」

優子「もちろんです」

坂本「たくさんの野次馬がスマホで撮影して  
いた。兼光の顔が晒されることになってし  
まう」

古賀「それはもう止めようがない」

優子「今はまだ名前は出ていないはずです」

古賀「そうか」

優子「女性警官が発砲するだけでも珍しいことですよ。それが見事に犯人の右手に命中して人質を助けたなんて日本では聞いたことがありません。お願いします！この映像！テレビで流させてください。兼光さんの顔は出しませんから」

古賀「もう一度じっくり映像を見てみる。」

坂本と相談している。

古賀「許可する」

優子「飛び跳ねながら、帰っていく。」

古賀「発砲に関しては俺が事後処理するが、内部調査があるかもしれない。兼光の精神状態はどうだろう、坂本はメンタルの心配をしてくれ」

○警視庁神田庁舎別館・ミーティングルーム

（夜）

武部、大垣、秋葉、菜々子、榊原、曾我、帰ってくる。

久慈、出迎えている。

久慈「大変な一日でしたね、お疲れ様、あれ、三瀬さんは？」

武部「女子高生に付き添っている。もう戻ってこなくていいと伝えてある」

菜々子「久慈さん、一緒に帰りませんか？ 新

保さんに会いに行く約束をしているんです」  
久慈「いいよ」

○麻布・回転ずし店（夜）

久慈、菜々子、寿司をテイクアウトしている。

267

○麻布・コンビニ（夜）

久慈、菜々子、お茶、ビール、ジュースを購入している。

店員1、レジを打っている。

店員1「タワマン刑事、今日のニュース見ましたか、川崎で女性警官が犯人を狙撃して人質救出したって。どのチャンネル回して

もそればかり」

菜々子 言いたそうだが我慢している。

久慈 「帰ってから見ろわ」

店員 「あの女性警官、顔は映ってなかったけど、かっこよかった」

菜々子、微笑んでいる。

久慈 「ほう」

店員 「女性にばかり現をぬかしてないで、タワマン刑事さんもがんばってよ」

菜々子、キョトンとしている。

久慈 「はいはい」

268

○麻布トラップタワー・エントランス（夜）

久慈、菜々子、コンシエルジュとガードマンに話している。

ガードマン 「お帰りなさい、タワマン刑事、と、れれれ、また新しい彼女？」

久慈 「一応、言っとく、違う」

コンシエルジュ 「お帰りなさい、また望月さんからおいしいお菓子をいただきました。

よろしくお伝えください」

珠理、横を通りすぎようとして久慈に気がつく。

珠理「あら、タワマン刑事さん、こんばんわ」

久慈「佐野さん、元気？」

珠理「私は元気ですけど、名倉沙羅羅さんがね」

久慈「ボルボだったな。すごくきれいな人」

珠理「それです、久慈さんは彼女いるのかなあ。あつて聞かれたの、どうやらあなたに興味あるみたい」

菜々子、肘で久慈をつついている。

珠理「でもね。多分無理って言ったわ、だって新保さんがきつと彼女になるってね。同居してるんだもん」

久慈「それはなんとも言えないけど、あれほどの美人は俺には無理だわ。断ってくれてよかった」

久慈、右手で頬を叩いている。

久慈「思い出した。大垣のこと」

菜々子「そういえば大垣さん、ちつくと前に  
久慈さんに彼女を紹介してくれて頼んじ  
よった」

珠理「誰？」

久慈「刑事なんだけど、足がものすごく速い。  
100mでもうちよつとでオリンピックに  
行けた」

菜々子「でも茨城出身でだっぺだっぺとうる  
さい。ごめんなさい、私は兼光です。久慈  
さんと同僚です。大垣さんは鍛えてるから  
いい体をしていますよ」

珠理「強い？」

久慈「あー強いわ、ボディガードには最高」

珠理「茨城だと遠いわね」

久慈「出身は茨城だけど、たしかどこだった  
かな、目黒区だったはず」

珠理「それって田園調布に近いじゃない」

久慈「名倉さんて大金持ちのお嬢さんだよ。

大丈夫かな」

珠理「会わせたい、連絡してもらえますか？ 強

い人だとストーカーをやっつけられる」

久慈「聞いておきます」

○久慈宅・キッチン（夜）

久慈、菜々子、寿司と飲み物をテーブルに置いている。

菜々子、寿司を皿に並べている。

弥生、お菓子を箱から取り出ししている。

瞳「お帰りなさい、兼光さん、いらっしやい」

菜々子「こんばんわ」

弥生「ようこそおいでくださいました」

久慈「寿司を買ってきたんで食べませんか」

瞳「喜んで」

弥生「いただきます。お菓子は置いておきますので好きなだけどうぞ」

菜々子「お酒も好きだけど、甘いものも大好きなんです」

久慈、瞳、弥生、菜々子、寿司を食べ、お菓子もつまんでいる

弥生「それはそうと、瞳さんと話してたんだ

けど、もしかして今日の川崎の事件は兼光さんじゃないの？」

菜々子、返答に困っている。

久慈、菜々子の耳元で小声で話している。

久慈「絶対、他言しないでください」

瞳「わーやっぱりそうだったんだ。ねーねー、一緒にテレビを見ない？ 何度見てもかっこいい」

瞳、テレビをつける。

弥生「私は誰にも話しません」

久慈「瞳が心配」

瞳「こらこら、信用しろ！」

菜々子、久慈、瞳、テレビを見ている。

菜々子「東都新聞の清水さんが出演しちゅー、批判されるのかな？ 新保さん、録画できます？」

瞳「やってあげる」

瞳、録画している。

菜々子、じっとテレビを見ている。

菜々子「自分で言うのもなんだけど、確かにかっこいい。SNSを見たいけど、どうかな」

瞳「好意的が8割くらい、悪意のある投稿もある」

菜々子「それは見たくない。ビール飲みませんか？ 誰かつきあってください」

瞳「まかしとき」

弥生「私もつきあう」

瞳、立ち上がり、ビールを運んでいる。

久慈「女同士で楽しんでやがるな」

瞳「兼光さんて時々、土佐弁がでてくるから

高知ですよね」

菜々子「さすが」

瞳「ナナさんて呼んでもいい？」

菜々子「いいですよ、新保さんのことは瞳さんって呼んでも？」

瞳「瞳でいいですよ、ナナさんは年上だし、水着持ってきた？ 泳がない？」

菜々子「持ってきちよらん、急にここに来た

いなと思ったから、次は必ず」

瞳「じゃあ一緒にお風呂に入ろう」

菜々子「前も入ったけど見たことのない装置があつて使い方がわからなかった」

瞳「先に言つとくけど、私はレズじゃないよ」

菜々子「あちゃー知っちゅうがちゃ、ふふふ、わかりました」

弥生「兼光さんてレズなの？」

菜々子「はい」

弥生「時代が変わつたねー、堂々と言える世の中になつたのはいいことね」

菜々子「久慈さん、今夜、泊つてもいいですか、今日はいろいろあつたから、誰もいない部屋に帰りたくない」

久慈「わかるわかる。いいよ、好きにして」

○久慈宅・瞳の部屋（早朝）

久慈、そーっと入っていく。

瞳、起きている。

瞳「おはよう」

久慈「おはよう、兼光さん、どうしてた？」  
瞳「一緒にお風呂に入ったよ、アスリートの  
体ねー、引き締まっっていて無駄なお肉がな  
いのよ。お菓子をいやというほど食べて、  
喋って、疲れて寝たわ」

久慈「ふーん」

瞳「兼光さんもここに住んだらって勧めちゃ  
った」

久慈「ありゃりゃ」

瞳「差し迫った理由もあるの。SNSでさ、発  
砲した女性警官は誰か？ たくさんの人が  
特定しようとしているの。いずれ名前や住  
所がばれてしまうから、今のところにはも  
う住めない」

久慈「うわー、女性ばかりになる。ハーレム  
目指すか」

瞳「バカ」

○警視庁神田庁舎別館・トレーニングルーム

（朝）

大垣、三瀬、秋葉、曾我、榊原、久慈、  
菜々子、ワークアウトしている。

久慈、大垣と話している。

久慈「少し前だけど彼女がほしっていったよ  
ね、今もそう？」

大垣「おっ、誰か心当たりあるのか？」

久慈「田園調布に住んでるお嬢さんで、ボル  
ポに乗ってて、長身ですごい美人」

大垣、怪訝な表情。

大垣「うぐぐぐ」

久慈「ただし、問題がある。ストーリーカーに  
ずっと狙われていて、ほとほと困っている。

警察に相談して接近禁止令も出てる。ボデ  
イガードまで雇ったらしいが気が合わなか  
ったみたい。強い男がいらしい」

大垣「俺はまあまあ強い、で、いくつなの？」

久慈「年齢は26だったっけ？」

大垣「多分、断られっぺど会ってみてえ」

○警視庁神田庁舎別館・オペレータールーム

久慈、モニターを見ている。

久慈「北田は見つからないのか、埒が明かないな」

久慈のスマホに着信。65から始まる  
電話番号が表示されている

久慈、気が付く

久慈「シングポールからだ」

スマホ（寺田）「元気か？」

久慈「望月さんとも楽しくやってる。外大の  
院生が転がり込んできたけど。そっちは？」

スマホ（寺田）「ほう？ 外大の院生か、会っ

277

てみたいな。シングポールは安全、きれい、  
世界中の料理が食べられる。医療も最高。

物価が高いけどな」

久慈「帰ってくるのか？」

スマホ（寺田）「いや、当分帰れそうにないん  
だが、頼みがある」

久慈「言ってくれ」

スマホ（寺田）「シングルマザーの女性と子供  
二人をタワマンに住まわせてもらえない

か？　今すぐという話ではないんだが」

久慈「もちろんいいよ」

スマホ（寺田）「さすが、孝志。理由も聞かないのか？　助かる」

久慈「寺田のことは信用してるからな。いつでも○×だ。彼女の名前を覚えてくれるか？」

スマホ（寺田）「佐伯滯。多分1か月後くらい先になる。よろしく頼む」

第8話

○警視庁神田庁舎別館・オペレータールーム

(朝)

久慈、モニターを見ている。立ち上がってうろろしている。

久慈「北田はどこにいる？ 今日もまたダメか、捜査一課は何も言っていないし、どうすればいい？ アーモンドアイ？」

アーモンドアイ、無言。

久慈、ふてくされて出ていく。

○同・ミーティングルーム(朝)

全員、集まっている。

坂本、入ってくる。

坂本「今日は千葉に応援に行く。武部、説明を頼む」

武部「オレオレ詐欺の拠点が千葉にある。警視庁、千葉県警の合同で摘発に当たる」

三瀬、ブライニングをしている。

武部「三瀬！」

三瀬「応援は退屈なんで」

武部「4階建てのビルを一棟まるごと詐欺グループが借りているらしい。部屋は12あって、総勢は60人を超えている」

榊原「すごい」

武部「オレオレだけでなく投資詐欺、ロマンス詐欺、SNS詐欺、カードのハッキングなどもやっているらしい」

曾我「60人も一網打尽するなんてできるとは思えないけど」

坂本「どうかな、警察官300人が招集されている」

武部「作戦と呼べるものではなくビルの周りを警察官150人が取り囲む、突入するのは150人」

三瀬「あーあ、俺たちはきつと取り囲むほうだな」

武部「1階にはごつい男たちがいるらしい。それで屈強な警官が先頭に立ち、突入する。

三瀬と大垣は先頭部隊に配置される」

大垣、吠えている。

三瀬、にやりと笑っている。

大垣「ウォー！　うれしいだっぺ」

三瀬「まさかまさかの抜擢やんけ」

榊原「俺たちは？」

武部「菜々子はライフル持参でSITの狙撃

チームに」

菜々子「はい」

武部「曾我は白バイ隊に」

曾我「おう」

武部「他は野次馬の整理」

榊原、落胆している。

秋葉、舌を出している。

大垣、大笑いしている。

大垣「野次馬の整理って！」

武部「兼光はライフルを、曾我はバイクを、

制服、防弾チョッキ着用。三瀬、大垣はポ

デイカメ装着、ドローンは飛ばさない。野

次馬が立ち入らないようにロープ、バリケ

ード、立入禁止のサイン、カラーコーン、

コインパー持参。バスで行く」

久慈「ドローンも飛ばさないなら、俺も行きたいのですが、ゴミ拾いでもなんでもします」

坂本「いいぞ、久慈も来い」

### ○千葉県警・前

パトカー80台、バス10台　白バイ20台集結している。

坂本、武部、千葉県警と打ち合わせをしている。

282

### ○同・バス・内

秋葉、菜々子、曾我、久慈、座っている。

大垣、三瀬、逮捕術の練習をしている。

榊原、窓から外を眺めている。

久慈、大垣と三瀬を見ている。

久慈「張り切ってるな」

坂本、武部、バスに乗りこんでくる。

前にパトカー1台止まっている。

SIT 隊員、バスの前で待っている。

坂本「三瀬、大垣、前に止まっているパトカーに乗って、曾我、白バイが集結しているところに行ってくれ、兼光はSIT 隊員に案内してもらえ」

三瀬、大垣、曾我、菜々子、バスを降りていく。

三瀬、大垣、パトカーに乗りこむ。

曾我、バイクで走り出す。

菜々子、SIT 隊員についていく。

283

○千葉・向かいのビル・屋上

前に詐欺グループのビルが見える。

菜々子、SIT 隊長、隊員たち、話している。

菜々子「警視庁坂本班の兼光です。よろしく  
お願いします」

SIT 隊長「川崎のヒロインが来てくれたぞ」  
隊員たち、拍手している。

X

<フラッシュバック>

X

X

鈴木、立ち止まってスマホで話していた女子高生を捕まえ、クビに右手でナイフを押し当てようとした瞬間、菜々の銃が火を噴いた、見事に鈴木の右腕に命中、鈴木うずくまり、右腕を押しさえてうめいている。

X

X

X

菜々子「あれはたまたまうまくいっただけですよ」

284

隊員1「あの映像は何度も見ました。見事と  
言うしかありません」

隊長「SITにぜひ欲しいと古賀さんに頼んだ  
が断られてしまった」

菜々子「今、初めて知りました」

隊長「君が転属願いを出すという方法もある  
のだが」

菜々子「大変うれしいお誘いですが、いくら

なんでも転属は早すぎます。私は坂本班に配属されてから、ずっと足手まといで、川崎の事件で初めて役に立ったのです」

隊長「そうだったのか、もし嫌になったら俺を頼ってこいな。いつでも待っているから」

菜々子「ありがとうございます」

隊長「じゃあ、今日の話しよう。捜査員たちが突入するまでは姿を見られないように待つ、突入したら姿を見せてライフルを構える。発砲命令が出るまでは決して撃ってはならない」

隊員1「はい、わかりました」

隊員2、菜々子に話しかけている。

隊員2「兼光さん、発砲したときにためらいはなかったですか？俺も似たような経験が一度あったんだけど、人質に当たったらどうしようとか考えてしまって、撃てなかった」

菜々子「私は撃たなかったら女子高生が殺されてしまうのではないか、と考えた途端に

もう引き金を引いていました。外したらとは考えなかったですね」

隊員2「そう思うべきですよね。私の場合は撃たなかったために犯人に立て籠もられて長時間ひやひやしました。次にそんな機会があったら撃ちます」

菜々子「できればそんな機会が来ないほうがいいのですが」

隊員2「SITに所属していてそんなことは言ってもらえません」

菜々子「うーん、そうですね」

隊員2「訓練場で一緒にやりませんか、少し見習わなければ」

菜々子「私は週に2回は行きますのできつと会えると思いますよ」

菜々子、風向きを確かめている。

隊員2、レーザーレンジファインダーで距離を測り、隊員たちに知らせている。

○同・ビルの近く・パトカー・中

三瀬、大垣、千葉県警刑事3名、話している。

刑事1「俺たちが先陣を切る。三瀬君はいい体してるし、大垣君の腿はパンパンだな、頼りにしてる」

大垣「まかせてください」

刑事2「入り口に近い部屋に半ぐれ集団がいる。ごつい体のやつを揃えていて、元相撲

取り、レスラー上がり柔道野郎もいる。

2階から上には掛け子、受け子、出し子、

287

ロマンス詐欺の男性、女性、ハッキングの専門家、そいつらをボデイガードするため半ぐれ集団がいる。おそらく突入すると1階のやつらは暴れて時間稼ぎするだろう。その間に上の階のやつらを逃がしたり、証拠隠滅の時間を作ろうとする。だからすばやくボデイガード達を制圧して、後続の警官達が上がるようにしなければならぬ」

三瀬、武者震いしている。

大垣、両手で頬を叩き、気合を入れて  
いる。

三瀬「一番強そうなやつはまかせてくれ」

大垣「俺がやるだっぺ」

○同・ビル・前

パトカーが次から次にやってくる。白  
バイ、バスも続いている。

○同・向かいのビル・屋上

SIT 隊員、菜々子、身を乗り出して伏  
せたままライフルを構えている。

288

○同・ビルから少し離れた場所

バスが停止。

秋葉、坂本、久慈、榊原、武部、ロー  
プを張り、バリケードを設置。カラー  
コーンを置き、コーンバーを乗せ、立  
入禁止のサインを立てている。

○同・ビル・中

パトカー及び白バイでビル周辺が埋め  
尽くされている。

三瀬、大垣を先頭に警官が次々にビル  
内に突入していく。

2階3階4階では掛け子たちが右往左  
往している姿が窓から見える。

大垣、手前の部屋に入っていく。

元相撲取り、部屋から出ようとして大  
垣にかまわず、すり抜けようとする。

大垣、後ろから引きずり倒してがっち  
り押さえ込んでいる。

刑事1、手錠を素早くかける。

レスラー上がり、柔道野郎は廊下で警  
官の突入を阻止しようとしている。

三瀬、レスラー上がりに強烈なタック  
ルを決め、両足をぐいっと根こそぎ刈  
る。

レスラー上がり、たまらずひっくり返  
る。

刑事2、手錠をかける。  
大垣、さらに廊下に出て猛スピードで  
刑事3と組み合っている柔道野郎に飛  
び蹴りが炸裂、刑事3もろとも壁にブ  
チあてる。  
刑事1、飛び掛かり、手錠をかけてい  
る。  
三瀬、手にナイフを持っている小柄な  
男と対峙している。  
三瀬、飛び掛かるかと思わせて、小柄な  
男が構えた瞬間、  
大垣、後ろから猛ダッシュしてナイフ  
を叩き落としている。  
三瀬と刑事3、覆いかぶさり逮捕。  
刑事1、大声で後ろの警官に行け！と  
と気合を入れている。  
警官たち、一齐に2階、3階、4階へ  
と駆け上がっていく。  
三瀬、大垣、肩で息をしながら見送っ  
ている。

○同・ビル・付近

狙撃チーム、ライフルを構えたまま微動だにしない。

曾我を含む白バイ隊員たちは見守っている。

警官たちが犯人を連行して、バスに収容していく。

窓から飛び降りて逃走を企てた男があつというまに警官に囲まれている。

坂本たちはバリケード前に立って野次馬が立ち入らないように見張っている。

ロープの外側から何人かの野次馬がスマホで撮影している。

三瀬、大垣、出てきて、坂本の方へ移動している。

刑事1、2、3、三瀬と大垣に追いつく。

刑事1「すごかったですね、坂本さんがお二人は役に立つって言った通りだ」

大垣「へー褒めてくれてたんだ」

刑事2「また、一緒にやりましょう」

大垣、三瀬、両肘をたたんで拳を体の前で合わせている。

大垣「無敵だっぺ」

三瀬「無敵やんけ」

○同・ビルの近く・バス・前

犯人たちを乗せたバスが走り出す。

その都度、坂本たちは野次馬を移動させ、バスを通過させている。

292

狙撃チームはライフルを片付けている。

パトカーが次々に帰っていく。

白バイも後に続いている。

坂本達、ほとんどのパトカーが帰ったのを見届けてバリケードの撤収。

野次馬、帰っていく。

久慈、電話している。

大垣、三瀬、バスの前に来ている。

菜々子、曾我、帰ってくる。

久慈、スマホを手で押さえて大垣に話しかける。

久慈「大垣さん、今日はこれから予定ある？」

大垣「なにもない」

久慈「よかった、名倉さんが会いたって」

久慈、再び電話している。

大垣「今日はいいい日だな」

三瀬「ええーっ、飲みに誘おうと思ってたん

やが」

大垣「また、つきあうべ」

菜々子「私も行きたいな、お邪魔かな」

大垣「邪魔！」

菜々子、むくれている。

久慈、笑っている。

武部、榊原、曾我、坂本、秋葉、片付

けている。

久慈、大垣、菜々子、三瀬、手伝っている。

久慈「作戦が成功したように見えるけど」

坂本「リーダーを捕まえていれば成功だけど

な」

榊原「三瀬さんと大垣さんはやり遂げたって顔をしてるけど、俺は面白くないね」

○麻布・おでんの店（夜）

こじんまりとした店。

珠理、沙羅羅、話しているが、何も注文していない。

大垣、久慈、入ってくる。

久慈「すみません、お待ちせして」

珠理「いえいえ」

沙羅羅「こちらこそ、わざわざ来ていただきありがとうございます」

久慈「こちらが大垣さん、俺と違ってバリバリの刑事です」

大垣「大垣だっぺ、よろしく」

沙羅羅、微笑んでいる。

沙羅羅「うふ」

珠理「この前久慈さんと会ったとき、一緒にいた婦警さんがだっぺだっぺとうるさいっ

て」

大垣「兼光め、余計なことを」

久慈「こちらは佐野さん、うちのご近所さん、  
あちらがストーカーに困り果てている名倉  
沙羅羅さん、彼女を大垣さんに紹介しよう  
と思っつて」

珠理「注文しましょうか？」

大垣「料理はまかせます。ビールで、久慈も  
ビールやな」

沙羅羅「私はみかん酒、お願い」

珠理、おでんのフルコースを注文して  
いる。

大垣、沙羅羅に見とれている。

大垣「きれいすぎる。これじゃあストーカー  
に狙われるだっぺ」

沙羅羅「大垣さんはどちらに住んでいます？」

大垣「武蔵小杉です」

珠理、沙羅羅の肩を叩いている。

珠理「田園調布に近い！」

久慈「今日は大垣さん！　すごかった、オレ

オレ詐欺のアジトに突入して屈強なボディ  
ガードたちを片っ端からやっつけた」

大垣、照れている。

珠理「ワーオ」

沙羅羅、うるうるしている。

沙羅羅「強い人って素敵」

久慈「強いだけじゃない、もっとすごいのは  
とにかく足が速い。それも恐ろしく速い」

珠理「大垣さんは女性には優しいの？」

大垣「まあね」

おでん、ドリンクが運ばれてくる。

全員、ドリンクを持っている。

沙羅羅「悪いやつを捕まえた大垣さんに！

乾杯！」

大垣、久慈、珠理「乾杯！」

おでんを食べて、お酒を飲んでいる。

久慈「ここのおでん！ おもしろい、蛤、生

姜、伊勢海老って、こんなの初めて」

珠理「私のお気に入りなの」

大垣、真面目な顔で、

大垣「名倉さんが嫌でなかったら、行き帰りに迎えに行きましようか、ただ出勤時間、退勤時間がまちまちで毎日は無理なんです  
が」

珠理「それってボデイガードってこと？」

大垣「そうです」

沙羅羅「いいんですか？ 嬉しいです」

珠理「お付き合いしてみてもいい？」

大垣「もったいなさすぎます」

久慈「最初はボデイガードってのはありだと思  
う」

珠理「そうよね。まずはあの憎っくきストー

カーを懲らしめてください」

沙羅羅「よろしくお願いします」

大垣「さあ食べるっぺ、飲むっぺ」

○久慈宅・リビング（夜）

菜々子、榊原、やってくる。

弥生、瞳、ソファで紅茶を飲んでい

瞳「ナナさんに榊原さん！ いらっしやい、

久慈は一緒じゃなかったの？」

菜々子「大垣さんと女性二人と飲みに行くつて、私は邪魔って言われちゃったの」

弥生「残念だったね」

瞳、表情が硬くなっている。強い口調で、

瞳「誰と行ったの？」

菜々子「佐野さんと名倉さんだっけ？ スト  
ーカーに悩んでる女性、大垣さんを紹介す  
るんだって」

瞳、ほっとした表情。

瞳「あー！ そうなんだ」

菜々子、望月を見て、改まった表情で、  
菜々子「望月さん、私もここに住んでいいで  
しょうか」

弥生「孝志はいいって言ったの？」

菜々子「はい」

弥生「孝志がいいと言ったら○×でしょう。

まあ私の顔を立ててくれるのはありがたい  
けど。仲良くやりましょう」

菜々子「こちらこそ、よろしくお願いします」

瞳「ナナさん、よかったね」

榊原「まだSNSで兼光さんのことを調べてるやつがけっこういますよ。住民票はほとぼりが冷めるまで移さないほうがいいかもね」

菜々子「そうします」

弥生「食事はしたの？」

榊原「まだです。兼光さんが急いでたもので」

菜々子「ごめんなさい、望月さんが寝たら困るなと思って」

弥生「年寄りには早く寝ると思ってるでしょう。でも私は遅くまで起きてるわ」

榊原「若いんだ」

弥生「簡単なものでよかったら作ってあげるわ。食べる？」

榊原「いただきます」

菜々子「手伝いましょうか」

弥生「雑炊と干物をもらったので、それでいい？　じゃあ手伝って」

菜々子、弥生、キッチンへ、

瞳、榊原と話している。

瞳「榊原さんて精子バンクに登録してるんだって？」

榊原「はい、それだけじゃないですよ」

弥生、菜々子、料理しながら会話に参加している。

菜々子「いつか子供が欲しくなったら精子をわけてもらおうの」

瞳「予約してるんだ」

弥生「骨髓バンクとか血液バンクとか？」

榊原「あとは臓器バンク、角膜バンク」

瞳「なかなかできることじゃないでしょう」

榊原「坂本班に配属されたときに死ぬこともありうるなと思ったわけで、移植される側からすれば若い人の臓器がいいでしょう。まだ若いんでそれならやっておこうかなと」

弥生「ドナーカードを見てもいい？」

榊原、財布からドナーカードを出す。

さらに運転免許証も、

弥生、榊原のそばに来てドナーカード

を見ている。

弥生「榊原さんにもしものことがあれば葬儀屋さんではなく、臓器移植ネットワークに連絡するんですね」

榊原「そうしてください」

弥生「ご家族は了解していますか？」

榊原「揉めましたけど、今は納得してくれています」

瞳「私は臓器は無理かな。でも骨髄バンクには登録したい」

榊原「ウェブサイトを見て決めればいいと思います」

弥生「私もできますかね？」

榊原「たしか年齢制限があったはずですよ。調べてみます」

榊原 スマホで調べている。

榊原「54歳までですね。いけるんじゃないですか」

弥生「お上手ねー、私は60歳を超えています」

○久慈宅・瞳の部屋（早朝）

久慈、そーっとやってくる。

瞳、起きている。

瞳「兼光さんは来週には来るって」

久慈「また小さい冷蔵庫が増える」

瞳「小さい冷蔵庫は各部屋に置いて大きいのを買わない？ 取られたくないものは小さいのに入れて、どうぞ誰でも食べてくださいというものは大きいのに入れたらどうかな」

久慈「この部屋のオーナーから連絡があった」<sup>302</sup>

1か月後らしいがシングルマザーの女性と子供二人がここに住む、よろしくな」

瞳「わー大所帯になっていく。男の子？ 女の子？ 賑やかになるだろうなあ」

久慈「詳しいことは聞いてない。子供がくるのは少し心配だけど」

瞳「子供は好きだし、頼りになる望月さんがいるじゃない」

久慈、瞳、異変に気がつく。

ブランコのように揺れている。

久慈 固まっている。

瞳、顔がこわばっている。

瞳 「地震だー」

久慈、瞳のそばによろけながら、なんとか行く。

瞳、思わず抱きつく。

瞳 「ワワワワ、大きいの？」

久慈 「そんなに大きくはない」

瞳 「ベッドの下に隠れても意味ないかな」

久慈 「そうだな」

弥生、伝い歩きしながら入ってくる。

弥生 「大丈夫？ 気分悪い」

久慈 「こっちに來てください」

弥生 「お邪魔みたいね」

瞳、慌てて体を離す。

弥生、そばに行く。

瞳 「いえ、違うんです。びっくりしちやって」

まだ揺れている。

弥生 「いつまで揺れるの」

久慈「長いな」

瞳「私も気分悪い」

久慈、スマホを見ている。

久慈「震度4だって、まだ揺れてる。もしかしたらエレベーターが止まってるかも」

久慈、よろけながら走り出し、玄関を開け、エレベーター前に行く。帰ってくる。

久慈「エレベーター止まっている」

久慈、管理人室に電話している。電話を切り、瞳の部屋へ戻ってくる。

久慈「復旧に半日くらいかかるらしい。ただ

停電はないからまだましだけど」

瞳、弥生「えー」

瞳「もし停電になったらどうなるの？」

久慈「非常用の自家発電設備はあるからすべてダメということはないけど、トイレが流せなくなるかもな」

弥生「それは大問題ね。仕事には行くの？」

久慈「階段を下りるしかない」

瞳「88階だよ」

弥生「私は無理だわ」

久慈「下りるのはいけるかもな、でも上るのは？」

瞳「まだ揺れてる。いい加減にしてよ」

久慈「俺は仕事に行くけどいいかな」

瞳「私たちを置いて行くのね。行ってらっしゃい、私は望月さんと震えながら待ってます」

久慈「メールで状況を教えて？何かあったら戻ってくる」

弥生「瞳さん、嫌味を言ったらだめ、戻らなくていいよ」

瞳「へへへ、わかった。階段で転ばないよう  
にね」

○トランプタワー麻布・階段

久慈、最初は一気に降りていくが、だんだん嫌になっている。

○田園調布・沙羅羅宅・前（朝）

沙羅羅宅は立派な門構え、豪邸。玄関横にガレージ。

大垣　チャイムを押している。

ガレージのシャッターが自動で開き、

沙羅羅運転のボルボが出てくる。

沙羅羅「本当に来てくれた、ありがとうございます  
います」

大垣、ボルボの助手席に乗りこむ。

大垣「ストーリーカーの写真を見せてください」

沙羅羅、スマホを操作して写真を見せて  
ている。

大垣、じっと見ている。

沙羅羅、ボルボを発進させる。

大垣「嫌な目つきをしているな！　名倉さん、

ストーリーカーを見かけたら教えてください」

沙羅羅「少し先の公園にいるはずです」

ボルボ、公園の横をゆっくり通過して  
いる。

沙羅羅「いました」

ストーリーカー、じつと沙羅羅を見ている。  
沙羅羅、運転しながら左手を大垣の肩  
の上に置いている。

沙羅羅「強そうな彼ができたと思ってくれ  
かな」

大垣「どうかな？」

○警視庁神田庁舎別館・オペレータールーム

（朝）

久慈、モニターを見ている。

久慈「おはよう、アーモンドアイ」

アーモンドアイ「おはよう、孝志」

久慈「今日は朝から散々な目にあつた。エレ  
ベーターが止まって、88階から階段を使  
って降りた、変な疲れ方をしている」

アーモンドアイ「登るよりはましだな」

久慈「令和の鬼畜・北田は今日も見つからな  
いのか？」

モニターには反応がない。

久慈、立ち上がり、出ようとする。

メールの着信音。

久慈、スマホを見る。

捜査一課長からメール。

久慈、慌てて席に戻る。

久慈「アーモンドアイ、新しい情報だ。北田が乗っている車のナンバーがわかった」

久慈、ナンバーを入力して、じっとモニターを見つめている。

久慈「ライブでは見つからないのか、1週間遡って調べてくれ？」

アーモンドアイ「はい」

一つのモニターに反応が出た。確率100%の表示。

久慈、立ち上がって右腕を折り曲げ、手前に引くポーズ。

久慈「よし、5日前か！ 場所は藤岡？ 藤岡ってどこだ？」

久慈、タブレットでマップを調べている。

久慈「おっ、群馬県だ、このカメラはスーパ

ーマーケットの駐車場か、やっと見つけたぞ」

久慈「この車を運転していたやつ顔を出せるか？」

アーモンドアイ「まかせて」

北田の顔がアップでモニターに映し出される。

久慈、以前の北田の顔と新しい顔を比べて見ている。

久慈「やっぱり整形していやがる。目は二重になって、頬が膨らんでいる。いくら探しても見つからないはずだ」

久慈、新しい北田の顔を入力している。

久慈「これで探してみてくれ」

モニターには藤岡、スーパーマーケット、5日前しか出てこない。

久慈「なぜ？ まあいい、少しは前進した」

○警視庁・警視監の部屋

坂本、古賀、捜査一課長、ソファに座

っている。

捜査一課長「北田をよく見つけてくれた。これが新しい顔写真だな」

古賀「やはり整形してたのか、指名手配の写真はもう役にたたないな、捕まえられそうか？」

坂本「まだ、無理です。5日前に藤岡にいたことしかわかりません。ただ立ち寄っただけかもしれない。顔と車が判明しているの、もう少し調べさせてください」

捜査一課長「一応、群馬県警には写真を送っておく。ラッキーがあるかもしれない」

○警視庁神田庁舎別館・トレーニングルーム  
久慈、菜々子、大垣、ワークアウトしている。

久慈「大垣さん、どうだった？」

大垣「接近禁止命令が出てるのに全く懲りてない」

菜々子「とんでもない美人なんでしょ」

大垣「まるでモデルのようで、見とれてばかり。でもまずはストーリーカーをなんとかするべ」

久慈、スマホにメールの着信。内容を見てほっとしている。

久慈「今朝、地震があっただろ、エレベーターが止まって最悪だったけど、ようやく動いたって」

菜々子「そんなに揺れなかったけど」

久慈「タワマン最上階は揺れが大きくなるし、長い」

菜々子「ふーん、ねえ、一緒に帰らない？ 鍵やセキュリティカードを望月さんが預かってくれてるの」

久慈「おう」

ガードマンやってくる。

ガードマン「大垣さん、綺麗な女性がお迎えに来ています」

大垣、にっこり笑って、

大垣「お先に行くべ」

菜々子「鼻の下、伸びてる」

大垣「ふん」

○田園調布・公園・前（夜）

沙羅羅、大垣、ボルボを止めて、公園  
を見ている。

ストーリーカー、カメラを構えてボルボを  
見ている。

大垣「無言電話やメールは今日もありました  
か？」

沙羅羅、スマホを見せる、

大垣、着信履歴、メールを見ている。

大垣「これじゃあ、たまったもんじゃない」

沙羅羅「いつもはすぐ削除するのですが、今

日は大垣さんに見てもらおうと」

大垣「ガツンと食らわせましょうか」

沙羅羅「大丈夫ですか？」

大垣「俺が出て行ったら、ドアをロックして  
じっとしててください」

沙羅羅、大垣の手を握っている。

大垣、強く握り返して、出ていく。  
沙羅羅、ドアをロックしてじっと見て  
いる。

大垣、ストーリーカーに速足で近づいてい  
く。

ストーリーカー、立ち上がって逃げようと  
している。

大垣、猛スピードで追いつき、ストー  
リーの肩を掴み、強引にベンチに座ら  
せ、襟首を掴み、その手に力を込めて  
いる。

ストーリーカー、おとなしくしているが目  
が血走っている。

大垣「警察だ！ お前！ いい加減にしろ、  
これ以上名倉さんにつきまとうのはやめ  
ろ！」

ストーリーカー「なぜ警官が一緒にいるんです  
か？」

大垣、さらに力を入れる。

大垣「逮捕されたいのか？」

ストーカー「いえ」

大垣「接近禁止命令も出ているよな。俺は毎日、名倉さんと一緒にいるから、もし次にお前を見かけたり、無言電話、メールを一通でも送ったら、容赦なく逮捕するからな」

ストーカー「はい」

大垣「返事が小さい！」

ストーカー「はい、もうしません」

大垣、襟首を手前に引き、グイッと突き出す。

ストーカー、ふらふらしている。

大垣「行け！」

ストーカー、よろよろしながら逃げていく。

○麻布・コンビニ（夜）

久慈、菜々子、弁当を買っている。

店員、弁当を温めている。

店員「タワマン刑事、令和の鬼畜・北田が群馬にいたってニュースでやってた」

久慈「ほう？」

店員「さっさと逮捕して」

菜々子「まかせて」

○久慈宅・キッチン（夜）

久慈、菜々子、キッチンで弁当を食べ  
ている。

瞳、お茶を飲んでいる。

弥生、部屋から出てくる。鍵とセキユ  
リテイカードを持っている。

弥生「はい、菜々子さん、鍵とセキユリテイ  
カードね」

菜々子「ありがとうございます」

弥生「報告しなくちゃね、今日、撮影に行っ  
てきました」

久慈、瞳、拍手している。

菜々子、怪訝な表情。

菜々子「どういうこと？」

瞳「テレビの時代劇に出るのよ。手だけなん  
だけど、ずっとエステに通って頑張ってた

んだから」

菜々子「ええー、望月さん！　すごい！」

弥生「緊張しっぱなしで、手は震えるわ、呼吸が荒くなるわ、目もうつろになって、心臓がバクバクいうし、スタッフの人たちが優しく、肩を揉んでくれたり、くだらない冗談言って笑わせてくれてなんとか落ち着いたの」

瞳「出来栄えは？」

弥生「3回目で〇がでて、ほっとしたわ」

久慈「おめでとう」

弥生「差し入れたくさんもらったから食べて？」

弥生。立ち上がり、お菓子の箱を抱えて持ってくる。

瞳「ナナさんまでコンビニ弁当？」

菜々子「たまにはね。それはそうと、瞳！　久

慈さんのこと好きでしょ？」

瞳、真っ赤になっている。

久慈、キョトンとしている。

瞳「ととと突然、何を言うのよ！」

菜々子「だってね、昨日、久慈さんが女性と食事しているって私が言った時の顔ったら、怖かったもん、わかりやすいというか、女性はやきもちを焼いたときの顔がまさにそれ！」

弥生「気に入ってることはたしかね」

瞳、体をのけぞらしている。

瞳「望月さんまで、もう」

菜々子「好きなら好きと言っちゃえば？」

瞳「急に言われても」

菜々子「久慈さんはどうなの？ 瞳のこと好き

きじゃないの」

久慈「わわわ、火の粉が飛んできた」

弥生「そんなにポンポン迫ると誰だって戸惑うわよ、まあそんなに慌てずに」

瞳、肩で息をしている。

久慈 弁当を食べながら視線を上に向けている。

第9話

○久慈宅・瞳の部屋（早朝）

久慈、やってくる。

瞳、ベッドの中だが、薄目を開けている。

久慈、ベッドに腰かけるが、後ろ向きで、瞳を見ないでつぶやいている。

久慈「俺はね、瞳のこと大好きだよ。頭はいいし、かわいいし、おっぱいもきれいだし、たまに憎たらしいところあるけど」

瞳、デュベスタイルを引き上げて顔を

318

隠しながら、

瞳「もつと言って？」

久慈「スタイルいいし、笑った時の表情がいい。お菓子はおいしそうに食べるし、お酒もいける。瞳と話すのは楽しいし、俺にやきもちをやいてくれるなんて光荣だしな、口は悪いけど」

瞳、さらにデュベスタイルを引き上げる。

瞳「もっと言って？」

久慈、振り返って瞳を見る。

久慈「もう十分！」

瞳、がばっと起き上がって、久慈に思  
い切り抱きつく。

瞳「私も好きだよ」

久慈「ノーブラじゃないか、おっぱい押しつ  
けてどうする」

瞳「もういいや」

○田園調布・沙羅羅宅（朝）

大垣、チャイムを押して、ガレージの  
横に立っている。

シャツターが静かに上がり、ボルボが  
ゆっくり出てくる。

沙羅羅、大垣を見てにっこり笑う。  
シャツターがゆっくり降りている。

大垣、ボルボに乗ろうとした瞬間、物  
陰に隠れていたストーカーが走って  
くる。ナイフを強く握りしめている。

大垣、気がついたが、体勢が悪い。上半身に向かってきたナイフの切っ先をよけようと体をひねり、手で叩き落そうとしたが、ナイフは大垣の太腿に深々と突き刺さる。

大垣、ひるまず、ストーカーの首を抱えて右手で締め上げている。

ストーカー失神している。

沙羅羅、絶叫して、パニックになっている。

大垣「落ち着け！ 警察を呼んでくれ、それと救急車」

沙羅羅、気を取り直して、バッグからスマホを出して、救急車を呼び、警察にも電話している。

大垣、ストーカーをがちり押さええている。

大垣「ロープかなにかないか？ 2本ほしい、

あとタオルも？」

沙羅羅「ちよっと待っていて、取ってくる」

沙羅羅、家に駆け込んでいる。大声で叫んでいる。父親、母親、家政婦、ロープを持って走ってくる。犬も飛び出してくる。

沙羅羅、タオルを3枚持っている。

大垣「両手、両足をロープで縛ってほしい」  
大垣、失神しているストーカーから手を離す。

父親、家政婦、ストーカーを車内から引きずり出し、道路上に寝かせて、ロープで手を縛っている。

大垣「もったときつく」

父親、家政婦、ロープを思い切り引っ張って縛っている、続いて足にも取り掛かっている。

沙羅羅「この刺さったナイフ、どうしたらいい？」

大垣、顔をゆがめて痛みに耐えている。

大垣「抜いたらだめだ。このままでもいい、夕

オルで傷口の周りを圧迫してくれるか」  
沙羅羅、タオルで圧迫している。血は  
それほど多くはない。

沙羅羅「他にできることない？」

大垣「写真を撮ってくれるか？　沙羅羅さん  
が無事でよかった」

沙羅羅、スマホで撮影している。

近隣の住人が驚いて出てきている。

犬が走り回っている。

父親、ロープを縛り終えて、家政婦と

322

ストーリーカーを道路脇に運んでから、母  
親と共に車に近寄り、窓から大垣に話  
しかける。

父親「娘のためにこんな目にあってすまない」

大垣「初めまして、大垣です。あいさつが遅  
れて申し訳ありません」

母親「今は挨拶なんかしている場合じゃない  
でしょう」

大垣「油断してたのが情けない。もっと周り  
を見ておくべきでした。てっきりストーカ

「は公園にいるものだと思います」

母親、娘にきつく言う。

母親「沙羅羅！　ずっと病院で付き添いなさ

い！　会社は当分行かなくていいから」

沙羅羅「当たり前でしょう。私のせいでこんなことになったんだから、治るまで面倒みます」

大垣「そこまでしてくれなくてもいいだっぺ」

沙羅羅、少し微笑む。

沙羅羅「やっと訛ってくれた」

救急車、やってくる。隊員2名、ストレッチャーで大垣を慎重に運び込む。

沙羅羅、母親に車のキーを渡してから、救急車に乗りこむ。

沙羅羅「お母さん、警察が来たらよろしく頼みます。ストーカーを引き渡してください」

母親、父親、心配そうに見ている。

家政婦、犬を捕まえている。

○警視庁神田庁舎別館・ミーティングルーム

(朝)

みんなバタバタしている。

坂本「どういうことだ？　なぜ大垣が刺された？」

三瀬「名倉さんから連絡があつて田園調布でストーカーに刺されたと、病院で手術中に命に別状はないそうです」

久慈、吠えている。

久慈「俺のせいです。名倉さんを紹介したばつかりに、すみません、班長、病院に行きたいのですが」

坂本「よし、もう一人、誰か連れていけ」

久慈「三瀬さんでいいですか？」

坂本「ああ、病院に着いて詳しいことがわかったらすぐに連絡しろ」

久慈「わかりました」

三瀬「大垣の実家の電話番号わかります？」

坂本、スマホを操作して三瀬に見せる。

三瀬「実家には俺が電話します」

○田園調布・病院・手術室・前

久慈、三瀬、駆け込んでくる。

沙羅羅、珠理、立ち上がる。

沙羅羅「あー久慈さん！ どう謝ったらいい  
のか、申し訳ありません、私が、私が．．」  
珠理「無理なお願いしたせいで、こんなこと  
になってしまった」

久慈「大垣は強いからと安易に考えてた」

三瀬「はじめまして、三瀬です。大垣の手術  
は終わりましたか？」

沙羅羅「いえ、まだです」

三瀬「命には別条ないって？」

沙羅羅「お医者さんはそう言ってました」

三瀬「ひとまず、実家に電話するわ」

三瀬、電話している。

久慈「どういう状況だったのですか？」

沙羅羅、説明している。

田園調布署の巡査2名がやってくる。

巡査「ご家族のかたですか？」

沙羅羅「いえ、その場に居合わせましたもの

です。名倉です」

巡查「お話聞かせてもらえますか」

三瀬、警察手帳を見せる。

巡查「警視庁の方でしたか？」

三瀬「犯人は？」

巡查「勾留しています」

三瀬「詳しくはあのお嬢さんから聞いてください」

巡查、沙羅羅と話している。

医者、手術を終えて出てくる。

久慈、沙羅羅、三瀬、珠理、駆け寄る。

326

医者「手術は無事に終わりました。深く刺さ  
れていて回復には時間がかかります。元通  
りになるかどうかいまのところはなんとも  
言えません」

沙羅羅「もう話せますか？」

医者「20分ほど待っていたただければ目が覚  
めます」

沙羅羅「ありがとうございます」

巡查「すみません、名倉さん、もう少しよろ

しいですか？」

沙羅羅、巡査、話している。

沙羅羅、事件の時のスマホの写真を見せている。

大垣、看護婦に付き添われて手術室から出てくる。

沙羅羅、久慈、珠理、三瀬、巡査2名についていく。

### ○同・病室

病室で目が覚めるのを待っている。

三瀬、坂本に電話している。

大垣、うっすら目を開けている。

沙羅羅、大垣の手を握っている。

沙羅羅「ごめんなさい」

大垣、ぼーっとしている。

三瀬「死ななくて良かったな」

久慈「俺が紹介したばかりに、こんな目にあって申し訳ない」

大垣、か細い声で、

大垣「もう謝るのは最後にしてくれ、で、医者  
者はなんと行ってた？」

沙羅羅「回復には時間がかかるって、元通り  
になるかどうかはまだわからないらしい」

三瀬「お前ならきっと元通りになる。実家に  
連絡したらお母さんが飛んでくるって」

大垣「ありがとう。で、ストーカーは？」

三瀬「勾留されてる。刺されながらよく逮捕  
したな」

大垣「やっぺ」

巡査「田園調布署から来ました。よろしいで  
すか、刺された状況をお聞きしたいのです  
が」

大垣「いいだべ」

○警視庁神田庁舎別館・ミーティングルーム  
古賀、坂本、ソファに座って、話して  
いる。

坂本「大垣は重傷で、いつ復帰できるかどう  
かは今のところはわかりません」

古賀「新しい人員を入れるか？　ただ大垣が復帰してきたときにどうするか考えておかななくては」

坂本「もう一人増やしてもいいかなと思っていましたので、大垣が戻ってきてもどちらかも抱えたいと思います」

古賀「それじゃあ、増やすか、心当たりがあるのならば早く待ってくれ」

坂本「できれば短距離走者か、格闘にたけた人間がほしいのですが」

古賀「わかった」

久慈、三瀬、戻ってくる。

坂本、久慈、話している。

坂本「大垣のことは一旦忘れて、仕事をしよう」

久慈「はい」

坂本「北田を探してくれるか」

久慈、オペレータールームへ行く。

○同・オペレータールーム

久慈、モニターを見ている。

モニターに北田が捉えられている。

久慈「おっ、昨日の夕方だな。場所は下仁田のスイパーか、藤岡と近いな、ネギで有名なだったよな、もう一か所あるぞ、信越道のシステムに車が映っている。よし！北田は群馬県に住んでいる」

○同・ミーティングルーム

久慈、坂本に報告している。

古賀、聞いている。

久慈「群馬に住んでいる可能性が・昨日、下仁田でカメラに引っ掛かりました」

坂本「北田の父親が群馬に山を3つ所有している。この中のどれかに北田が住んでいるのかもしれないな」

坂本、タブレットを見せて群馬の地図から、3つの山の場所を示している。

久慈「名もなき山ですね」

坂本、じっと考えている。

古賀、ささやく。

古賀「考えるより、行動だ。失敗しても俺たちが失うものは何もない」

坂本、目を大きく開く。

坂本「よし、俺たちで探そう」

三瀬、菜々子、曾我、武部、榊原、秋葉、久慈、集まっている。

古賀、見ている。

坂本、大きな声で、

坂本「令和の鬼畜・北田を探すぞー」

歓声があがる。

坂本「北田は山の中に隠れていると思う。週に一度、スーパーに買い出ししている姿を久慈が捉えているのだが、曜日も時間もバラバラで決まった店があるわけではない」

榊原「どこの防犯カメラに映っていますか？」

久慈「藤岡、下仁田、信越道、すべて群馬県、ただ10日あまりで3回だけ」

坂本「父親が藤岡近辺の山を3つ保有している。その中のどこかに潜んでいる」

三瀬「どうやって探すのですか？　名もなき山を歩いて探す？」

坂本「1週間、張り込む。3班に分け、ドローンを飛ばす。交代で監視してなんとか隠れている場所を特定する。明日から始める」

榊原「忍耐力が試されるな」

坂本「宿泊は高崎のホテル。久慈も来い、監視は日の出から日の入りまで。見つけたら1日で終わるかもな、1週間かかって見つけられなければ撤退する」

菜々子「トイレとかは？」

坂本「携帯トイレコンパクトを買ってくれ、DIYにある」

武部「テント、食料は各自で運ぶ、WIFIはポケットWIFIにYAMAPアプリを使ってなんとかなる。ドローンは各組2台で予備を入れて、合計9台用意する。使い方講習会をすぐに始める」

曾我「下手したら1週間帰れないってことや  
ー」

久慈「なんか楽しいかもな」

三瀬「どこがやねん」

秋葉「大垣の見舞いには今日しかない、帰りに病院に行くわ」

榊原、曾我、菜々子 武部、坂本、う  
なずいている。

菜々子、久慈に話す。

菜々子「引っ越しが遅れそうですね。この仕事が終われば行きます」

○田園調布・病院・病室（夜）

坂本、武部、三瀬、秋葉、曾我、菜々子、久慈、榊原、見舞いに来ている。

沙羅羅、付き添っている。

大垣、ベッドにいる。

菜々子、花を花瓶に生けている。

大垣「すみません、ご迷惑かけて」

武部「元気そうでした。明日から、全員、群馬で1週間、泊まり込みで北田を探す。

それで当分、見舞いに来れない」

大垣「俺も行きたかった」

坂本「ゆっくり休んだらいい」

三瀬「お母さんは？」

大垣「来てくれたけど、名倉さんが面倒は私が見ますって言うから、帰ってしまった」

沙羅羅「お母さん、怒ってないかな」

大垣「怒ってなんかない、むしろ喜んでだべ」

秋葉、大垣をつついている。

秋葉「それにしても、綺麗なお嬢さんだな。

刺されたのは最悪だけど、少し羨ましい」

大垣、小さな声で、

大垣「まあね」

坂本「名倉さん、大垣のこと頼みます」

沙羅羅「はい」

○久慈宅・瞳の部屋（早朝）

久慈、バックパックを背負いながらそつと入っていく。

瞳、起きている。

久慈、バックパックを下ろしている。

久慈 「泣くなよ」

瞳 「なぜ？」

久慈 「寂しいだろうな」

瞳 「いったいどうしたの？」

久慈 「今日から1週間、帰ってこれない」

瞳 、うつむいている。

瞳 「うえーん」

久慈 ぼーっと見つめている。思わず

近寄ろうとする。

瞳 、微笑んでいる。

瞳 「ウソ泣きに決まってるでしょ」

久慈 、ほっぺたを膨らませている。

久慈 「だまされた！」

瞳 「どこに行くの？」

久慈 「高崎でホテル暮らししながら、張り込みに行く」

瞳 「おおっ、それでこそタワマン刑事！」

久慈 「たまにはな、兼光さんも行くので引越しが遅れる」

瞳 「電話してね。元気で帰ってきて」

瞳、久慈の頬にキスをする。

久慈、照れている。

○群馬・山・中

菜々子、榊原、山中を歩いている。帽子をかぶり、トレッキングをしているように見える服装、バックパックを背負っている。

○群馬・山・中

三瀬、山中を歩いているが、汗をかいている。タオルを首からぶらさげている。久慈、黙々と山中を歩いている。二人ともバックパックを背負っている。

○群馬・山・中

武部、ドローンを手に持ちながら歩いている。

秋葉、曾我、バックパックを背負い、しつかりとした足取りで進んでいく。

○群馬・一つ目の山が見渡せる山・中

菜々子、ドローンを飛ばしている。

榊原、近くでテントを設営している。

2つのバックパック、双眼鏡、望遠鏡、予備のドローン、予備のバッテリー、モバイルバッテリー、などが置いてある。

菜々子、岩に腰かけて、ドローンを操作しながら、パソコンに送られてくる映像を見ている。

榊原、設営を終えてやってくる。

榊原「どう？」

菜々子「映像はきれいね。動くものがあればドローンが知らせて、そのまま追いかけてくれるからずっと見続けなくてもいいんだけど」

榊原「2時間で交代しよう、俺はテントの中でゲームでもしてるわ」

兼光「了解、休んで」

榊原、菜々子が拳銃を携帯しているの

を見ている。

榊原「ここにはツキノワグマやイノシシがい  
るらしいけど、出てきたらどうする？ 撃

ち殺す？」

菜々子「襲ってきたらね」

榊原「余裕あるー」

榊原、テントに入っていく。

兼光、映像をじっと見ている。

○群馬・2つ目の山が見渡せる山・中

久慈、ドローンを飛ばしている。

三瀬、そばで見ている。

テント、2つのバックパック、双眼鏡、

望遠鏡、予備のドローン、予備のバッ

テリー、モバイルバッテリーなどが置

いてある。

久慈、ブルーシートにクッションを敷

いて、ドローンの映像をパソコンで見

ている。

三瀬「長い戦いになるな」

久慈「ゆっくりやりましたよ」

三瀬「テントを設営したら2時間ほど山の中を歩いてくる」

久慈「迷子にならないでくださいよ」

三瀬「GPSがあるから大丈夫」

○群馬・3つ目の山が見渡せる山・中

武部、ドローンを飛ばしている。

秋葉、望遠鏡を覗いている。

曾我、双眼鏡を手に持っている。

3つのバックパック、双眼鏡、望遠鏡、

339

予備のドローン、予備のバッテリー、モバイルバッテリーなどが置いてある。テントは設営されている。

武部、ドローンの映像をパソコンで見ている。

曾我「北田はここでまた若い女性を切り刻んでいるかもしれない」

秋葉「山の中じゃ誰にも見られないしな」

武部「ここでじっと動かないでいると目視で

は山の手前、半分しか見えない、裏側にいたら意味ないな」

曾我「ドロインの撮影は裏を重点にしてみては？」

武部「まずはそうしてみる。明日は裏側が見えるように場所を替えて向こうの山に行くか」

○高崎・ビジネスホテル・会議室（夜）

坂本、武部、菜々子、三瀬、久慈、榊

原、秋葉、曾我、ピザとチキン、ポテ

ト、フルーツを食べている。飲み物はジュースやコーラ。

坂本「報告してくれるか」

榊原「ドロインのバッテリーがギリギリでした。もうひとつ予備をください」

坂本「用意してある」

久慈「冷たい飲み物が欲しいので、ペットボトル1」のお茶と水を凍らせています、明日は持って行ってください」

三瀬「ドローンが反応したけど鹿だった」

菜々子「雨が降ったらドローンは飛ばせませ  
か？」

武部「このドローンは防水なんだが、強い雨  
が降ったら中止」

秋葉「明日は山の反対側に行きたいのですが、  
いいですか？」

坂本「いいぞ、他のチームもどんどん移動し  
てくれ」

曾我「WiFiがあるから助かってます」

ホテルの従業員がビールを運んでいる

。341

坂本「少しだけど飲むか、三瀬！　少しだけ  
だぞ」

三瀬「ありがたい」

○群馬・山・中

㊦・二日目

久慈、ドローンを飛ばしている。

三瀬、ドローンを見ている。

三瀬「このドローンはすごいな、木立の中を

葉っぱにも一切触れないですいすい飛んで  
いる」

久慈「今頃、気づいた？」

三瀬「久慈はずっとパソコン見てるけど、疲  
れないのか」

久慈「慣れてるから」

三瀬「俺はだめだ、やっぱり歩いてくる」

○高崎・ビジネスホテル・会議室（夜）

全員、集まっている。

坂本「捜査一課から連絡があって下仁田で若  
い女性が行方不明になったらしい。北田の  
犯行かどうかはわからないが可能性はある。  
気を抜かずに見張ってくれ」

○群馬・3つ目の山が見渡せる山・中

→・3日目

武部、パソコンを見ている。

武部「人だ！」

曾我、双眼鏡を見ている。

秋葉、望遠鏡を見ている。

秋葉「見つけました。だけど、おじいさんが  
山菜かキノコを取っています」

○同・一つ目の山が見渡せる山・中

㊦・4日目

榊原、菜々子、猛烈な雨、レインコートを着ながら、長靴を履いてテントの中でじっとしている。ドローンは横に置いてある。

○高崎・ビジネスホテル・会議室（夜）

㊦・5日目

全員、集まっている。疲れている。

坂本「大変だろうが、もう少しがんばってく  
れ、来週に新メンバーが加入する。ウェイ  
トリフティングの元選手で名前は喜屋武、  
体重120kg、クリーン&ジャークで2  
20kgの記録がある。沖縄出身だ」  
菜々子「もう驚かない」

秋葉「大垣はどうなるんかのう」

坂本「心配するな。大垣が戻ってくれば10人が坂本班だ」

久慈、三瀬、ほっとしている。

三瀬「よかった」

○群馬・二つ目の山が見渡せる山・中

→・6日目

三瀬、久慈、元気がない。

久慈「今日も空振りかもな、情報が間違っているのかもしれない。俺はここにいるより、

オペレーター室にいたほうがよかった」

三瀬「どっちにしても明日には帰れる」

久慈、テントに向かっている。

三瀬、パンとジュースを持ちながら、だるそうにパソコンを見ている。

久慈、テント内で瞳に電話している。

スマホ（瞳）「明後日の夜に望月さんの出演したドラマが放映されるの」

久慈「見たいな。多分、明日には帰れると思

う」

スマホ（瞳）「Students organize the grand  
feast for us」

久慈「英語？ Feastってごちそうってこと  
だから、なんとなくわかる。なにがなんで  
も帰る」

三瀬、映像を見ている。

ドローンが人影を捉えている。

三瀬、テントに向かって、大声で叫ん  
でいる。

三瀬「久慈いいいい！ おうおうおう、人だ、  
山を下りている」

久慈、慌てて駆け寄ってくる。

三瀬、望遠鏡で見ている。

三瀬「男だ。大きな茶色のバックパックを背  
負ってるが中は空だな、ぺちゃんこだ、服  
は紺のTシャツにジーンズか、顔は確認で  
きない」

久慈、双眼鏡で見ている。

久慈「北田かな。歩き方からして若いように

見える」

三瀬「顔を見るにはどうしたらいい？」

久慈「武部さんならドローンを自在に操れるけど、俺たちじゃ無理だ。このままだとずっと頭しか見えない。双眼鏡も、望遠鏡も距離がありすぎて、顔までは確認できない」

三瀬「どうする？ みんなを呼ぶか？」

久慈「武部さんに来てほしいな、連絡してみる」

久慈、電話している。

久慈「武部さんと班長が来てくれる」

三瀬「北田だと思っただけだな」

久慈「そう願いたい」

三瀬「武部さんがここに来るまで1時間はかかるだろう。その間にあいつはどこかに行ってしまう」

久慈「だよな、俺たちは監視し続けるしかない。今はあの男は山の向こう側にいる」

三瀬、パソコンを見ながら興奮している。

三瀬「車があるぞ。なぜ今まで見つけれなかった？ あの車は北田のものか？」

久慈「北田の車は黒のカローラなんだが」

三瀬「おおお黒だ、カローラだと思うけど、秋葉がいてくれたらなあ」

久慈「ナンバーはわかる？」

三瀬、いらいらしている。

三瀬「見えない、ドローンをもっと寄せたい、高度を下げたい」

久慈、パソコンの映像を拡大している。  
右手の拳を左手の平に打ちつけ、

久慈「4つの数字はわかった。北田の車にほぼ間違いない」

三瀬、坂本に電話している。

スマホ（坂本）「よーし、全員そちらに向かわせる、隠れ家はわからないか？」

三瀬「今から調べます」

久慈「車に乗りこんだ。ドローンはここまでだな、2 km 以上遠くに行かれると制御できなくなる」

三瀬「隠れ家をドローンで調べてくれるか？」

久慈「了解」

三瀬、再び坂本に電話している。

三瀬「北田はすぐには帰ってこないから見に行くのはダメですか？」

スマホ（坂本）「見に行くのはやはりだめだ。

万が一、戻ってきた場合にどうしようもなくなる」

三瀬「そう言うだろうと思っていました。了解です」

スマホ（坂本）「久慈！ オペレーター室に戻ってくれ、アーモンドアイの情報がほしい」

三瀬、スマホを久慈に渡す。

久慈「わかりました。ホテルの荷物は取りに  
いっていいですか？」

スマホ（坂本）「高崎から新幹線に乗るのが一番早い。車はホテルに預けておいてくれ」

久慈、帰る用意をしている。

久慈「三瀬さん、帰ります。もうすぐみんなが来ると思いますので」

三瀬「おう、頼りにしてるぞ」

久慈、速足で山を下りていく。  
しばらくして武部とすれ違う。

久慈「三瀬さんが待ちかねています」

武部、速足になっている。

武部、ようやく三瀬のいるところに着く。

三瀬「隠れ家を探したいのですが、武部さんが来てくれると助かります」

武部、ゴーグルを嵌めて、ドローンを操作している。

349

武部「どのあたりで北田を最初に見つけた？」

三瀬「5合目より少し上のあたりです」

武部「じゃあそのあたりから上を調べてみる」

武部、長い間、ドローンを操作していたが、ゴーグルを外して、ぼやいてい  
る。

武部「見つからない。木が鬱蒼と茂っていて見れない場所がやたらある」

三瀬「諦めたらだめですよ」

坂本、やってくる。

続いて秋葉、曾我、やってくる。

坂本「どうや？」

武部「見つかりません」

坂本「諦めずに探してくれ」

菜々子、榊原、やってくる。

菜々子「北田でしたか？」

坂本「おそらくな」

○警視庁神田庁舎別館・オペレータールーム

久慈、スイッチを入れている。

久慈「久しぶりだな。アーモンドアイ」

アーモンドアイ「1週間どこに行ってた？」

寂しかったぞ」

久慈、笑っている。

久慈「適当なこと言いやがって。北田を探し

てくれ、すぐに見つかるはずだ」

アーモンドアイ「はい」

久慈、モニターを見ている。

久慈「いたいた」

前橋のスーパーマーケットのカメラが北田を捉えている。服装は紺のTシャツにジーンズ、さらに駐車場のカメラにも北田と黒のカロラが映っている。久慈、スマホに話している。

久慈「班長！ いました、北田です。服装も車も顔もばっちりです、99%です、大量に買い物してます。やりましたね」

スマホ（坂本）「よし」

○群馬・2つ目の山が見渡せる山・中

坂本、古賀に電話している。

坂本「北田を群馬の山中で見つけました、さらに前橋のスーパーマーケットでも」

スマホ（古賀）「よくやった！ 申し訳ないが、捕まえるのは待ってくれ！ 捜査一課の顔を立てたいし、群馬県警にも相談しなくてはならない」

坂本「では、一度戻りましょうか？」

スマホ（古賀）「戻ってきてくれ、俺の考えで

は明後日に逮捕したいと思っっている。他のメンバーは明日は休みにして休息させてやれ、1週間がんばったんだからな」

坂本、みんなを集めている。

坂本「ご苦労だった。できれば北田が帰ってくるのを確認してほしいが、日没になれば引き上げていい。明日は休みだ。おそらく明後日、捜査一課、群馬県警、坂本班で逮捕に向かうことになる。一度自宅に帰ってもいいし、ホテルで休養してもいい。俺は今から古賀警視監と相談してくる」

352

武部「わかりました、日没までがんばります」

坂本「三瀬、よくがんばったな、今日は飲み潰れてもいいぞ」

三瀬「ぼちぼち飲みます。逮捕したら倒れるまで飲みます」

○田園調布・病院・大垣の病室

久慈、ドアを開ける。

大垣が寝返りをうつのを沙羅羅、手伝

っている。

久慈「どう？」

沙羅羅「お医者さんが言うには、リハビリをやれば日常生活には問題ないって、でも以前のように速く走るのは無理かもしれないって」

久慈「よかったような」

大垣「速く走れないとなるとクビになるかも」

久慈、返答に困っている。

久慈「うーん、どうなのかな」

大垣「悪いことばかりじゃないんだ」

久慈「なに？」

大垣「沙羅羅といい雰囲気になった」

久慈、右手こぶしと大垣の右手こぶしをぶつけている。

久慈「やったなー」

大垣「人はみかけによらないというか、いけいけのお嬢さんかと思ってたら全然違った」

沙羅羅、はにかんでいる。

○久慈宅・リビング（夜）

久慈、バックパックを背負い、足取り  
重く帰ってくる。

弥生、瞳、ソファに座っている。

瞳、微笑みながら、

瞳「あれ、明日じゃなかったの？」

久慈「予定ではね、さすがにホテル暮らしは  
疲れた。明後日にまた群馬に行く」

瞳「ええっ、ドラマが放送される日に？ 帰

ってこれる？」

久慈「帰るつもり」

弥生、久慈の腕を引っ張って、

弥生「生徒さんたちが大勢来るでしょう、こ  
のちっちゃいテレビじゃさすがに格好がつか  
ないから大型テレビを買ったわ。ついで  
に大型冷蔵庫も、どちらも明日配達される。

冷蔵庫はお金払ってくれる？」

久慈「はいっ、払います」

第10話

○久慈宅・瞳の部屋（夜明け前）

久慈、そーっと入って、ベッドで寝ている瞳の唇に軽くキスして離れようとする。

瞳、ゆっくり目を開けて、久慈の首に手を回し、ささやく。

瞳「もう一度」

○警視庁神田庁舎別館・駐車場（早朝）

坂本、武部、菜々子、榊原、久慈、喜屋武海翔（26）バスの前に集まっている。

坂本、喜屋武を紹介している。

坂本「喜屋武海翔だ、よろしく頼む」

久慈「ウェイトリフティングだったよね。よろしく」

喜屋武、体はでかいが、声は高音で、ぼそぼそ話す。

喜屋武「力仕事はまかせてください」

久慈「気は優しくて力持ちに見える」

菜々子「よろしく、沖縄弁でしゃべって？」

喜屋武「ゆたしくうにげーさびら」

菜々子「理解できな〜い」

武部「残りのメンバーには群馬で会える」

坂本「よし、荷物をバスに積み込んでくれ、

モトクロス用バイクもな」

菜々子「ドローンは持って行かないのですか」

武部「今回はなしだ。ヘリが飛ぶので邪魔になる」

坂本、武部、菜々子、榊原、久慈、喜

356

屋武、バスに荷物や装備、モトクロス用バイクを積んでいる。

○前橋・群馬県警・前（朝）

警視庁から150人、群馬県警から100人、パトカー、バス、警察犬が集結している。

玄関で捜査一課長、坂本、古賀警視監、群馬県警本部長、話している。

捜査一課長「前はまんまと逃げられている。

これだけ揃えても不安だ」

古賀警視監「北田のことだから、山の中にいくつもカメラを備え付けてるだろう。作戦が始まればどうせすぐに見つかってしまいうから一気に片を付ける」

坂本「突入は坂本班にまかせてください。いいですか？」

捜査一課長「まかせる。警察犬2頭とハンドラー、鑑識4人を同行させるから指示を頼む」

坂本「わかりました」

古賀警視監「よし、今から一つ手前の山の麓に向かう。そこからは徒歩で山を囲い込む」

○同・群馬ヘリポート（朝）

ヘリコプターが2機、待機している。パイロットと観測員、点検している。

○藤岡・道路上（朝）

パトカー、バス、連なって走行している。

○同・一つ手前の山の麓（朝）

広大な空き地にパトカー、バスが次々に入ってくる。捜査員たち、車から降りて整列している、捜査一課長、タブレットを見せて部下に指示をしている。

捜査一課長「北田の車がここにある。2名、張り付けさせる。捜査員250人は一定の間隔をとって山を囲んで、合図が出たら登れ！」

捜査員「わかりました」

古賀、坂本、武部、三瀬、菜々子、秋葉、榊原、喜屋武、久慈、先頭にいる。横には警察犬、ハンドラー、鑑識4人がいる。

曾我、バイクにまたがっている。

菜々子、警察犬を撫でている。

優子、カメラマン、走ってくる。三瀬にむかって手を振ってから、古賀の隣へくる。

優子「おはようございます。今日は独占取材させていただき、ありがとうございます」

古賀「おはよう、清水さん」

坂本、怪訝な表情で、

坂本「マスコミは1社だけですか？」

古賀「たくさん来られると邪魔なんで東都新聞に取材は独占させるが、記事は他社にも同時配信させる約束だ。清水を坂本班の最  
後尾につかせたいが、いいか？」

坂本「わかりました」

捜査一課長が行けと合図している。

坂本「よし、出発だ」

坂本班、歩き出す。

大勢の捜査員が移動していく。

捜査一課長、携帯無線機に話している。

○前橋・群馬へリポート

観測員、交信している。

無線（捜査一課長）「へりを発進させろ」

観測員 1 「了解」

パイロット 1、バッテリースイッチを入れ、他のスイッチも次々に入れていく。エンジンスタートスイッチを入れ、燃料スロットルを開ける。コレクティブレバーを引き上げ、地面から浮かせる。サイクリックレバーを倒し、前進させて、コレクティブレバーをさらに引き上げ上昇していく。

2 機目も上昇していく。

○藤岡・山・中

先頭はモトクロスバイクで駆けあがっていく曾我。

三瀬、武部、坂本、菜々子、警察犬、ハンドラー、鑑識 4 人、秋葉、榊原、喜屋武、久慈、優子とカメラマン、しっかりとした足取りで細い道を一列に

登っていく。

坂本「まずは隠れ家を探さないとな」

武部「中腹より上を探しましょう」

三瀬「おそらく建物はないと思います。トンネル掘って地下で生活しているか、入口をカモフラージュして洞窟内に住んでいる可能性も」

坂本「入り口付近には足跡や草が踏みつけられている痕跡があるはずだ」

三瀬、腕を斜め上にして、指さしている。  
る。

361

三瀬「だいたいの場所の見当はついていきます」

ヘリコプター2機、遙か向こうから飛んでくるのが見える。

警察犬、興奮している。

久慈、優子と話している。

優子「またお会いしましたね」

久慈「清水さんは我々を詮索するのはやめたのですか？」

優子「そうですね。やめたというわけではな

いんです。ただ古賀警視監がいろいろ便宜をはかってくれて、独占取材までさせてもらっているのに、敢えて針でつつくようなことをして嫌われたくないというのは正直あります。うまく丸め込まれたのかもしれない」

久慈「さすが、警視監！」

久慈、振り返って、山麓の捜査員たちや上空にいるヘリコプターをスマホで撮影している。

カメラマン、撮影している。

三瀬、立ち止まる。

三瀬「このあたりです」

曾我、戻ってくる。

坂本、後続が来るのを待ち、大きな声で

坂本「散開して、隠れ家を探せ！」

○同・北田の隠れ家・入り口

全員、散らばって探している。

榊原、秋葉、藪の中に入っていく。藪を抜けると茶色のシートがある。シートをずらすと木の蓋が見える。

秋葉「多分、これだ。枯葉と同じ色だから見えなかったんだ」

榊原「どうする？ 開ける？」

秋葉「いや、班長を呼ぶ」

秋葉、大声で、

秋葉「班長 ここに来てください」

坂本、駆け上がってくる。

秋葉、地面を指さしている。

坂本「秋葉！ 蓋を開けろ」

秋葉、蓋を引っ張り上げ、中を覗く。

榊原、懐中電灯で照らしている。

秋葉「縄梯子があります」

坂本「榊原！ 全員、集めろ」

榊原、声を上げながら走っていく。

警察犬、久慈、菜々子、鑑識、次々に走ってくる。

曾我、バイクで藪を突っ切ってくる。

カメラマン、歩きながら撮影している。

久慈、中を覗き込んでいる。

久慈「細いな、三瀬さん通れないわ」

三瀬「うるせー、喜屋武も無理だな」

喜屋武、両手を広げ、肩をすくめている。

坂本「よし、突入する。慎重かつ素早く行動してくれ、先頭は兼光！ 続いて武部、後は細い順番だな、ナナ！ 北田のにおいにする衣服がほしい、警察犬に嗅がせるから」  
菜々子、スピーカーマイク、ボデイカメラをチェックしている。

菜々子「わかりました」

坂本、スマホに向かって、

坂本「入り口、発見！ 坂本班、今から突入します」

スマホ（捜査一課長）「頼んだぞ」

坂本「ナナ、さあ行け」

○同・中

菜々子、慎重に縄梯子から下りていく。周りは鉄骨で補強されている。菜々子、着地してから上に向かって叫んでいる。

菜々子「縄橋子はけっこう頑丈です」

武部、降りていく。続いて秋葉、曾我、鑑識4人、カメラマン、優子までが着地、

菜々子 拳銃を抜き、前に進んでいく。カメラマン、撮影している。

武部、曾我、秋葉 懐中電灯を照らしながら続いている。

秋葉、スイッチを発見。明かりがつく。

菜々子「中は予想以上に広い。部屋がいくつかありますね」

菜々子、最初の部屋の前に立ち、構えている、ドアを蹴る。

菜々子「OPEN UP（突入）」

菜々子「GO！」

菜々子、武部 秋葉、曾我、鑑識4人、

突入する。誰もいない。

菜々子「CLEAR」

エアコンが据え付けられて、扇風機も回っている。机の上にパソコンが3台あり、防犯カメラの映像に警官が映っている。

秋葉「やっぱりな」

鑑識2、パソコンを調べている。

鑑識「カメラは10台以上設置されています」

武部「用意周到なやつめ」

カバンが置いてある。

武部、カバンを開けると、帯封の現金がぎっしり。

鑑識1が入り調べている。

カメラマン、撮影している。

武部「現金がある！ 持ち出せなかったんだ」

菜々子、次の部屋の前に立ち、一呼吸してドアを蹴る。

菜々子「GO」

武部、秋葉、曾我、鑑識、カメラマン、

優子、続く、誰もいない、トイレ、シヤワーがあり、洗濯籠がある。

兼光「CLEAR」

秋葉、脱ぎ捨てられたTシャツを洗濯籠から拾い、戻っていく。縄梯子の下に置き、大声で叫ぶ。

秋葉「北田のTシャツです、取りにきてくだ

さい」

上から覗いていた久慈、降りていく。菜々子 3つ目の部屋のドアを蹴る。

兼光「GO」

武部、曾我、続く。誰もいない。

○同・山の麓

古賀、捜査一課長、群馬県警本部長、心配そうに山を見上げている。ヘリコプターが2機、ホバリングしている。

○同・北田の隠れ家・入り口

坂本、Tシャツを持っている。

三瀬、榊原、喜屋武、久慈、ハンドラ  
ー2名、警察犬2頭、集まっている。  
坂本、Tシャツをハンドラーに渡して  
いる。

坂本「北田はすでに逃げ出しているから、警  
察犬に追わせる。榊原！ 三瀬！ 北田を  
捕まえて来い」

榊原「まかせてください」

ハンドラー、警察犬2頭に匂いを嗅が  
せている。

368

警察犬、勢いよく走り出す。

榊原、三瀬、ハンドラー、走り出す。

### ○同・3つ目の部屋

ケトル、食器、食材、テーブルがある。

秋葉、曾我、菜々子、部屋を見ている。

武部、ケトルを触っている。

鑑識、調べている。

武部「ケトルが熱い。さっきまで北田がいた

のは間違いない」

○同・4つ目の部屋

菜々子、ドアを蹴る。

秋葉、武部、曾我、鑑識、カメラマン、清水、続く。

菜々子「GO」

大きなベッド、小さなベッドがある、棚には医療器具、奥には医療機器、小さなベッドの横に鎖が見える。

菜々子、駆け寄る。

少女が小さなベッドの陰に鎖で繋がれている。

菜々子「中学生くらいの女の子がいました」

武部、体を揺さぶるが起きない。かかんで呼吸、脈を確認、ほっとしている。

武部「良かった。生きてるぞ、班長、救急車を頼みます」

菜々子、優子、安堵している。

菜々子「お嬢さん、ごめんなさい、体を見せ

てくれる？」

菜々子、少女の体を調べている。

菜々子「傷跡が足と腕にあります。幸いにもお腹や胸は無傷です」

鑑識2名、鎖を外している。

カメラマン、撮影している。

鑑識1「この子は我々ににまかせて、北田を追ってください」

武部、菜々子、曾我、秋葉、出ていく。

○同・入り口

鑑識2、少女を抱えて入口に運んでいく。

久慈、入口下で待っている。

鑑識2と久慈、ゆっくり少女を運び上げていく。

坂本 スマホに話している。

坂本「古賀さん、監禁されてた少女を発見。

今からすぐに下ろします。ので救急車を頼みます」

スマホ（古賀）「状態は？」

坂本「生きていますが、麻酔をうたれている  
ようで、意識がありません」

久慈、少女を抱えている。

鑑識2、再び降りていく。

坂本「久慈！少女を麓まで運べるか？ 喜

屋武も連れていけ、少女を怪我させるな！」

久慈、喜屋武、少女を抱えながら慎重  
に山を降りていく。

○同・4つ目の部屋・付近

菜々子、武部、曾我、秋葉、散らばっ  
ている。

カメラマン、撮影している。

菜々子「縄梯子がまたありました。けっこう  
長い、上に行けます」

曾我「奥にもトンネルがある」

秋葉「左にも通路がある」

武部「くそったれ！ 班長！ 三手に分かれ  
て追うしかないのですが、単独行動になっ

てしまいます」

坂本「応援がもう誰もいない、単独で行くしかないが慎重にな」

菜々子、武部、上へ行く。

曾我、奥へ、

秋葉、左へ、

カメラマン、清水、戻っていく。

○同・山・中

榊原、軽快に警察犬の後を追っている。  
三瀬、遅れている。

372°

○同・北田の隠れ家・入り口

坂本 スマホに話している。

坂本「どうやら北田は山中に逃げている模様、  
入口が4つあり、どこから出たか不明」  
スマホ（古賀）「わかった」

○同・山・中

捜査員、一斉に山を登っていく。

○同・山の麓

捜査一課長、無線で話している。  
群馬県警本部長、部下に指示を出して  
いる。

古賀、空を見上げている。

○同・山・空中

観測員1、話している。

観測員「了解です。低空で探します」  
ヘリコプター降下していく。

○同・北田の隠れ家・奥の縄梯子

菜々子 登っていく。

武部、続いている。

○同・奥の通路

ジェットファンが大きい音を立ててい  
る。水が大量に置いてある。  
曾我、さっさと進んでいく。

○同・左の通路

秋葉、細いトンネルを慎重に進んでいく。

○同・奥の縄梯子

菜々子、手をぶらぶらさせている、下を見ている。

菜々子「まだ続いています、武部さん、大丈夫ですか？」

武部「早く行け！」

374

○同・山・頂上手前

榊原、警察犬を追っている。

三瀬、ハンドラー、カメラマン、遙か後ろにいる。

頂上に男がいる。

榊原、人影が見えている。

警察犬、吠えながら猛然と山を登っていく。

榊原「とうとう見つけたぞ」

○同・山・空中

観測員2、頂上を見ている。

男が頂上にいる。

観測員2、無線に話している。

観測員2「山の頂上付近に男が見えます、後

方100mから警察犬と捜査員1名が男に

向かって走っています、男が北田かどうか

はわかりません」

○同・山の麓

捜査一課長、古賀、群馬県警本部長、

固唾をのんで見守っている。

捜査一課長「上に逃げたら袋のネズミだな」

○同・山・空中

観測員1、無線に話している。

観測員1「警察犬、警官1名がぐんぐん近づ

いています。男は右手を上げて何かをして

います。男の足元にあるのは？ 何かな？

あーあーハンダグライダーです」

観測員 2 「私も確認しました。ハンググライ  
ダーを地面に広げています。ハーネスを着  
けてから背負いました。警察犬と捜査員は  
10m 後ろです」

○同・山の麓

捜査一課長、古賀、群馬県警本部長、  
気が気でない。

捜査一課長「おい！ 冗談だろ、警察犬、間  
に合ってくれ」

○同・山・空中

観測員 1、無線で話している。

観測員 1「今まさに飛び出そうとしています、  
あつ！ 飛びました、警察犬、捜査員が立  
ち止まって呆然としています」

○同・山の麓

捜査一課長「げー」

古賀「どうする」

○同・山・空中

無線から捜査一課長の声が聞こえる。

無線（捜査一課長）「追え！」

観測員1「追いますが、150mの距離を取ります、近づくと落下の恐れがありますので」

○同・山の麓

捜査一課長、部下に命令している。

捜査一課長「捜査員は全員、山から下りろ、車まで走れ」

捜査員たち、慌てて山を下っていく。

古賀「叩き落とせないのか！日本の警察は犯人を殺さないことをわかってやがる」

群馬県警本部長、上空を指さしている。

群馬県警本部長「あれだな！こちらからも見える、速いわ」

○同・空中

観測員1「非常にまずい状況です。上昇気流

に乗って高度を上げています。高度が上がれば一気に滑空しそうです。ハンググライダーは時速は100km以上出ます、飛び立つ前に右手を上げていたのは風を読んでいたと思います」

観測員2「このまままっすぐ行くとすれば・・少し待ってください、わかりました！ 高崎方面です」

○同・山の麓

捜査一課長「全員、高崎に向かえ」

捜査員たち、慌てて降りていくが・・渋滞している。

無線（捜査員）「前がつかえていて、どうにもなりません」

群馬県警本部長、電話している。

群馬県警本部長「課長、北田が高崎方面にハンググライダーで向かっている。余ってる警官を高崎に今すぐ行かせろ」

スマホ（課長）「無理です。そちらにありった

け回しました。パトカーもありません」

群馬県警本部長「なんとかしろ！」

無線（観測員2）「小さな山を越えました。右に旋回したり、左に旋回したりですが、右に少しずつ進度を変えています、そのままだと高崎ではなく藤岡です」

群馬県警本部長「藤岡に変更だ」

スマホ（課長）「藤岡には交番が2つ、駐在所が4つあります、自転車では行けませんが」

群馬県警本部長「行かせろ」

スマホ（課長）「藤岡のどこへ？ 藤岡は東西

379

18 km、南北20 kmですよ」

群馬県警本部長「藤岡しか今はわからないがへりを目標にしろ」

○同・空中

観測員1「ハンングライダーの高度が下がってきました。低空飛行しています、まもなく着地しそうです。場所は藤岡です」

無線（群馬県警本部長）「藤岡のどこなんだ？」

観測員 1 「少し、待ってください」

無線（群馬県警本部長）「北田の服装を知らせろ」

観測員 2 「上がグレイ、ズボンが黒です」

○同・山・頂上

菜々子、武部、坂本、警察犬、ハンドラー、清水、カメラマン、頂上で佇んでいる、

榊原を三瀬が慰めている。

三瀬 「惜しかったな。お前はよくやったと思う」

榊原、悄然としている。

○同・空中

観測員 1 「降りました。ハンダグライダーは捨てて、走っています。自転車に乗った女性を引きずり下ろし、その自転車で逃走中、場所は JR 群馬藤岡駅近辺」

○同・山の麓

捜査一課長、無線で話している。

捜査一課長「へりは着陸できないのか」

無線（観測員1）「駅前ですよ、無理です」

捜査一課長「ロープとカラビナで降ろせないのか」

無線（観測員1）「そのような訓練は受けていません」

捜査一課長「高度を下げて飛び降りろ！」

無線（観測員1）「できません」

群馬県警本部長、スマホで話している。

群馬県警本部長「JR群馬藤岡駅に交番の巡査を行かせろ」

スマホ（課長）「はい」

捜査一課長、意気消沈している。

捜査一課長「ダメだ 逃げられる」

○同・山・頂上

久慈、喜屋武、秋葉、曾我、登ってくる。

坂本、無線を聞いている。

坂本「久慈を連れて来るんじゃない。藤岡なら防犯カメラがあり、アーモンドアイのそばにいればなんとかあったかもしれない」

久慈「そうかもしれませんが、多分無理でしょう。だって坂本班は頂上に取り残されているんだから」

坂本「モトクロスバイクで追わせるべきだった、曾我を突入させたときにちらっと思っただのだが、人が足りなかった」

榊原「俺がなんとかできたのに、もう少しだったのですが」

三瀬「ハンダグライダーを事前に見つけていれば、くそ！大垣にどやされるな」

菜々子、泣いている。

優子、菜々子の肩を抱いている。

菜々子「悔しい」

優子「少女を助け出せたのは大手柄じゃないですか」

優子、坂本に向かって、

優子「取材させていたただいてありがとうございます  
いました」

坂本、うなずいている。

優子、カメラマン、山を下りていく。

○同・空中

観測員1「自転車を捨てて徒歩で逃げていま  
す、ショットピングセンターに入ってしまった  
ました」

○同・道路・パトカー・中

捜査一課長、古賀、群馬県警本部長、  
無言。

○同・山・中

清水、カメラマン、下っていく。

カメラマン「逮捕はできなかつたけど、面白  
い絵が取れています。下にいたカメラマンが  
ハンングライダーが飛ぶのを撮影できたよ  
うです」

清水「視聴者は喜ぶわ。逃げられたことを批判しないわけはいかないけど、事実をそのまま伝えたい。そして助かった少女に取材するわよ、病院に行きましよう」

○同・空中

観測員2「見失いました、駅も近いし、バスやタクシー、なんだって乗れてしまいます、警官の姿はありません」

○同・パトカー・中

捜査一課長、俯いている。  
古賀、宙を見つめている。  
群馬県警本部長、スマホに怒鳴っている。

○同・山・頂上

坂本「1週間の努力を無駄にしてみました。  
指揮官失格だな」

久慈「必ず俺がまた見つけます」

坂本「帰ろう」

○同・山・中

久慈、菜々子、話しながら下りていく。

久慈「今日は望月さんのドラマが放映される  
んで生徒さんがたくさん来ます。兼光さん  
も是非」

菜々子「今日だったんですね。行きます」

○田園調布・病院・大垣の病室（夜）

坂本、武部、曾我、秋葉、榊原、三瀬、

見舞いに来ている。

沙羅羅、付き添っている。

大垣、ベッドに座っている。

坂本「どうや？」

大垣「じっとしていると痛みはありません、  
リハビリは真面目にやってるべ、ただ以前  
のように走るのは無理のようです」

三瀬「そうなんか！」

大垣「北田は捕まえた？」

三瀬「あかん、逃げられた」

坂本「大垣がいてくれたら捕まえられた」

大垣「俺がいないとダメだっぺ」

○久慈宅・リビング（夜）

久慈、菜々子、疲れた様子で帰ってくる。

生徒（中年女性）11名、生徒（中年男性2名）、弥生、瞳、ソファで歓談している。

75インチテレビが置かれている。キ

ツチンには大型冷蔵庫があり、小さい

冷蔵庫はなくなっている。

2名のシェフが料理を作っている。サーバー1名が手伝っている。

テーブルに並べられているのは生ハム、カプレーゼ、イタリアンオムレツ、ローストポークのサラダ、フライドポテト、ケーキ、ワイン、ビール、ジュース、大きい鯛が置かれている。

花が生けられている。差し入れが積まれている。

菜々子、久慈、全体を見て、目を大きく見開いている。

菜々子「うわー、ものすごいことになっていく」

瞳「でしよう、お帰り、間に合ったじゃない、仕事はどうだった？」

菜々子「最悪です」

瞳「そんなときもある。もうみんな今か今かと待ち構えているわ」

久慈、菜々子、生徒たちに挨拶している。

弥生「さあ、全員揃ったみたいね。いただきましょう」

菜々子、キッチンに走っていく。

菜々子「うわー、お腹がぺこぺこ、食べるー」

瞳「ナナさん、慌てすぎ！」

生徒1、久慈と料理を取りながら、話

している。

生徒1 「大阪のおもしろい兄ちゃん、今日は来てへんの？」

久慈 「三瀬さんのこと覚えてるんですね、誘えばよかったな」

生徒1 「あらまあ、残念ねー」

生徒たち、キッチンでお皿により分け  
ている。

菜々子、何を食べるか迷っている。

シェフ、メインディッシュを作っている。

388

菜々子 「どれだけ豪勢なの！」

生徒2 「当たり前でしょう、先生がテレビに出るのだから」

菜々子 「わかりますけど」

久慈、片っ端から食べている。

久慈 「おいしいおいしい」

瞳、テレビをつける。

久慈、見入ってる。

久慈 「迫力あるなあ」

生徒3 「もうすぐ始まるわ」

久慈、立ち上がり、大型冷蔵庫を開けて、中を覗いている。

久慈 「大きいな、観音開きだし、これは高そう」

弥生、小声で、

弥生 「40万だったわよ」

久慈 「うひょ」

生徒たち、テレビの前に集まってきた。

生徒1 「久慈さん、私の隣にどう、特等席やで、さあ始まるわよ。望月さん出演のドラ

マ」

久慈、生徒1の隣に座っている。

テロップが画面上部に流れている、(女性を監禁して手術を繰り返した令和の鬼畜・北田、またしても逮捕できず、再び逃走)

瞳 「どうしたのかしら」

画面がスタジオに切り替わる。

アナウンサー 「番組の途中ですが、ニュース

をお伝えします。令和の鬼畜・北田が群馬県藤岡の山中に潜伏しているという情報があり、警視庁、群馬県警の警察官250人態勢で逮捕に向かいましたが、再び逃走しました。そのため本日は番組内容を変更して北田関連のニュースをお伝えします」

久慈、菜々子、椅子からずり落ちそうになっている。

瞳「群馬県って！もしかしてあなたたち北田をずっと追いかけていたの」

菜々子「そうなんです」

生徒2「北田に逃げられたのはあなたたちのせいなの？」

久慈「責めないでください」

生徒2、本気で怒っている。

生徒2「北田の顔がまたでかでかと！反吐が出るわ」

生徒たち、あちらからもこちらからも、話し出す。

望月、心配そうに、

弥生「私のドラマはどうなるの？」

生徒3「来週になったって」

弥生「あれま、それじゃ今日は孝志と兼光さんのニュースに変更になったんだ」

生徒1「拉致された少女を助けたって言うてる。少女にとってはヒーローやんか」

菜々子が先頭で縄梯子を降りていく映像。

瞳「ナナさん！あなた！先頭で突っ込ん

だの？後ろ姿だけどあなたよね」

菜々子「ばれた！」

生徒2、菜々子の顔とテレビを交互に見ている。

生徒2「かっこいい」

弥生「さまになってる。はちきんらしいわ」  
久慈が山中でスマホで撮影している映像。

生徒1「あれって久慈さんじゃない、顔が映ってるわよ、スマホで撮影しているわ」

瞳、画面をじっと見て、

瞳「こらっ、孝志！　なぜスマホで撮影なんてしてるのよ、ものすごくかっこ悪い」

久慈、俯きながら、

久慈「振り返ったら警官が山を取り囲んでいて、それが壮観だったもので、ついつい、まさか撮影されてたとは」

瞳「ばか」

生徒3「ハンググライダーで逃げたんだ、撃ち落とせばよかったのに」

生徒5「そうよねー」

菜々子「清水さんが出てる」

久慈、他のチャンネルに切り替える。

菜々子「こっちも清水さん、これって同じ番組を放送してる」

久慈、さらに切り替える。

久慈「そういうことだったんだ、スクープにはならないって言ってたから、すべての民放が同じ内容なんだ」

生徒4、スマホをチェックしている。

生徒4「SNSは大変な盛り上がり、というか

大炎上！ 先頭の女性警官は川崎の事件で  
お手柄だった人じゃないかって、女性警官  
の鑑ねー」

生徒たち、口々に叫んでいる。

菜々子「SNSなんて金輪際、見ない、多分今  
回はボロクソに非難されてる」

生徒1「ちょっと静かに、それでさ、来週も

同じ時間にもう一度パーティーせえへん？

望月さんのドラマ延期でしょ！ いい？」

望月「いいの？ お金かかるでしょ」

生徒1「いいに決まってるやん、今日はドラ

マは見れんかったけど、めっちゃおもしろかつ

た」

久慈「それなら、どうぞ、どうぞ」

菜々子、瞳「やったー」

○トランプタワー麻布・エントランス（夜）

生徒たち、帰っていく。

瞳、菜々子、久慈、弥生、見送ってい  
る。

コンシエルジュ、ガードマン、久慈を見て、にっこり笑っている。

コンシエルジュ「タワマン刑事！ テレビ見たよ」

久慈、右手で目を覆っている。

○麻布・コンビニ（夜）

菜々子、化粧品を買っている。

瞳、久慈、見ている。

店員、久慈を見て、

店員「北田を捕まえられなかったのはタワマ

ン刑事のせいだな。他の警官は一生懸命な

のに、スマホで撮影してたんだから、SNS

で大炎上してるよ」

瞳「当然だよ。カッコ悪かったでしょう」

久慈、無視している。

○トランプタワー麻布・プール（夜）

水面が地平線と一体化して見える。絶

景、プールサイドにバーがある。

ラグジュアリーなデッキチェア、プラ  
イベートガバナがある。

水着でプールサイドバーに腰かけて、

瞳、フロズンマルガリータを、

菜々子、フルーツパンチを、

久慈、モヒートを飲んでいる。

弥生、ビーチカバーアッパを着て、バ

タフライピーミルクティを飲んでいる。

瞳「さすが！ トランプタワー麻布のプール」

菜々子「感激」

久慈「やっと来れたな」

久慈、菜々子、瞳、ドリンクを置き、

走り出す。

次々にプールに飛び込んでいく。

弥生、楽しそうに見ている。

終わり シーズン2に続く